



北海学園大学同窓会結成70周年記念誌

はじまりの10年



同窓会結成七十周年への祝辞

学校法人北海学園 理事長
安酸やすかた 敏眞としまさ



北海学園大学同窓会結成七十周年を迎えられるにあたり、北海学園理事長として心からのお慶びを申し上げます。

今回は「はじまりの十年」と題して、二期生（昭和三十年卒）から十期生（昭和三十八年卒）までの十四名の同窓生が、在学当時の思

い出を語って下さる、と伺っています。わたしは昭和二十七年生まれですので、すでに物心がついていて、その当時のことを自分の幼年時代を振り返りそれと重ね合わせながら、ある程度想像できるつもりです。北海道とわたしが生まれ育った鳥取県では、置かれていた状況は多少違うでしょうが、いずれにせよ日本はまだ決して豊かではありませんでした。

そういう時代ですので、「はじまりの十年」は学習環境が整っておらず、また戦後の貧困は脱していたとしても、飽食や贅沢の現代とはほど遠い現実が、そこそこに点在していたと思います。初期の同窓生の方々は、そうした現実と日々格闘しながら学び、学園大学の礎を築いてくださいました。二期生だった森本正夫前理事長や名塩良一郎同窓会前会長代理がこの世を去られ、当時のことを知る卒業生は少なくなっています。

だからこそ、いま「はじまりの十年」に思いを馳せ、先人たちのご苦労に感謝しながら、「これからの十年」に向けて新たに決意しなければなりません。その先に北海学園創基百五十年が控えています。みんなで力を合わせて頑張りましょう。

北海学園大学同窓会「豊平会」結成七十周年を祝して

北海学園大学 学長 森下 宏美^{もりした ひろみ}



北海学園大学同窓会「豊平会」のご結成七十周年、まことにおめで
とうございます。

一九五四年の結成以来、「豊平会」は、卒業生の絆を大切にし、相
互の親睦を深めてこられました。多様な形態の支部組織が全国に作

られ、活発に活動されております。学長になり、数多くの支部の会
合にお招きいただき、親しく交流する機会を得ることができました
ことを、大きな喜びと感じますとともに、卒業生のみなさまの母校
への思いに接し、元気づけられております。また、本学の学生・院
生に対しましても、奨学金の給付、課外活動へのご支援、百円食堂
のご提供、コロナ禍のもとでの食糧配布など、さまざまなお支
援をいただいております。あらためて感謝申し上げます。

少子化・人口減少が急速に進む中、大学運営は厳しさを増してお
りますが、それと同時に、地域課題の解決のために大学が果たすべ
き役割も大きくなっております。北海道に根ざした高等教育機関と
して歴史を刻んできた本学が、これからの地域社会の発展のために
その役割を全うするうえで、卒業生のみなさまの各界でのご活躍は
なよりの力となります。みなさまとの絆をより強いものとし、北
海学園大学のさらなる発展を期してまいりたいと思っております。最後に、
みなさまのご健勝、そして、「豊平会」のますますのご隆盛をご祈念
申し上げます、お祝いの言葉といたします。

はじまりの十年発行に寄せて

北海学園大学同窓会 会長 関 寛せき ひろし

(法学部法律学科昭和四十五年卒・四期生)



北海学園大学同窓会は、お陰様で本年結成七十周年を迎えることができました。

本学は、昭和二十五年に短期大学を開学し、二年後の昭和二十七年

に道内初の四年制私立大学として歩みを進めました。

後に、昭和三十五年の酪農学園大学に続き、藤女子大学(三十六年)、北星学園大学(三十七年)がそれぞれ四年制大学として開学するまで、不撓不屈の精神をもってその教育にあたり、先駆的役割と時代の要請に応えて参りました。

戦後の混乱も漸く落ち着きを取り戻しつつあったこの時代、教育への渴望がどれほどのものであったかを、諸先輩はインタビューの中で語っています。また、校舎は間借り、施設もお金もない大学であったと述懐されています。文字通り手作りで大学の道筋を開いていた大先輩に改めて敬意を表するしだいです。

同窓会「豊平会」は、一期生の門出を祝うため、二期生と話し合い前途を祝う会を行うべく結成されたものでした。

それから七十年、同窓生は十万名に迫るまでになり、その活躍の場は、道内にとどまることなく全国さらには海外にまで及びます。

私達は、こうした同窓を支えることが使命であります。

皆様におかれましては、引き続き北海学園大学の発展と私ども同窓会に変わらぬご厚情を賜りますようお願い申し上げます、発刊のご挨拶といたします。

目次

同窓会結成七十周年への祝辞	2
学校法人北海学園理事長 安酸 敏眞	2
北海学園大学同窓会「豊平会」結成七十周年を祝して	3
北海学園大学学長 森下 宏美	3
はじまりの十年発行に寄せて	4
北海学園大学同窓会会長 関 寛（法学部法律学科昭和四十五年卒・四期生）	4
1 北海英語学校創立1885 北海中学校設立1905	11
2 豊平校地に移転・校舎新築	12
3 各種学校北海学院1949・北海短期大学1950・北海学園大学1952開学	13
4 待望の校舎1号館が完成1955	14
5 整備が進みゆく豊平校地	15
6 校舎2号館1963・3号館1965完成	16
札幌北海学院設置認可	17
北海学院設立認可申請書・北海短期大学設置認可	18
北海学園大学設置認可・北海学園大学学部増設認可	19

シベリア抑留から復員、大学へ 学ぶ機会を与えてくれた北海学園大学に感謝	20
神馬 文男（経済学部経済学科昭和三十年卒・二期生）	20
美術部員が、演劇の舞台美術から役者も兼ねる そこで人生の伴侶をみつける	26
土井 二郎（経済学部経済学科昭和三十一年卒・三期生）	26
思い出深い定期戦 あのとときの謎は、今もなお	30
村上 泰彦（経済学部経済学科昭和三十一年卒・三期生）	30
「私たちも応援団を作らないとだめだ！」有志が集まり応援団を結成	33
渡邊 伸也（経済学部経済学科昭和三十一年卒・三期生）	33
「北大に負けるな」とESSを立ち上げる 米兵から英語を学んでスキルアップ	36
高橋 勤（経済学部経済学科昭和三十一年卒・三期生）	36
三期生 四人組座談会	40
（土井二郎さん、村上泰彦さん、渡邊伸也さん、高橋勤さん）	40
はみ出し者 のような 新しい時代の女学生として	45
栗田 紀子（経済学部経済学科昭和三十一年卒・三期生）	45
学生時代に学帽と制服で日本列島縦断の旅 遊んでいたことばかり思い出す	51
澤 定夫（経済学部経済学科昭和三十一年卒・三期生）	51
岡田屋が私たちの「学園文化」すべてはここから繋がっている	56
早坂 久良（経済学部経済学科昭和三十一年卒・四期生）	56
「山は学校、山小屋は教室」部員集めからはじめた山岳部の山小屋管理	66
山際 廣昭（経済学部経済学科昭和三十一年卒・四期生）	66
銀行と大学の二足の草鞋 初志貫徹を果たして夢を現実させる	72
池脇 利昭（経済学部II部経済学科昭和三十一年卒・一期生）	72

応援団で培われた物怖じしない心 学ランを着て雪まつりの交通整理もやった

桑山 博年（経済学部経済学科昭和三十四年卒・六期生）

富士フィルムへ通った 出向社員のような学生時代

小川 眞治（経済学部経済学科昭和三十六年卒・八期生）

どんなことにも絶えずチャレンジ 夢とビジョンを求めて行動を

片桐 理（経済学部経済学科昭和三十八年卒・十期生）

多くの社会人が学んだ土木短大Ⅱ部 技術も人脈もここで培われた

横谷 貞夫（北海短期大学土木科Ⅱ部昭和三十九年卒・一期生）

語り継ぐ北海学園の教育者 松葉杖の社会科教師 林和吉先生（経済二期）

林 和吉（経済学部経済学科昭和三十一年卒・三期生）

編集後記

北海学園大学同窓会 事務局長 木村 勝照（経済学部経営学科昭和五十二年卒・九期生）

参考資料／写真・資料提供／編集／制作協力

1 北海英語学校創立 1885 北海中学校創立 1905



写真は北海英語学校移転後、明治27年に開業した興農園（後の五番館）時代のもの

1885（明治18）年に廃校となった南2条西1丁目の豊振夜学校校舎を借用し、札幌農学校の予科入学を目指す中等教育機関として、同年3月北海英語学校が創立された。生徒は女子1人を含む140余人、1年2期制、修業年限4年の夜学として発足した。

1885（明治18）年 北海英語学校創立

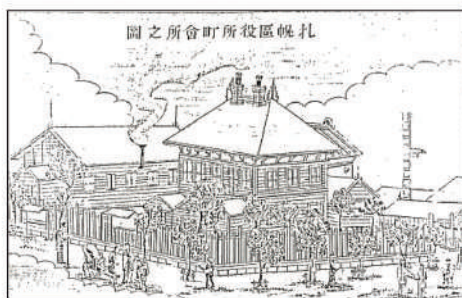
1887（明治20）年4月、北4条西1丁目の旧巡査合宿所を借り受け2階に寄宿生を置き、翌1888（明治21）年6月、正式に寄宿舎を置いた。

同年11月に敷地を購入、建物の無償払い下げを受けた後、校舎新築に着手し1889（明治22）年2月に落成した。

寄宿舎の設置と校舎の新築移転 北4条西1丁目



1894（明治27）年、スミス女学校は北4条西1丁目の北海英語学校の校地・校舎を購入して移転し、校名を北星女学校に改めた（写真は北星学園提供）



札幌区役所町会所の図

1894（明治27）年8月、大通西4丁目の札幌区町会所払い下げ建物を借用後9月に増改築を行い、1895（明治28）年1月に移転、開校式を行った。その後、建物は払い下げを受け（取得時期不明）、1901（明治34）年5月に中学部（南5条東2丁目）創立後も北海英語学校の夜学部校舎として使用していたが、1907（明治40）年5月の大火により校舎は焼失し、北海英語学校は廃校を余儀なくされたものと思われる。

1894（明治27）年 大通西4丁目に移転

1901（明治34）年4月、北海道庁に3年制の中学部設立認可申請を行い認可を受けた。

中学部の校舎は旧豊水尋常小学校校舎（南5条東2丁目）を借用し、5月16日に入学式が行われた。

*本学園では、この5月16日を創立記念日としている。

1901（明治34）年 北海英語学校中学部を設立



1905（明治38）年3月、文部省から5年制中学校の認可を受けて、校名を私立北海中学校に改称した。

1905（明治38）年 私立北海中学校に改称

児童が描いた旧豊水尋常小学校校舎の絵（旧豊水小学校所蔵）

2 豊平校地に移転・校舎新築



1906（明治 39）年、豊平校地（31,400 坪）を取得。

1908（明治 41）年、校舎建築に着手。
1909（明治 42）年、9 月校舎完成。

1909（明治 42）年 新校舎完成

1908（明治 41）年 8 月、教室 2 棟と雨天体操場の建築に着手し 10 月に完成、11 月 3 日仮移転式が行われた

1909（明治 42）年 9 月、表門、玄関、事務室、機械室、特別室、校長室等が完成
*現在は開拓の村に移築、保存されている

1920（大正 9）年 3 月、文部省から甲種実業学校の認可を受け札幌商業学校が開校し、4 月 8 日入学式が行われた。
当初は北海中学校校舎を使用していた。

1920（大正 9）年 札幌商業学校創立

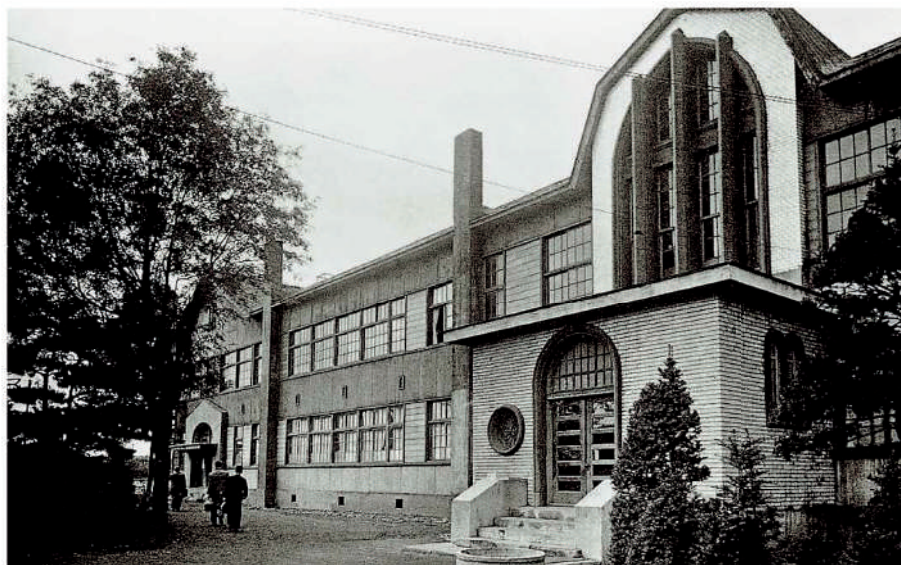


1923（大正 12）年 9 月に完成した札幌商業学校校舎



1936（昭和 11）年頃の北海中学校・札幌商業学校の校舎風景

3 各種学校北海学院 1949・北海短期大学 1950・北海学園大学 1952 開学



開学時の校舎 札幌商業高校校舎の2階教室を使用

1949（昭和24）年 各種学校北海学院が開学し、5月17日 講義開始、8月7日 開学式が行われた。

1950（昭和25）年 北海短期大学開学、4月28日 入学式が行われた。

1952（昭和27）年 北海学園大学開学、4月21日 入学式が行われた。

北海学院・北海短期大学・北海学園大学の開学時は札幌商業高校（昭和23年札幌商業学校から新制高校となる。北海中学は北海高校となった）校舎の2階教室を使用していた。

1938（昭和13）年に建築され旧札幌商業高校校舎の愛称で親しまれた校舎であったが、校舎8号館建築のため2019（平成31）年3月に解体された。



1953（昭和28）年11月に大学発足後の初めての本格的建築物として図書館が完成



1953（昭和28）年 豊平校地

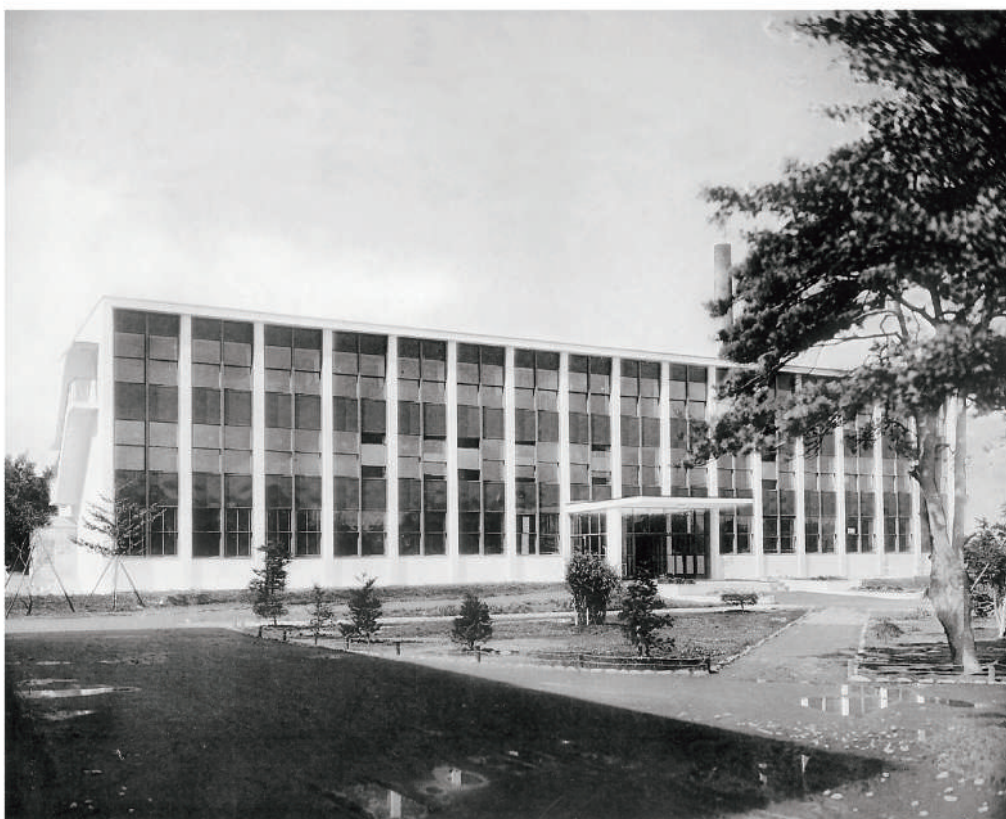
キャンパス全景 1954 北海高校卒業アルバムより、1953（昭和28）年撮影

4 待望の校舎1号館が完成 1955



1号館完成間もない豊平校地

1955（昭和30）年 大学案内掲載写真 * 1955（昭和30）撮影



完成間もない北海道大学校舎1号館と前庭 1955（昭和30）年撮影

5 整備が進みゆく豊平校地



1959（昭和34）年～1961（昭和36）年頃の豊平校地

大学1号館完成後に北駕文庫閲覧室・石造り書庫、北海高校校舎を大学に移築

1955（昭和30）年 大学1号館【①】が完成

北駕文庫閲覧室【②③】を大学1号館西側に、石造り書庫【④】を現在地に移築

1957（昭和32）年 明治42年建築の北海高校（旧北海中学校校舎）【⑤】を大学1号館西側に移築

1958（昭和33）年 北海高校校舎1号館【⑥】が完成

1959（昭和34）年 昭和6年建築の北海高校（旧北海中学校）2階建校舎の南側部分【⑦】を裏の藪付近に移築

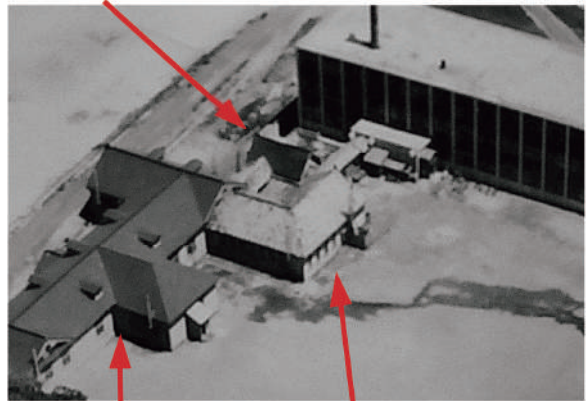


校舎1号館西側に移築された北駕文庫閲覧室及び北海高校校舎



移築された北海高校2階建校舎⑦を大学部室棟として使用していた頃、1982年撮影。
文化系部室棟完成翌年の1984（昭和59）年度に解体された

南西側から撮影した校舎等の拡大写真 1958（昭和33）年撮影
移築後の北駕文庫閲覧室



移築された北海高校校舎

1916（大正5）年建築の北駕文庫閲覧室（記念館）
移築後は食堂・ホールとして使用された

6 校舎2号館1963・3号館1965完成



1966（昭和41）年～1967（昭和42）年頃の豊平校地

1963（昭和38）年2月に校舎2号館が、1965（昭和40）年11月に校舎3号館が完成
※体育館や図書館が建築される前である * 1969（昭和44）年北海道高校卒業アルバムより



1963（昭和38）年～1965（昭和40）年頃。
※校舎2号館が完成してから3号館建築に着手するまで校地の状況がわかる貴重な写真である

校舎2号館と1号館



1968（昭和43）年度 * 入試要覧表紙

3号館と1号館

昭和二十三年十二月二十八日 札幌北海学院設置認可

予学第二九八七号 指令

財団法人苗邨学園理事長 佐藤吉蔵

昭和二十三年十二月一日申請の札幌北海学院を設置することは学校教育法施行規則第二条によりこれを認可する。

昭和二十三年十二月二十八日

北海道教育委員会

校管第 89 号

北海短期大学設置者
財団法人 北海学園

昭和 24 年 1 月 15 日付で申請の北海短期大学設置のことは、大学設置審議会の答申に基づいて、学校教育法第 4 条により、次のように認可します。

昭和 25 年 3 月 14 日
文部大臣 高 瀬 荘 太 郎

記

1. 名 称 北海短期大学
2. 位 置 北海道札幌市豊平 8 条 7 丁目 6 0 番地
3. 学 科 経済科 第 1 部。同第 2 部
4. 修業年限 2 年 第 2 部は 2 年以上
5. 開設学年 第 1 学年
6. 開設時期 昭和 25 年度
7. 設置認可条件
(1) 自然科学関係の実験・実習・施設設備の充実をはかる

昭和二十五年三月十四日 北海短期大学設置認可

北海学院設立認可申請書

来る昭和二十四年四月より北海学院を開設致し度別紙学則其の他関係書類添付申請いたします。

昭和二十四年一月二十日

札幌市豊平八条七丁目六拾番地

財団法人苗圃学園理事長 佐藤吉藏

北海道知事 田中敏文 殿

昭和二十四年一月二十日 北海学院設立認可申請書

校大第 35 号

学校法人 北 海 学 園

昭和27年10月10日付で申請のあつた北海学園
大学学部増設のことは、大学設置審議会の答申に基
いて、学校教育法第4条により、下記のように認可しま
す。

昭和28年1月31日

文部大臣 岡 野 清 豪

記

1. 増設学部の名称 経済学部第2部経済学科
2. 増設学部の位置 北海道札幌市旭町8丁目
60番地
3. 増設学部の修業年限 4年以上
4. 増設学部の開設年次 第1年次
5. 増設学部の開設時期 昭和28年度
6. 増設学部の認可条件
(1) 専任の教授陣容を補充すること。

昭和二十八年一月三十一日 北海学園大学学部増設認可

校管第760号

学校法人 北 海 学 園

昭和26年10月10日付で申請のあつた北海学園
大学設置のことは、大学設置審議会の答申に基いて、
学校教育法第4条により、下記のように認可します。

昭和27年3月5日

文部大臣 天 野 真 祐

記

1. 名 称 北海学園大学
2. 位 置 札幌市豊平8条7丁目60番地
3. 学 部 学 科 経済学部、経済学科
4. 修 業 年 限 4 年
5. 開 設 年 次 第1年次、第2年次、第3年次
6. 開 設 時 期 昭和27年度

昭和二十七年三月五日 北海学園大学設置認可

シベリア抑留から復員、大学へ 学ぶ機会を与えてくれた北海学園大学に感謝

第二次世界大戦後の混乱期、道内で四年制の大学は多くはなかった。学
ぶ意欲のある復員軍人が、開学まもない北海学園大学に入学した時期だ。



経済学部経済学科
昭和30年卒・2期生

じんば ふみお
神馬 文男

貧農の口減らしと中学卒の資格取得のために予科練へ

出身は月形で、百姓の小作農の貧乏な家の長男坊です。まだ汽車も通
てなかった時代。小学校を卒業して中学に行きたいと思っただけで、うち
が貧乏で行けませんでして。非常に苦しんでいたところ、学校の先生が海
軍飛行予科練習生（予科練）を勧めてくれました。予科練に入ってそこで
勉強をすれば、中学卒業の資格がもらえます。官費で衣食住もタダ。中学
に行きたくてバタバタしていた私は、貧農で兄弟が多くて口減らしにもな

ると思い、予科練に飛びついたわけです。

一九四一年の十二月一日に、十五歳で入隊しました。ところが、一週
間後の十二月八日に太平洋戦争が始まりました。まさに青天の霹靂です。
今でもそのときの複雑な心情をはっきり覚えています。教育は厳しくなり、
爆弾を抱えて敵の船にぶつかると、そういうことをやらなければいけな
くなった。当時の教育では「君のために尽くして死ぬこと」（「君」というの
は天皇）が名誉あることでした。それが親に孝行することと同じだと、そ
ういう教育を受けました。息子が死んだら親は泣くでしょう。その涙の色
はどんな色だったでしょう。そうして戦争が始まって、私は戦地に行きま
した。小学校を卒業したばかりの私と同じ年の者が、どんどん死んでいき
ました。戦争は命の奪い合い、絶対に繰り返してはいけません。

戦時中、私はフィリピンのダバオ、旅順などに行き、旅順に比較的長く
いたんですが、終戦間際に引き揚げて鎮海へ、鎮海から羅津にまわされま
した。羅津というのは朝鮮半島の一番北で、ウラジオストクのすぐそばで
す。私の記憶が正しければ、一九四五年八月九日にソ連が一方的に攻めて
きました。爆撃機が来て、爆弾をばんばん落とすっていった。当時は軍隊も
普通の民家に泊まっています、私は羅津の郵便局に泊まっていたんですが、
その近くに爆弾が落ちて、腰を抜かしました。本当にびっくりして、動け
なくなりました。人間ってというのは、弱いものです。

海軍零式水上偵察機の搭乗員となり、朝鮮半島に派遣されていた八月十
日、偵察機のトラブルで海に墜落し、数時間漂流することになりました。
辿り着いた先から大勢の日本人避難民と一緒に、徒歩で元山海軍航空隊へ
向かいました。その途中の八月二十日に終戦を知ることとなります。

戦争は命の奪い合い。あのとときの生き地獄を今でも思い出す

元山海軍航空隊に着くまでの間は、生き地獄。女の人は死んだ赤ちゃんを背負っていたり、埋める人もいました。持っているネックレスやイヤリング、腕輪を食べ物と交換をするんですが、交換する物がなくなったら、子供を中国人や朝鮮人のところに預けていました。あとから連れに来るからお願いします、と。元山海軍航空隊には日本人が、女も、男も、一般市民も、陸軍も、海軍の航空隊もみんな集まっていました。富坪のテント村に移動し、帰国の日を待ちました。

十一月十九日深夜、ソ連軍から「ヤポンスキー トーキョー ダモイハラシヨ？」（日本の兵隊よ、東京に帰る）と言われた言葉を信じ、興南を出港しました。しかし、我々は騙されたんです。その船は東京ではなく、旧ソ連の極東・ナホトカへ向かいました。乗せられた船の壁には釘で引つ掻いた文字で、「お前ら、はやく逃げろ」「騙された、ロシアに連れて行かれるぞ」と、あちこちに日本語で書いてありました。「シベリア抑留」の始まりでした。

厳寒・飢餓・重労働の三重苦。シベリアで多くの人が死んだ

私はドダゴの第一收容所というところに連れて行かれました。そこはテントで作った收容所です。零下三〇度にもなる所に、運動会のテントのような收容所があり、その中に詰め込まれました。死んだも死んだ、どんどん死んでいった。寒さと飢えと重労働による体力の限界で、最初の冬から翌年にかけて多くの人が死にました。我々は墓穴を掘って数体まとめ

て埋葬しました。穴を掘るとき、ツルハシやスコップは凍土で跳ね返ってしまいました。陸軍の兵隊だった元坊さんがいて、お経をあげて埋葬しました。

死者の多くはスッポンポンでした。それは、生前に自分の私物を友人に贈る約束をしていたためで、私たちはそれらを引き継いで大事に使いました。ソ連兵と物々交換をして、生活の糧にしたこともありました。

私の收容所は、羅津でよく面倒を見てくれた岩崎孝二郎海軍中尉が隊長になりました。岩崎中尉はアメリカの二世です。英語がペラペラで、学徒出陣で動員されて来た人で、私より長く收容されていたんじゃないかと思



森林伐採作業の様子（神馬さん提供）

います。戦争が終わってからはアメリカに行つて、銀行の頭取になったと聞いています。「これからは英語が必要だよ」と、「俺がアメリカに行つたら、神馬兵曹の娘さんを留学させてやるから」なんて話していましたね。

シベリアで足掛け三年、色々な作業をしました。道路工事、森林伐採、炭鉱作業など。「炭鉱で人が足りないから補つてくれ」とか、流動的に利用されたというのが実情です。炭鉱作業はソ連人が発破をかけたあと、ツルハシとスコップ

プを持って穴の中に入り、採炭して、トロッコに積む作業です。空腹と重労働でつからった。落盤事故で死者も多かったです。三交代制で休日無し、風呂無しでした。私はソ連の炭鉱で石炭を掘っているとき、二十歳を迎えました。

森林伐採作業は、針葉樹林帯がある所に連れて行かれることが多く、二人一組になって、ノコを引くのではなく押して切る。そうして木を伐採して、一立方メートルを一クボと言い、一人が二クボ、三クボやるのがノルマでした。大きい木を倒せば本数が少なくて済むけれど、枝払いなどの処理が非常に面倒です。小さい木は本数を多くやる必要があります。タイガ地帯は危険がいっぱいで、事故死もありました。

暇を見つけて、腰に下げた空き缶に湯を沸かしたり、野草や生物を捕って食べました。一日中働き、テント小屋では衣服と靴を身につけたまま寝ました。寒さと空腹で眠れないこともあり、自然と涙が溢れました。

炊炊所^{ほうすいじょ}という炊事をする場所がありました。朝明るくなつてから、樽にお粥を詰めてそれを担いで、各班に持ってきて分けるんです。陸軍の飯ごうに一センチメートルくらいのお粥が配給されました。それと、三百グラムほどの黒いパンが付くこともありました。パンは、パン工場からソ連兵が僕らの収容所の炊炊所まで持って来んですが、工場ではそれをソ連兵



炭鉱作業の様子 (神馬さん提供)

が盗み、残ったものが渡されます。当番が取りに行つて班に戻つてくると、そこでもまた一悶着ありました。お粥を樽に入れて持って来る途中で、他の兵隊が待ち伏せをしている。待ち伏せをして、バーツと取つて逃げて行く。食べ物を盗る人がいるなんて考えられないでしょう？ 命の奪い合いなんです。食べ物が無くなつたら終わりですから。

そのほかに食べ物というと、昆虫です。バッタ、キリギリス、コオロギ、そういうものがいれば捕つて、缶で煮て食べました。何回か食べましたけど、おいしかったですね。一番のご馳走は、蛇です。蛇は本当においしかったです。それからカエル。私はあまり食べませんでしたけれど。

空き缶、塩、スプーン。これが「三種の神器」でした。「USA」と書かれたソーセイジの黄色い缶詰の缶とか、朝鮮に行き来したときに拾った缶とかを弁当箱にして、腰に針金で結び付けて下げていました。それがあればお湯も沸かせるし、食器として使うこともできる。大した便利でした。私は舞鶴に帰つて来るまで、そういうものを大事にしていました。

岩塩^{岩塩}って見たことありますか？ 私はシベリアで初めて見ました。塩は海で取れるものだと思つていたけれど、山で取れるものもあるんですね。水砂糖のようなカケラになつていて、それをみんなが岩塩と言つていただけ、正式な名前はわかりません。昆虫などを取つて缶で煮るときに、その塩を入れて食べていました。唯一の味付けです。

スプーンは、伐採作業の端材を切つて作りしました。ナイフなんて無いので、炭鉱作業の鉄板のくずで掘つてスプーンにしてみました。

ようやく「ダモイ」。待ち受けていた厳しい現実

母は無事を祈り、陰膳を据えていた

一九四七年八月二十九日、二十一歳のときでしょうか。ついに帰国の機会を得ました。ナホトカから高砂丸という船に乗り、二晩くらいで舞鶴に着きました。船に入ったらすぐ裸にされて消毒です。何という消毒かわからないけれど、真っ白いお湯、水の中に二回入れられました。

国籍の確認などはありませんでした。舞鶴に入ったとき、私たちは住所を聞かれて、家に帰るまでの切符を買ったんです。それから、家に帰るまでのお金だと言われて三千元か、四千元ぐらい渡されました。そのとき

は、三千元も貰っていいのかとびつくりしました。日本を出るとき、キャラメルが十銭とか二十銭でしたから。蕎麦が六銭だったかな。これだけあれば十分暮らせるなあと思ってたけれど、家に着くまでになくなってしまいました。インフレだったんですね。

シベリアに抑留されていたときに、世界の赤十字社というところから捕虜（私たちは捕虜だと思っ

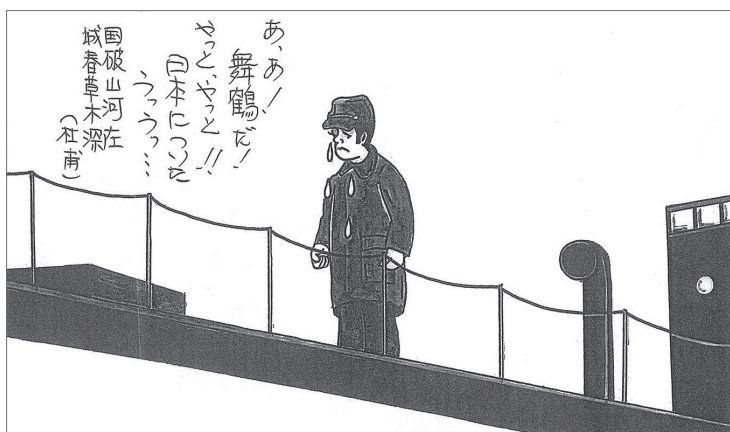
ていなくて抑留者だと思っ

ているんだけど）に対して、家族に通信するためのハガキを渡してくれたことがありました。私もそのハガキを貰ったんですが、戦争に負けて捕まった、そういう気持ちがあったので家に出すのが恥ずかしくて。だけど、なんとか家に知らせたかったので、親戚の家に出したんです。「僕は生きているから、大丈夫だと家に連絡してくれ」と。ですから親は、私が生きているということを確信していました。母は陰膳を用意して無事を祈ってくれていました。

私は口減らしのために軍隊に行つたと言いましたが、それほど兄弟が多くいました。すぐ下の兄弟は三、四人だったか、全員死んでいました。残っているのは若い子たちです。そこに私が帰ってきた。どうなると思いますか？ その頃は、農家が農地開放といつて、一時期潤っていた時期でした。私に対して「日本の英雄が帰って来た」と思いますか？ 「厄介者が帰って来た」と思いませんか？ 世間の反応もひどいもので、「赤く染まったんだらう」と言われるのが関の山でした。

念願叶つての勉強。北海学園大学には本当に感謝している

二十三、四歳のときに向学心を燃やして、私は北海学園大学に拾ってもらいました。この大学で勉強させてもらったことは、本当にありがたかったです。戦争に負けたとき、兵学校や陸軍士官学校、予科練に所属していた若者が、復員軍人として帰ってきてウヨウヨしていました。学ぶ場を失って、行き場が無かつたんです。そこを北海学園大学が救ってくれた。大学は他にも二つ、三つあったけれど、私立大学の四年制としてみんなの憧れの的だったのが北海学園大学です。それがあつたから、私は希望を持ってやっていけました。大学を出てからまた勉強をしたくて、北海道大



帰国の船の様子（神馬さん提供）

学の教育学部の研究生にもなりました。

小学校を卒業してから「勉強したい」と思ったなら、戦争は始まるわ、ソ連に引つ張られて行くわで、私の人生は波瀾万丈でした。小学校を出ただけの私が大学の先生の端くれにもなれたのは、北海学園のおかげです。ありがたいがとう、北海学園大学（笑）。

私は最初、昭和二十六年に札幌短大に入りました。まだ勉強したいという他の大学の中途者と、師範学校のⅡ部を出た学校の先生がいっぱいいました。師範学校というのは、今の教育大学です。師範学校のⅠ部は、小学校を出て五年間勉強をすれば普通の中等学校の資格が取れました。Ⅱ部というのは、中学校を出てから師範学校に行つて、二年でその資格が取れるんです。そういう人たちと一緒に札幌短大にいたんですが、北海学園の三森先生に「短大の学生を全員大学へ移してくれないか」と交渉したんです。そうしたら大学入学資格検定試験というものを受けなくてはいけないというところで、試験を受けたら、北海学園で受け入れてくれました。みんな、勉強をやりたいという気持ちが燃えていた。だから、北海学園に助けももらったということなんです。

大学の柔道部に入っていました。前理事長の森本先生もいました。柔道部にいたときに全日本柔道選手権大会があつて、出場する五人に選ばれ、私が大將になって出場しました。先鋒、次鋒、中堅、副将が戦つて二対二。あと一人勝てば優勝して全国大会に出られる、その責務を負ったのが私で……（笑）。私は年をとつていたし、あんまり体が動かなかった。御所芋ととうきびしか食べていなかったから。出たけれど力なくて負けてしま

ました。今でも、本当に申し訳なかったと思います。私が勝つていたら全国大会に行けたのに。今でも大学の柔道場に行けば、私の名札がかつています。

教員になり、札幌市立柏中学校に勤めました。その後、中学校を三つか四つ行つて、最初の高校は、西高の定時制でロシア語を教えました。

「学ぶ」ことに飢えていた。やる気があれば、どこでも学べる

ロシア語は、抑留されているときに身につけたものです。石炭堀りをしていたとき。発破をかけると煙がもうもうと立ち上がって、その間は仕事ができなくなるため休憩時間になるんです。そのときにタタール人がタバコを吸っていた。タバコというのは新聞の端を切つて丸めて、ひまわりやトマトの茎みたいなのを刻んだのを入れて、ツバをつけて吸うんです。日本のタバコのようなものとは違います、向こうも大抵貧乏だったから。

タタール人が新聞をいっぱい持つていて、私はそのロシアの新聞に興味を持った。勉強しようという意欲があつたから、仕事の合間にその切つた新聞を貰つて、タタール人からアルファベットを習つたんです。タタール人も教えてくれました。教科書があつたら持つて来てくれと頼んだら、そのうち持つてきてやるから、まずは今使われている言葉をロシア語で話せるようなれとに言われた。私は、もう神様に会つたような気持ちになつて。ずっと、勉強をしたいという気持ちをいっぱい持つていたから。地面が炭粉だったので、砂に棒で書いて勉強して覚えていったんです。

それともうひとつ。通訳をやつていた朝鮮人に「モスクワ大学に行きたいから入れてほしい」ということを、ロシア人の所長に頼んでもらつたん

です。「まだ勉強をしている途中で軍隊に入った、勉強をしたいからモスクワ大学に入れてくれと頼んでくれ」と。そうしたら「ハラショーラボートルしたら入れてやる」という返事をもたらってきたと。ハラショーというのは「いい」、ラボートルというのは「仕事」、「いい仕事をしたら面倒みて入れてやる」と言っていたから、一生懸命働けと言われました。本当に入れてくれるとは思っていませんでしたけれど、当たって砕けるという気持ちで。

自分を試そうと思って、西高の定時制でロシア語を教えました。一九九一年にはノヴォシビルスクの大学に行ってロシア語を学びました。語学留学というで行って、日本語学校で日本語を教えた。日本語を教えるということは、ロシア語を習うということです。

高校では社会科を教えていました。社会科は好きで、外国の話、ロシアの話をするとなると他の人に負けなかった。中学では商業です。社会科と商業の二刀流をやっていたというのは、やっぱり勉強したいという意欲です。上級免許証を取るために、学芸大学、教育大学、日本大学、玉川大学などで単位を取りました。

一回きりの人生、やれるだけやれ！ やればできる！

戦争は命の奪い合い、絶対に繰り返してはいけません。だから、本当に強い日本を作らないといけないと思います。強いというのは軍事力のことではありません。私が考えるのは、政治でも、経済でも、科学でも、医学でも、教育でも、世界で一番強い日本の国になる。そういうことで強くなる

と、世界の人から尊敬される国になると思うのです。

私は学生や若い人に、声を枯らしても言いたい。一回きりの人生なんだ、その一回をどう使うか。やればできる。やればできますよ、と。

私が大成高校にいたときに教育実習生が来て、お別れの挨拶をしてくれと言われたのでお話ししたことがあります。「今、君たちのこの中に、実習を終わって教員免許証を晴れて取る女性がひとりいる。取った教員免許証は日本全国どこでも通用する。外国に行っても通用する。そういう人がこの定時制高校の仲間から出たんだ。一回きりの人生じゃないか、免許を取れ、取れないことはないんだ」と。私はいつも口癖で、卒業資格だけではなくていろいろな資格を取れと言っています。小型漁船の船長の資格も取れる、無線の資格も取れる、やれるだけやれ、と。やればできるんだと。

(二〇二三年一月十八日 インタビュー、

『北海学園大学学報』第一三三号から一部引用)

【プロフィール】

神馬 文男（じんば ふみお）

一九二六年三月十二日、月形町生まれ。一九四七年八月二十九日、高砂丸で帰国。一九五五年経済学部I部経済学科卒業・二期生。元九〇一空海軍上等飛行兵曹。札幌市立柏中学校ほか複数の中学・高校などで教員を務める。現在「シベリア抑留体験を語る会」の生涯学習出前講師として自身の経験を語り継いでいる。

美術部員が、演劇の舞台美術から役者も兼ねる そこで人生の伴侶をみつける

三期生は、北海学園大学が短大から四年制になった年に入学しており、「一期生」とも言える。大学としてまっさらな、はじまりの時期だ。



経済学部経済学科
昭和31年卒・3期生
どいじろう
土井 二郎

りですから、漢文なんて見たことも聞いたこともないわけです。でもおかげさまで合格したので二年生から北海中学に行き、卒業したあと北海学園大学に入りました。大学では年齢に差がある人もいました。戦争帰りの軍人もいました、年もだいぶ上で。そういう時代でした。

当時の大学周辺は、もう一面りんご畑でした。私が大学に入ったときは札商の校舎の間借りで、大学校舎は何も無かったです。教室も昔のまま。札商では小学生が使っていたような、ひとり用の机を使っていました。

北海学園大学が四年制になったときに入学しました。北海高校から北海学園に入ったのは、美術部があるからです。でも、部活が無ければ自分で作ればいいと、当時、そんなふうに言われていました。我々のときには、部活と呼べるものは何も無かったですから。

美術部は三越で展覧会をやっていました。自分の絵を背負って九階まで運ぶので大変でした。だから、なるべく小さい絵を描いたほうがいいなど（笑）。北海はなぜか三越を会場に使っていたんです。ギャラリーみたいなものがあまり無かったからでしょうね。

大学では、部活は自由に作れたんじゃないでしょうか。その代わり、部室というものは無いです。自治会室というのがあって、そこにみんな集まっていました。五、六人しか入らない部屋ですけど。

演劇とのめぐり逢い

昭和二十七年十月、北海講堂においての本学演劇部第一発表会が思い出

部活が無ければ自分たちで作ればいい、そんな時代だった

私は旭川生まれで、旭川第三附属小学校に六年間通い、それから札幌に出てきましたら、その頃はまだ東西南北の高校が無かったんです。

絵を描くのが好きなので、よく描いていました。北海高校にどんぐり会という美術部があると聞いていたところ、北海が中学二年生になる一年生を編入試験で募集すると知りまして。それで編入試験を受けました。受けたのはいいんですけど、漢文の試験が出てきたんです。小学校を出たばか

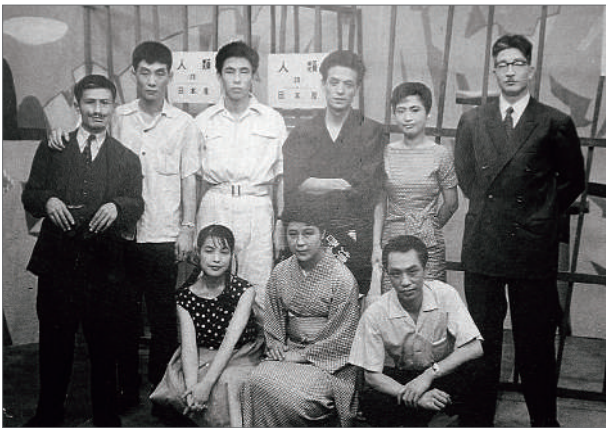
されます。谷崎潤一郎作『無明と愛染』（演出・野村晏司先輩）で、当時一年だった私は全く観劇者の一人にしか過ぎませんでした。当時は札商の校舎に間借りでしたし、対外的に大げさな発表会ではなかったようですが、これがわが演劇部の基盤となるものだったわけです。

私が二年生になった昭和二十八年五月、市民会館で、真船豊作『寒鴨』（演出・納谷和行先輩）を発表したとき、たまたま油絵をやっていたことと、自治会室にごろごろしていた関係で舞台のバックを描いてほしいということから、スタッフの一員として手伝うようになりました。

これが縁で、市民会館での第三回発表の八木隆一郎作『幻の宿』（演出・野村晏司先輩）では、キャストとして初舞台を踏んだわけです。このときは客席全体がボーツとして何も見えず、あがるにいいだけあがってしまい、舞台の上で「果たしてこの劇は終わるのだろうか」という不安でいっぱいでした。今でもはつきりと記憶に残っています。

昭和二十九年、中江良夫作『檻の中の人類』（演出・納谷和行先輩）に出演のときは、慣れとは恐いもので「あそこであいつが見ているな」「あつちで笑っているな」といった余裕もあつたから、不思議に印象に残っています。このときは舞台効果を上げる抽象的な檻を作り上げ、盛り上がり花を添えました。

当時、本学には女性が少なく、演劇部は外部の応援を招いていましたが、このとき手伝ってもらったのが縁で、私と堤君の二組が卒業後結婚ということになりました。まさに演劇部との出会いが女房とのめぐり逢いということになり、人生とは本当におもしろいものだと思います。



演劇部の様子（土井さん提供）

このときは出演者が多く、演出も大変だったのではないかと思います。今頃になって、納谷先輩のご苦労を察しさせられています。

同期の堤錦君（園長）、岡田良夷君（園丁）、私（紳士）のほか、早坂野上、梅木、坂上、佐藤君などの諸兄と、お手伝いいただいた今は亡き中原和子さん（有閑マダム）、土井△旧姓・鶴見▽美代子（夜の女）、伊勢郁子さん（娘）など、なにか最近の出来事のように頭に浮んできます。

このときの堤君の園長が好評で印象深く、今でも女房は堤君のことを「園長さん」と失礼を顧みず呼んでいます。演劇の延長として許してもらっています。

昭和三十年、私の最後の学年の九月十九日、大学祭のひとつとして市民会館で、八代静一作『絵姿女房』（演出・佐合敏君）を発表しました。

私（よも）、鶴見（おつう）、岡田君（殿様）、堤君（番人）、梅木（家来）、佐合、六戸（桃売り）のメンバーで構成、私としては良い思い出の作品で最後を締めくくることができたと思っています。

満員の客席。あの顔もいる、この顔もいる。みんなが拍手してくれている。幕がおろる。



卒業した昭和三十一年秋、まだ各家庭に白黒のテレビも出回っていない頃、発足間もないHBCテレビから、『檻の中の人類』を再演してほしい旨の依頼があったんです。新社員の合い間をぬって、私の演出でテレビ出演し、謝礼金で出演者一同が杯をくみ交したのも、よき思い出として残っています。

学生時代、演劇をやっていてよかったと思う理由はいろいろあるが、大勢の人の前でもあまりあがることなく、物怖じせず話しができるようになったことが一番プラスになっている。

また、なにかを作り出す苦勞を共にしたこと、スタッフ、キャスト全員でひとつひとつ一生懸命に夜遅くまで作業したこと。ひとつのことに邁進することの美しさというか、あの無心さは何者にも変えることのできない素晴らしいものでした。

過ぎ去った半世期前が本当に懐かしく、演劇をやっていてよかったと、新たな感激を覚えています。

創部間もない時期でしたが、活発に活動していました。

女性は三人しかいなくて、女性がいないと演劇にならないんですね。それで当時、札幌で劇団十日会とうかかいというものがありまして、男女一緒に演劇の練習をしていました。そこに学生数人で行って、女性何人かに出演してもらえないかとお願いをしたんです。劇団からは気持ちよく協力しますよと。女性四人か五人が応援に来て、出演してくれました。

当時は部室もなく、練習場所も無かったので、授業が終わってから札幌

の空いている教室で机を片付けて演劇の練習をしていました。それから劇団十日会にお願いしてやらせてもらったり……。どこの部も、部室は無かったんじゃないでしょうか。

私は演劇をやったおかげで、今の女房と知り合いました（笑）。彼女は劇団十日会から応援に来ていた女性です。彼女の家が（国鉄）苗穂の工機部の裏で、線路の橋の真つ暗なところを歩いて、渡つて降りたところに家があったんです。練習は夜の十一時まで。最終の電車が苗穂まであったので「送りますから」という約束で毎日送っていたんですけど。そうしたら帰りは電車が無いんです。私はひとり寂しく、歩いて帰っていました（笑）。

（二〇二三年七月二十六日 インタビュー、北海学園大学三期会『北海学園大学卒業25周年記念 人生意気に感じて』から一部引用）

【プロフィール】

土井 二郎（どい じろう）

一九三四年二月三日、旭川市生まれ。一九五二年北海高等学校卒業。
一九五六年経済学部I部経済学科卒業・三期生。美術部、演劇部。三期会幹事。



思い出深い定期戦 あのとときの謎は、今もなお

四年制大学の創成期、東北学院大との定期戦をきっかけに多くの部活が誕生した。それらのほとんどは、学生の手によるものだ。



経済学部経済学科
昭和31年卒・3期生
むらかみ やすひこ
村上 泰彦

やるらしいということで流れたのが天皇陛下の言葉でした。「負けました」とは言わないんですね。何を言っているのかさっぱりわからない。父たちが「なんだか負けたような話だ」と言いました。

引越し荷物を半分運んでしまったのだから、この際戻ってくるのはやめようと、残りの荷物を全部持っていきました。学校も、大通小学校から苗穂小学校に移りました。

そうしたら、うちの兄弟たちが終戦で帰ってきたんです。私がちょうど中学受験となったときです。兄たちは、北海中学の黄色いたんぼ色の線が入った帽子に憧れていたらしく、「自分たちは北海中学に入りたかったけれど、普通の中学だった。だから、お前が北海中学に行け」と。そして試験を受けて、終戦の翌年に北海中学に入りました。

校舎はボロボロではなかったけど、靴は無いから裸足で、釘が刺さったり、皮がむけたり、ひどかったです。校舎の中もデコボコでした。

入学したときは旧制中学がまだあって、旧制と新制が一緒になった時期で、五年制のところに入っただけです。それで、中学三年のときに高校ができて、ちょうどいい具合に波に乗って、大学まで入れたということです。中学三年間、高校三年間、大学四年間です。

北海学園大学入学のきっかけは、高校の担任の先生から「今度、四年制の大学ができるようになりました。君たちが入ったら四年制大学の一年生になるんだよ」と言われたことだと思います。じゃあ私たちは短大ではなくて、四年制の大学生になるんだなと思っただけでしたけど。

終戦の日の引越しと、兄の憧れの北海中学

私はずっと札幌なんです。大通小学校にいました。小学校六年生のとき、家が今で言う大通の西十四丁目でしたが、うちの父が東区にいいところがあったからと、疎開というかたちで今の東区の方に引越しをしようとした日が、なんと終戦の日だったんです。偶然です。馬車で引越しの荷物を運んで、二回目を運ぼうと戻ってきた昼に、天皇陛下の玉音放送があった。終戦を知りました。昼ごはんを食べている最中に、なんだかラジオ放送を

初めての定期戦にボクシング部が出場することになったが……

北海高校二年のときに渡邊（中学からの同級生、渡邊伸也）氏と一緒に
なって、ボクシングを始めました。大学に入ったら渡邊氏は空手のほうに
行きましたけど、私は一、二年はボクシングをやりました。部室もあつた
んです、大学に。

北海高校にはボクシング部がりましたが、大学には無かったため、市
内の札幌ボクシングクラブに所属して、時々北海高校の道場で後輩の指導
をしていました。

あるとき土橋君から、今度、東北学院大と定期戦をすることになって、
両大学の活動しているサークルの対戦になるのだが、本学のサークル数が
少ないので困っているとの話がありました。ボクシングの場合、五名の部
員がいれば戦えるので、当時一、二年目で私を含め五名を集めて、全員北
海高校出身メンバーでボクシング部を作りました。

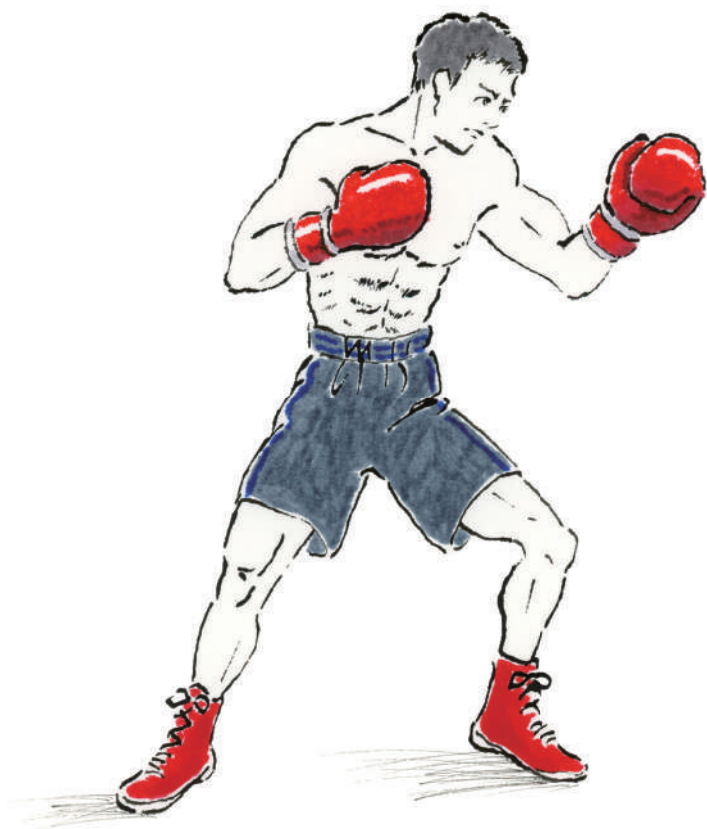
このときの学生は、ただ「北海学園大学の名前を広げるためにみんな
頑張ろう」の一声で集まった者ばかりだったんです。

毎日のトレーニングは大変でした。会場は中島スポーツセンターに決
まって、さてリングが必要だということになりました。リングは北海道に
一台しかなくて、持ち主は北海道ボクシング連盟でした。会長は、北海高
校ボクシング部マネージャーの父親です。北海高校の大ファンで、話は良
い方向に向かっていく予定でした。

リングのお願いをしに、大学からボクシング部顧問の名生助教授と渡邊

君と私の三人で、会長のお宅に行きました。今度の行事報告をして、リン
グ使用のお願いをしたら快く許可がおり、その他にもリングの組み立て、
レフェリー、グローブなど必要なものは用意すると言われ、とても嬉しい
一時だったんですが……。

実は、この父親は小高龍湖といって、小高組というヤクザの親分で、全
国はもとより北海道でも有名な人です。試合道具の関係はオーケーになり
一安心したんですが、今度は試合について言ってきた。「君らは北海道の
代表で、向こうは東北の代表だ。北海道連盟としても顔を潰すようなこと
はさせられない。この際、私の顔を立ててくれ」と言ってきた。その条件
は、高校生の横山（二年生で全国大会の高校チャンピオン）を試合に出す



ということでした。大学の試合なので高校生を入れることはできないと言っても聞く耳を持たないし、怒り始めたので、その日はそのまま帰ってきました。

我々は試合もパーになったと思っただけ練習も止めたんですが、その後土橋君が「試合ができるようになったので、準備をするように」と言ってきました。事情を聞いても、学生は言われたことをすればいい、と言うだけ。詳しいことは現在も不明です。試合の結果は、横山が相手をノックアウトして一勝しましたが、一勝三敗一引き分けで完全に負けました。

縁がなくなり、自動車のセールスマンに

就職は、私はあまり口が達者な方ではなかったんですけど……。狸小路の横のところにカトリという呉服屋さんがあつて、そこが友だちの姉さんがお得意さんだったんです。その友だちが早稲田の学生で、北海高校でピッチャーをやっていた人なんですけど、よく待ち合わせをするのにその店で会っていました。

そこにちょうど来ていた人が、北海道マツダの営業部長で「あんた、自動車のセールスマンやらんか」と。「セールスマンって何をやるんですか」と聞いたら、「車を売るんだよ」と。「そんなこと、自分にできるかな」と言うのと、「あんたは喋りそうだからできる。ちよつと会社に來い」と言われて行ったんです。行ったらもう捕まって、履歴書を書けと言われて書いてたら、もう合格だと（笑）。それで、自動車屋に入ったんです。

それから、自動車屋で三十年ぐらい働きました。今だったら「村上さん、口が達者だね」と言われるんです。どちらかと言うと、他の人より喋るか

もしれない。自動車屋に入れて良かったなと思っています。

(二〇二三年七月二十六日 インタビュー)

【プロフィール】

村上 泰彦（むらかみ やすひこ）

一九三四年三月二十六日、札幌市生まれ。一九五二年北海高等学校卒業。
一九五六年経済学部I部経済学科卒業・三期生。応援団指導部、ボクシング部。

「私たちも応援団を作らないとだめだ！」
有志が集まり応援団を結成

東北学院大との定期戦を機に、北海学園大学初の応援団が結成された。
他大学の応援団に刺激を受け、有志が集まった。



経済学部経済学科
昭和31年卒・3期生

わたなべ しんや
渡邊 伸也

懐かしい上原学長宅との交流

私は山鼻小学校でした。中学校に上がるとき、成績が良くなかったので、第二高等小学校というのがあって、そこに一年行きました。そこで一生懸命勉強をやって、一応、優秀な成績だったのかなと思います。兄が北海道だったものだから、北海中学に行きたいなと思って編入試験を受けて、二年で入ったんです。

あとはそのままずっと高校も、大学も北海です。

当時の校長は、大森先生だったかな。入学したときは戸津高知先生、「とつあん」だったかと。

北海学園大学に入るきっかけは、北大を受けても落ちるだろうし、自信もないし、浪人するよりはいいやっていう考えで（笑）。

ちよっとおもしろい話をする、私の家は、上原学長の家と同じ住所だったんです。うちの斜め後ろに立派な洋館がありました。

上原学長は子どもがいなかったので、娘さんを養子にもらっていました。その娘さんの弟が広島だったんですが、広島から北海学園に入って、学生の時に一緒に住んでいたんです。学生同士ですから、よく私の家に来て、夕方まで遊んで帰って行きました。

学長の奥さんも時々挨拶に来て「お世話になっています。うちにもたまには遊びに来てください」と言ってくさって。お宅に行くと、奥さんがケーキや紅茶を出してくれるので、それが良くてしょっちゅう行っていました（笑）。

学長の家に入ってすぐ横が応接間で、応接間と居間の間の壁に、大学の完成予想図のようなものが貼ってありました。私たちが二年ぐらいのときじゃないでしょうか。その頃から、新校舎の構想を練っていたんですね。

空手、ボクシング、応援団。多彩な十代〜学生時代

中学の頃、たまたま家の裏に空手をやっている人がいて、痩せ型なのに板を割ったりしているから、そういう人っていいなと思うようになりまし

た。私は兄に柔道の相手をさせられて、いつも投げられていたので、だめだなと思っていました。

空手をやりたいと母に話したら、中央警察署の四階に空手の同好会があつて、刑事さんや空手が好きな人が十人ぐらい集まって練習をやっているようだと教えてくれました。行ってみたら「君は若いから、ずっと来られるかい」と聞かれたので、「行きます」と答えました。それから、週に二、三回、夜に行つて練習していました。高校に入つてからは空手部が無かつたので、ボクシングをやっていました。

大学に入つたら、空手をやっていた大泉さんという人が同好会を作つて、札商の二階で七、八人が集まって練習をやっていました。それを見に行つて「入りたいです」と言つたら、「ぜひ入つてくれ」と言つてくれて、入ることになりました。そのとき、三年生は自分ひとりしかいなかったもので、このままだと来年はキャプテンになる、練習をしないわけにはいかないなと思ひましたね（笑）。

四年生になつて、キャプテンになつてしばらくしてから、「部にしないといけない、そのためには部員を集めないといけない」ということになりました。

部員集めのため、派手にデモンストレーションをやりました。道着を着て学校の周りを走つたり、目立つように空手をやったりしていたら、部員がだんだん入ってきました。最盛期には二十、三十人にまでなつた。当時は道場が無いので、今は開拓記念館に移設した旧北海中学の建物の左側にあつた広いところ、ダンス研究会や剣道なども使っていた場所で週に三日ぐらい、あとは新しくできた図書館の屋上で練習していました。そのうち

に認められて、同好会から「空手部」になつたんです。

応援団を結成しようとしたきっかけは、北海道大学と小樽商科大学の定期戦対面式を大通でやっていて、たまたま歩いてるときに兄と見たことです。かっこいいなと、私たちも応援団を作らないとだめだ！ということになつて、有志が集まつたんです。三年生のときです。

初代応援団長・竹内善幸（柔道部副将）、副団長・土橋和英（サッカー部副将）、副団長・和田貢（故人）、リーダー部長・渡邊伸也（空手部主将）、リーダー・島腹金一、塚田正、村上泰彦（ボクシング部主将）、吉本直之（卓球部主将）というメンバーです。

そして、東北学院大との定期戦が始まりました。東北学院大にはずいぶんお世話になりました。親切で、なんというか、偉ぶらない。いろいろなことを教えてくれて、とてもあたたかかったです。

噂によると、定期戦を開催するにあたつていろいろな大学に連絡してお願ひしたけれど、みんな断られたそうです。校舎もないのに定期戦なんてできませんよ、と馬鹿にされて。最後に東北学院大が「いいことですね。北海道と東北でお互いに交流し、ぜひ実現したいですね」と、話がまとまつたらしいです。

東北学院大との第一回定期戦は昭和三十年です。第一回を開催して、これはすごいなと思いました。私は北海道高校の応援団しか知らなかったから。当初は、その高校応援団の延長だったんですが、東京の大学応援団の情報を取り入れたりして、少しずつ形を作っていました。



飛び込み就活で電通に就職

就職は、私は電通に入りましたが、一年前から会社に申し込みを入れていたんです。絵が好きだったし、企画を考えたりするのが好きなので、そういう会社に入りたいなど。

母が婦人会の役員をやっているとして、HBCの支店長と親しくしていて、電通がいいんじゃないかと言われたので、直接申し込みに行っただけです。駅前の第一生命ビルの一階に事務所が入っていて、そこにいきなり行って「入りたいんですけど、いつ募集するんですか」と。「来年の話だし、いつ募集するかわかりませんよ」と言われても二、三回行きました。そうしたら、年が明けたらアルバイトをしないと行ってもらえて。石狩管内の農家の、農機具調査をする仕事で、一週間毎日農家に通いました。雨の日も真面目にやっていたから、認めてもらえたのではないのでしょうか。面接に来るように言われて、それで入社したんです。

(二〇二三年七月二十六日 インタビュー)

【プロフィール】

渡邊 伸也（わたなべ しんや）

一九三三年七月二十五日、札幌市生まれ。一九五二年北海高等学校卒業。
一九五六年経済学部I部経済学科卒業・三期生。応援団指導部、空手部。

「北大に負けるな」とESSを立ち上げる 米兵から英語を学んでスキルアップ

三期生の代に誕生した部活は、どれも何もないところからはじまっている。学生たちが自ら考え、行動することで実現させていた。



経済学部経済学科
昭和31年卒・3期生

たかはし つとむ
高橋 勤

撃になるのではという憶測で、情勢が危うくなったので、苗穂小学校から上白石小学校に移ったんです。父が苗穂機関区から東札幌機関区に転勤になったというか、疎開したほうがいいということで行ったんです。しかし、上白石小学校に入ったら、一中、二中、市立中学は受験の資格が無い、と先生から言われて……。それじゃあ北海中学に行くしかないということで、北海中学、北海高校、四年制の大学ができたので北海学園大学に行っただす。

「どこにも負けないような英研（ESS）を作ろう」

私は北海学園大学の英語会話研究部（ESS）を作った三人組のひとりなんです。なぜ北海学園にESSを作ったかと言いますと、あの頃は北海道大学、小樽商科大学、学芸大学（現北海道教育大学）、室蘭工業大学の学生は英語が上手かったんです。私が一年生か二年生のときに、日米国際学生会議があったんですが、とにかく北大の学生の英語が上手い。

私と藤戸と遠藤の三人で、せっかく北海道に四年制の私立大学ができたのだから、どこにも負けないような英研（ESS）を作ろうと。英語に関しては、引けを取らない学生を輩出しようと立ち上げたんです。

北海中学に行くしかなかった
私が小学校六年生を卒業するときは、一中（北海道庁立札幌第一中学校）、二中（北海道庁立札幌第二中学校）というのがありました。一中は今の札幌南高等学校、二中は今の札幌西高等学校です。この他に、札幌市立中学というのがあったんです。この三校には、非常に学力の高い人でないといれなかった。

私は苗穂小学校に六年の夏までいました。敗戦になるか、あるいは総攻

何もなかったところからのスタートです。掲示板に「ESS募集」と書いて、我々は各教室に話しに行きます。四年制の大学ができたんだから、絶対に北大に負けるなよと。このファイトというか、スピリットというか、開拓精神。当時の上原学長は、「開拓精神を養え」と学生によく言っていました。それで私たちはESSを立ち上げた。ひたすらに、対抗意識だけがあ

りました。

英語は北海高校のときから勉強していました。あの頃、「FEN」（フアー・イースト・ネットワーク、一九四五年から在日米軍向けに放送されていた極東放送網）があつたんです。それと「VOA」（Voice of America、アメリカ合衆国政府が運営する国営放送）のスローに喋る英語があつて勉強になりました。

それから千歳に米軍基地がありまして、北海道を紹介した英語板を持って行って、喜ばれたこともありました。当時の北海高校にサンペイという英語の先生がいて、日本人ではないような発音をしていました。すごくかっこいいなと思って「FEN」を聞いたりしてました。

大学で英語を教える先生はいませんでした。顧問をやっていた松浦先生の英語も、聞いたことがないんです。藤戸と遠藤と三人で仕組んでいろいろやっていました。

まず、話を聞くことが先決だということで、当時の図書館の二階に、真駒内の第一騎兵師団（1st Cavalry Division）の兵隊を招いて、英会話のリスニングから始めました。耳を鍛えようということで、学生が三十人ぐらい集まって、何か月か米兵を招待しました。

このときはまだ、新校舎ができていなかったもので、札商の二階を使いました。

三年生の夏に真駒内から将校を呼んだら、ジープでやってきました。札商の玄関で将校を迎えたら、彼はピカピカな編み上げのチョコレート色の

靴を履いていました。「ここで靴を脱いでください、規則だから」と言ったら、最初は戸惑っていたけれど、スリッパに履き替えてくれて、二階の角の会議室に上がってもらいました。

そこで、法学部の顧問をやっていた松浦先生を中心に学生が集まって、将校とインタビューのように会話をして学びました。インタビューといっても大したことはなくて、「あなたはどこのステイトから来ましたか」とか、「学生時代、サマーバケーションは何をやっていましたか」とか、その程度の会話です。将校と下士官二、三人が来て、学生何人かで会話をしているうちに、だんだん耳が慣れてきました。藤短大とか、北星短大とか、北大といった大学の学生と、英語でちょっとした会話ができるようになりました。



米軍から Mr.Thies を招いて（高橋さん提供）

余談になりますが、将校が大学

に来たとき「北海学園大学のキャンパスはどこ？ 早くそこへ行こう」と言われました。北大みたいなところを想像していたんじゃないでしょうか。広いキャンパスがあつて、五階立てのビルがあつて、今の学園のようなところを想像していたと思う。松浦先生も困ったような顔をして「この校舎の横に、今、建設中の白い建物が見えますでしょう。あれが北海

学園大学の校舎で、まもなくできるんです」というようなことを、バツが悪そうに話していたのを思い出します（笑）。

四年生になると少し自信が出てきて、北海学園大学で国際学生会議をやるうとうとうことになり、一九五五年八月に開かれました。その前に、産業会館（現市役所駐車場）で、高田市長さん主催の歓迎会もありました。国際学生会議には約百三十名の参加者があり、少しは全道の人たちに北海学園大学の名前を知られたのではないかと思っています。

自慢話になりますけど、全道対抗英語弁論大会（アメリカの文化センター主催）で二等賞を取りました。びっくりしましたが、ESSをやっている良かったなど。北海学園大学のESS万歳です。



北海学園大学正門にて（高橋さん提供）

忘年会、新年会は、藤戸の家に米兵を招いて、これが英語を話す機会となって大変勉強になりました。なぜ藤戸は英語が上手いかというと、彼は「CQ CQ コーリング・ユー」というハム（アマチュア無線）で世界各国のメンバーと交流して、ヒアリングができるようになっていたんです。彼は学校を出たらず、日本交通公社の札幌支社と契約をして、通訳

をやって、ガイドになりました。

英語を通して体験したいろいろなこと

私は学生時代に三越でアルバイトをしていたんですが、アメリカの将校が北広島島の福祉施設の人たちのためにお菓子を買って行くということで、三越の地下にあるお菓子売り場に来たんです。私は英語が多少できたものだから、店の人に通訳をしてあげて、部長からずいぶん褒められた記憶があります。ESSに入って良かったなと思うことです。

それから、アルバイトで真駒内キャンプにも行きました。そこにはセスナクラスが飛べる飛行場やゴルフ場、ボーリング場もあって、私は三年生のときにゴルフキャディーのアルバイトをやりました。ゴルフに関しては

何も知らなくて、ただひたすら言われるがままにクラブを渡していたら「お前、何見ているんだ」と怒られたこともありました。「キャディーはボールを見ないとだめなんだ」と。キャディーとしては全然務まらなかつたけれど、仲良く英語で会話ができる場だったので一生懸命やりました。

昔、大通公園の西三丁目、北洋相互銀行の前に教会がありました。



英語弁論大会の様子（高橋さん提供）

アメリカ軍専用の教会です。日曜日になると米兵が集まってきました。それから、三越がアメリカ進駐軍の宿舎でした。

大通西五丁目、北向きの二階立ての建物に将校クラブがあって、西四丁目にアメリカ軍のソフトボールの野球場がありました。

北大通のところどころに住宅があって、北一条に五階立ての白い建物があったんですけど、それはアメリカ軍の病院でした。そのドクターが北大通の一軒家に住んでいて、アルバイトに行ったことがありましたが、びっくりしたのは電気掃除機があったこと。掃除機なんて、あの当時はとても珍しいものでしたから。電気洗濯機もありました。それから電蓄、レコードをかけていて……。英語を通して本当にいろいろな体験をすることになりました。

ある時、将校クラブに私たちが招待されたことがありました。ウイスキーサワーをいただいて、おいしかったです。ダンスミュージックがかかって、将校たちは奥さんとダンスをしていました。私たちはウイスキーサワーがおいしくておかわりしていたところ酔ってしまっていたんですが、なぜか出てくる出てくる、イングリッシュ（笑）。酔った勢いで三人は英語がペラペラになった気がして……。酒を飲むと不思議に英語が出てくるんです。ESSに入っていて良かったなと思いました（笑）。

大学で修得した英語力は、卒業後も役立ちました。

JICAなどで国際プラザへボランティアに行ったときのことです。研修生をバスに乗せて市内観光に連れて行きました。彼らはサッポロファクトリーで一時下車して、百円ショップで買い物をしました。戻って来たら、

ある国の研修生が「パスポートをどこかに忘れた、多分あそこの店だと思
うから戻って取りに行く」と言いました。百円ショップに取りに行ったら、
パスポートは無事に保管されていました。その研修生は涙を流して喜んで
いました。「やっぱり日本という国は素晴らしい。よその国ではこんなこ
とはない、完全にパスポートはなくなっていただろう」ということを言わ
れて感動しました。

(二〇二三年七月二十六日 インタビュー)

【プロフィール】

高橋 勤（たかはし つとむ）

一九三三年十月二十二日、札幌市生まれ。一九五二年北海高等学校卒業。

一九五六年経済学部I部経済学科卒業・三期生。英語会話研究会(ESS)。

三期生 四人組座談会

(土井二郎さん、村上泰彦さん、渡邊伸也さん、高橋勤さん)

四年制大学の一期生と思って入学したら三期生だった

——皆さん、四人とも北海高校からの仲間ですか。

村上…そうですね。未だにこうして繋がりがありません。

高橋…みんな、もう九十歳ですからね(笑)。これはもうありがたいと言っているのか、びつくりですね。

渡邊…私、昨日誕生日でした(笑)。

土井…私は一番大人しかったです(笑)。未だに仲良くこうしてお話してきています。

——北海学園大学は昭和二十七(一九五二)年に四年制の大学として開設されて、皆さんはその年に入学されました。しかし、一期生だと思って入ったら、先輩がいたと。

村上…そうですね。

高橋…我々は三期生となっているけれども、一期生だと自負しているんです。

土井…復員軍人という人もいましたから。年もだいぶ上の人がいました。そういう時代でした。

高橋…短大から上がって来た人たちとは、交流はあまりなかったような気がします。

——短大から編入した人たちは三年生になると思うので、先輩ということ

になるんでしょうか。

渡邊…そうですね。

——北海学園大学は「創立」と言わないで、「創基」という表現をします。北海短期大学からの方々が一期、二期。したがって、三期を一期と言うことはなかった。本来的には四年制大学の一期ですね。

高橋…そういうことを聞くと、北海学園大学ってずいぶん古い大学なんだなと思います。

——短大は二年間で、三年目には四年制大学にしていますから。

村上…当時、札幌短期大学が中島公園のところにありました。それから山鼻のほうに移ったんですね。

——ちょうど北海短期大学を立ち上げるときに名前がぶつかって、どちらかに譲り合ってくれというやりとりがあったそうです。それで、北海短期大学になったということです。

まわりはりんど畑。戦後間もない北海高校の思い出

——皆さんは北海高校のご出身でもあります。当時は旧制の北海中学から新制の北海高校に変わる頃だと思っんですけど、この辺の雰囲気はどのようなものでしたか。

土井…もう、りんど畑というか……。

村上…札商の向こうはりんど畑だったんです。運動部でトレーニングという、平岸街道をずっと行って、焼き場(平岸霊園)に上がって行って、焼き場の裏から裏通りを走って帰ってきました。焼き場まわりと言って、一番遠いコースだった。今は火葬場はなくなりましたけどね。

渡邊…私たちがいた頃は、裏に山があつて、向かい側は普通の家だったんです。食堂があつて、たまり場だった。もうちょっと行くと、澄川の手前に川が流れていて、そこをしばらく行くと、りんご園がずーっと広がっていました。

村上…りんごはなんぼでもいただけた(笑)。走っているときも。昔のトレーニングズボンは裾を紐で縛るので、そこにりんごを入れて……。

——この地名が旭町というのは、旭りんごが由来のようです。当時の校舎は、現在開拓の村にある、旧北海中学の校舎ですか。

土井…そうです。私たちが大学に入ったときは、札商の校舎でしたから。

村上…「お二階さん」と馬鹿にされて。

高橋…あの頃の校舎は素晴らしかった。独特の校舎だった。北海中学の教室では石炭を焚いていたんです。その石炭が石炭会社から来て、校舎の横に山積みされる。そこが石炭庫になつていて、我々が行ってスコップで石炭を入れる。戦闘帽を被つて……そんな話をするときリがない。

「大学をなんとか有名にしたい!」
学生たちに息づく開拓精神

——定期戦が始まった頃のことをお話しいただけますか。定期戦というのは、みんなの一大事業だったとか。

渡邊…応援団ができて、市中行進がありましたよね。札幌駅からすすきのまでのパレード。あれはみんなよく集まったと思う。

村上…あれは札商のときから始めた。時計台のあたりまで街の中を歩いて行ったんです。

——当時、大学に体育館は無いですよ。大会は中島のスポーツセンターで?

村上…体育館は無かったです。札商の体育館なども借りてやりました。渡邊…十月祭も大通公園でやった。丸太を組んで、火を起こして。

——キャンプファイヤー? そんなことが許されたんですね。

村上…学園でやると言ったら通ったんです、あの時代は。昔は大きな顔をして、「北海学園ですけど」という感じでいたら通った(笑)。

——できたばかりの大学で、それぞれ自主的に部活やサークルを立ち上げて活動していました。当時は教員も学生も、一丸となつてこの大学を盛り上げようという気持ちだったのでしょうか。

渡邊…みんな自然に集まっていたんです。

村上…学校を出たばかりのあんちゃんのくせに、大学をなんとか有名にしないといけないとか、そういうことだけはみんな一人前に思っていました。渡邊…部を作って、活躍して、名前を売るようにしようという考えだった。村上…真剣になつてやっていた。

土井…我々は文化部だったんですけど、運動部の人とは仲が良かったです。お陰様でこうやって、仲良くずっと付き合っていました。ただ、やっぱり女性だけがないのが寂しかった(笑)。演劇は必ず女性が出て来るので。



部活の資金集めのダンスパーティーが大人気に

渡邊…市民会館で二回目の十月祭があったときに、北海高校から立教大に行った人がバンドを結成していて、たまたま来ていたので、うちのクラブと一緒に十月祭の舞台で演奏してくれたんです。その夜、飲んでいるときに「部活の費用をどうやって集めているの」と聞いたら、「東京でダンスパーティーをやって資金稼ぎをしている」と。それを聞いて、じゃあ私たちがやろうと。初めてダンスパーティーを開催しました。

村上…札幌で北海学園のダンスパーティーといったら、すごかったんです。人が集まって集まって。

土井…学園のパーティーは券が手に入らないくらいだった。

村上…時計台の前にあったんです。もう入りきれないくらい。スポーツセンターでもやりました。北海学園のパーティーとなると、フロアがびつかりになる。

高橋…中島のスポーツセンターでやったときはすごかった。

土井…女性ものすごく来たんです。

——それは、どうしてですか？

村上…人気があったんです（笑）。

渡邊…最初に成人学校に行って相談したんです。そうしたら、ぜひやってくださいと。成人学校は、今で言う文化教室みたいなもので、三越などのパートの店員さんが来ているので、PRしてあげますと言ってきて、それが良かったんだと思います。

村上…チケットの売り込みは真剣でした。デパートに行って、店員さんに直接売りに行く。「北海学園です、ダンスパーティーやりますから」って。



一緒に躍る相手がないって言われたら、「私が踊らせていただきますから」って言って。当日は忙しかつたですよ。

高橋…演奏するバンドも良かったんだと思う。トランペット、クラリネット、ベース、トロンボーン、サクソスとかの演奏者がすごく上手かった。プレーヤーがかっこよかつたんじゃないかな。

——美術部が展覧会をやったりと、三越とはけっこう接点があったんで

すね。

渡邊…私は一時、三越でアルバイトをやっていました。

土井…私も、真面目に休まないでずっとやっていました。

渡邊…三越二階の雑貨品のコーナーにいたんですよ。夕方になると警備員の人「学生さん、これが今日盗まれたものだ」って、万引きで盗まれたものを返しに来るんです。「しっかり見ておいてくださいよ」って（笑）。

土井…私は女性の肌着売り場に回されたりしました。お婆ちゃんが来て「うちの娘、妊娠六か月なんですけど、このパンツ大丈夫でしょうか」って（笑）。大丈夫だと思いますよと、そんなことを真面目にやっています。

大学に広報室を。先生たちももっとマスコミを利用してほしい

——草創期の学生たちは、自分たちの大学をいかに有名にするか、必死になって考えて行動していました。今の大学に何か伝えておきたいことはありませんか。

高橋…こんなことを言ったら大変失礼かもしれないけれど、気持ち的には、大学の先生方はもう少しマスコミを利用したほうがいいんじゃないかと思っています。テレビに顔を出していただきたいと思うんです。そうすることに よって、大学の名前が広がっていく。アメリカの大学を調べてみたら、有名な大学というのは教授がいかにマスコミを使うかということと、学生がいかに先生について行くか。大学の名前を売るために派手に行動するとい うか、大学の名前を使いながら社会活動をしている。そういう意味でまず、大学の先生にテレビ出演する機会を増やしてもらいたいと思います。

渡邊…大学に広報室を作らないといけないと思います。かなり前から提案 していますが、なかなかできない。絶対に必要です。例えば、前に新学長 就任記事がずいぶん遅れて新聞に出ていた。何でこんなに遅いのかなと。 結局は広報室がないからです。以前、道新の記者に聞いたたら、学園さんに 電話をかけたけど、総務からあちこちに回されて、結局駄目だったと言う んです。大学に電話をかけてたらい回しにされるのは、あまり良くない。 ——仰る通りです。そこにいる職員も経験がないので、どうしたらいいの かわからない。学長は六年に一回ぐらいしか代わらないので、その間に仕 えている者も代わるわけです。

渡邊…広報室から情報を流したら、取り上げてくれるんです。「学内でこ ういう新しいことをやりますよ」と言ったら飛んできて取材してくれます

から。先日、他の大学の記事で、大学の近所で雪下ろしをやっているとい うのが載っていました。電話をかけてPRしていると思いますよ。

——例えば、北海道新聞はある大学と連携協定を結んでいます。だから、 うちでもやらないといけないと話しているんです。毎日、北海道新聞の朝 刊に大学の記事が何個取り上げられているか数えているんですが、連携協 定が効いているのか、結構そういう記事が載ったりしています。

渡邊…広報室があると、マスコミからも情報を流してくれます。「今、東 京のほうからこういうのが来ていますよ」とか、「どこそこの大学でこ ういうことをやっています、こういうことを検討していますよ」とか。です から、広報室はあったほうがいい。

土井…それにしても、今の学生は幸せですね。教室を見ても、我々の時代 から見たら嘘みたいですよ。

渡邊…地下鉄と大学が直結しているのは、全国でも珍しいですよね。

高橋…我々のときは、アメリカ人を呼ぶにも場所が無かった。今こうして 見ると広々としたキャンパスで、大きな図書館もあるし、国際会議場もあ るんですよ。すごいなと思います。

(二〇一三年七月二十六日 インタビュー)



左から、村上泰彦さん、土井二郎さん、渡邊伸也さん、高橋勤さん

はみ出し者のような 新しい時代の女学生として

三期生は、四年制大学に初めて女性が入学した世代。男性ばかりの大学で女性が学ぶことは、当時はとても珍しいことだった。

北海学園大学の一番はじめの女学生

私は戦後最後の旧制女学校の学生です。公立の旧制庁立岩見沢高等女学校に入って、同じ場所にいながら学校の名称が変わりました。学区制な

ど、いろいろな変化がありましたから。私たちに後輩ができたのは高等学校（新制）に行つてからです。だから四年間は、一番下級生のままだったわけです。そして高等学校というものになつて、男女共学の期間が二年ありました。

新制高校になつたのは昭和二十三年で、終戦直後の昭和二十一年に女学校に入っています。私のあとの人たちは、新制の中学生になりました。女子学生への偏見がある時代でした。普通、私たちの年齢の人の多くは、皆さんドレメとか、文化服装みたいなのがなくて、でもうちは進学校でしたから、女子学生も短大に進む方が多くいました。

私も短大ぐらいだったはずなんですけど、そのときに北海学園大学が四年制の大学になり、その前の年まで短大でしたから、そして女子を入れるということ。北海学園は北海、札商すべてでずっと男子校でしたから、私たちが初めての女子入学生になつたわけです。

短大から四年制の大学になり、もちろん短大もそのまま継続され、短大から四年制に切り替わつた方々が一期生、二期生になりました。私たちは三期生で、女子では一番はじめの世代になりました。受験に行きましたときに、私もっと女性が受けていると思つておりましたが、実際は阿部准子さんと私の二人だけで、その二人が入学しました。まあ、応募者もカツカツ、



経済学部経済学科
昭和31年卒・3期生

くりたのりこ
栗田 紀子

落ちた人が僅かみたいな感じのようでしたけど（笑）。

I部の定員は、学部は経済だけです。四クラスありましたが、二百人ぐらいでしょうか。短大が先ですから、最初の年はII部の方が多かったようです。

宮崎（旧姓戸谷）節子さんと一昨日も「ちょっとこういうことがありまして」とお電話で話しました。節子さん、歩くように努力していて、お天気が良かったりすると散歩しているようです。夫の宮崎さんとは、以前はちよこちよこお話していました。三期会の幹事長として同期の絆をずっと保つてくださったから、北海道に帰ったときも何回か連絡しました。

私は、子どものときから「これしかない」と自分で思っていた進路がありました。ところが父は、絶対に反対でした。なので、私は家を早く出たという願望を早くから持っていました、表には出せませんでしたけど。元来女性的なことが非常に苦手で、お嫁さんになりたいとか、そういう願望もない人でしたから、自分のしたいことをしたいと思っていました。父は寛大な人でしたが、私の希望する進路だけは絶対に反対だったんです。私が行きたかった学校は東京にあるということに加え、今でこそ道内に二十を超える私大がありますけど、あの頃は無かったわけで、進路の希望を叶えるのも難しかったのです。そのときに北海学園が、北海道最初の四年制の私立大学を創設したのです。

父も事業をしていまして、経営面とかいろいろな事務的な部分で、これからは女性も経済を学ばないと駄目だと感じていたときだったと思います。父は秋田を出て、東京で十年ぐらい、学生生活などをしていました。大正文化が一番開花したときに東京で生活していましたから、新しい時代

の感覚は私にもある程度植え付けられていたのだと思います。

あの時代の教育は今と違っています。親、姑、目上の言いつけを聞かなくてはならないというのが、みんな戦前から叩き込まれています。私などはみ出し者みたいな感じでした（笑）。

私が最初に入学した旧制女学校の同期には、併合になって新制岩見沢高のほうに行かれた方々をひっくるめて、女医さんだけで五人もいるんです。北海道では岩見沢高女というのは、北海道庁立札幌高女に続いて早くに設立された学校だと思います。

岩見沢市というところが、地理的に交通の要衝でした。今は昔の面影がなくなって変わりましたが、炭鉱の全盛期には北海道の中心を成しているところが岩見沢でしたから、七、八本支線があつたんじゃないでしょうか。

私が北海学園に入学した年は、岩見沢東高からは湊弘志さんだけでした。その方とはクラスは一緒になりませんでしたけど、結構仲良くしていました。大変機智に富んだ明るい方でした。

家を出て一人で暮らす機会を窺っていた

最初の住まいは、知人宅にお世話になりました。そこではもう一事が万事、厳しくされたんです。「男の学校に行っている」ということで、クラスの人と映画に行くと言ったら、もう心配して心配して（笑）。その一家はあとで東京の本社に転勤になったので、私にとっては幸いでした。

家から通学するには体力的に大変で、厳しかったです。家に着いたら

夜の八時ぐらいになりますから。それで何とか理由をつけて、他の女性とルームメイトみたいなかたちで住み始めました。その方も、前にルームメイトだった人が出たということだったので、何か月か一緒に暮らすことになりました。

虎視眈々と一人暮らしの機会を窺っていたところ、ちょうど学園前にお部屋があるからと勧めてもらうことができました。学園の目の前ですから、朝はギリギリまで寝ていました。寝坊助なので（笑）。

私は四年間のうち、三、四回ぐらい引越しましたが、どこもいいお部屋



でした。私が引越しを希望したというより、「お部屋が空いているからどうですか」と言われたら、そっこのほうが良さそうだなと思って引越しているという感じです。

引越しと言っても学生ですから、荷物は机と小さな本立てと、全部入れても大きい柳行李と夜具等々ぐらいしかありません。当時はどこにでもあった燃料屋さん、引越しますってお願ひしたら、一トンのダットサで全部やってくれました。昔は今みたいに、引越し屋さんが無かったです。それで何回も引越して、好きなようにやっていました。

でも、もし私が藤女子短期大学とかの女学生でしたら、そんな気ままだ許されなかったと思います。そのまま家にいたら、母の言いなりになってしまう。あくまでも自分のエゴのためです。

男子学生にとって女子学生は「珍しい動物」のよう

当時は、札商の二階の校舎で、肩身の狭い三年間を送りました。四年目によつと一号館ができたんです。在学中に間に合いました。

もともと男子校ですから、おトイレも大変不自由な思いをしました。確か私たちの一年後に、女子が一人、二人入りました。はっきりとした記憶は、あまりにも昔で思い出せないところもありますが。

男子学生ばかりでしたから、私たちが「珍しい動物が来た」みたいな目で見ていました。北海や札商からの学生が多く、男子校から来た人たちがほとんどでしたから。

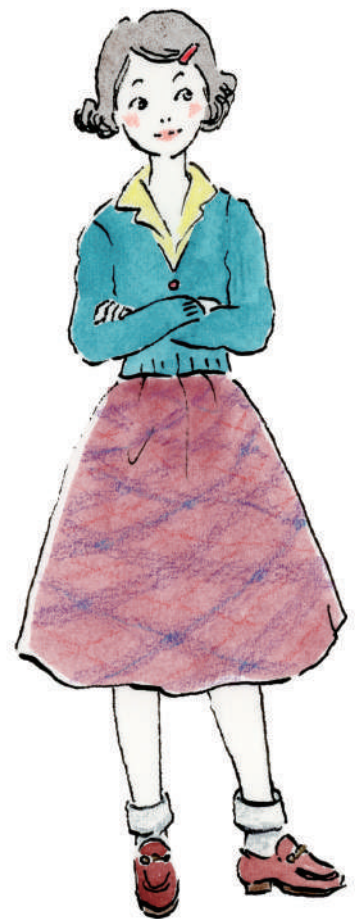
私が四年生になるときに、妹が入ってきました。一年で中退しましたけ

ど。「短大に切り替えても大学を出ておきなさい」と言っておきましたが、結局妹は雪印に就職しました。彼女もまた、親に反発して。私と性格は全然違いますが、雪印に入ってから非常に優秀でした。一番仲の良い姉妹です。

一年の夏休みが終わった頃に、女性がいなかったからと演劇部に熱心に誘われて、入ったんです。私が望んで入ったわけではないんですが。

土井さんは、私より一寸後の入部です。もともと北海中学・高校で、街の真ん中に育った方らしく、とっても穏やかで、お顔も広く人のお付き合いも上手で、「札幌一のハンサムボーイ」と言われていたんです。私は演劇での共演はありませんでしたが、土井さんはどなたに対しても優しいというか、頼りになる方でした。

当時の大学周辺はりんご畑でした。そこでりんごをこっそりいただいて、りんご畑の近道を通って、中の島に抜けていました。昔は学生が一人、二人ポツリポツリ歩いていても、何も文句を言われなくて、大人から大事にされていました。北海道の人は今でも、関東の人に比べるとのんびりなところがありますから。ちょっと食べるぐらいだったらって、大目に見てくれたんじゃないでしょうか。周囲のほとんどがりんご畑。平岸街道のところが商店街になっていて、学園の近くまで電車が走っていました。今は、無くなったんでしょうけれど。市電も通っていて、札幌駅から通えました。交通の便も良かったし、平岸の停車場から歩いても五分ぐらいで学校に着いたと思います。



夫との会社経営で「有閑マダム」は学園での経験を生かす

私は思いもかけず結婚しまして、夫が創業した会社と一緒にやりました。夫は、技術面ではなかなか大した人でした。私と夫は年齢差が非常にありましたが、難しい結婚でした。

私は副社長になりながら、裏方を務めました。夫は昭和五十九年に亡くなりましたが、その五年ぐらい前に倒れて、私が社長代行を少しやってから、「お前しかいない」と経営を任せられ社長になりました。逆立ちするほど大変なことばかりでしたけど、それはもう学園での基礎の部分が役に立って、必死になって勉強しました。

私の友人たちも相当数東京に来て、それぞれ活躍されていました。その方たちにわからないことを聞いたりしながら知識を得ていきました。あの時代でもまだ「女社長なんて!」と、特別な目で見られましたから。でも、表面は有閑マダムで通しました(笑)。

大学卒業時の就職活動でいうと、私は、北海タイムスが札幌で女性の職

員を大卒でも採用するというので試験を受けていて、一次試験は通りました。採用数が少なく、最終的には不採用になっていました。私は他を受けていなかったうえに、札幌での就職試験はもうほとんど終わっていました。

次兄が東京の大学で助手をしていました。その兄が大学のお給料も安く、一人での生活が大変なので、東京に出てこいと言ってきました。荻窪に住んでいた兄が、私が本好きで向いていると思うからと、図書館の仕事をみつけてくれました。

それで卒業後、東京に行くことになるんですが、下宿の後片付けなどで、私の上京が一週間ぐらい遅くなってしまいました。当時は就職難でしたから、その間に他の人に決まってしまうました。女子が大卒なんてもってのほかの時代で、一番大変なときでしたから、東大を出ても女子はなかなか就職できないような状態だったんです。私は、昼にパンと牛乳を食べて、毎日のように荻窪から神田橋まで通い、ようやく就職先をみつけました。職業安定所に毎日通って、自分で仕事をみつけて就職したわけです。横山町の間屋街にある会社です。中小企業ですけど、その会社には半年間もいませんでした。そのときに私は「やっぱり宮仕えは合わないな」と思いました。夫の会社には関わりましたけど、そういう意味の就職はしていません。

仕事をみつけるのに大変だとは思わなかったです、若かったのです。当座の生活費は、親が用意したものが多少ありましたから、一、二か月はそうやって自分の判断で電車に乗って探しました。

自分の意思を通して生きる姿勢を、学園から植え付けられた

私は自分の好きなように生きてきた人です。表面には出さなくても、自分の思ったように生きてこままで来ました。夫からも最後には、「俺の敵わなかった人間はお前だけだ」と言われてしまいましたけど（笑）。

でも、そういうものも植え付けられたのは、学園の中の生活からです。自分の意思を通して生きるという姿勢を強く打ち出したのは、学園で過ごしたからです。いい意味でも悪い意味でも、人から見れば個性的と言われますし、頑固で我が強い女にも見えるかもしれません。

女性は可愛くお嫁さんになるのが当たり前時代の時代、二十五歳を過ぎたら「婚期が……」というようなことが色濃く残っている時代ですから。昔はやはり、日本のしきたり的なもので、特に戦前・戦中に植え付けられたもの。だから私よりちよつと上の亡兄なんかも、新しい時代の感覚と、男尊女卑の感覚が入り混じっています。それに対しても、表面上逆らえないけれど、抵抗し続けました。

私が育てたと言うとおこがましくなりますが、親交を深めた女性がおります。彼女は今、県会議員として女性のための多彩な支援などに積極的に、神奈川県一番の女性です。

私は夫の介護をしながら会社をやっていたので、ストレスが溜まります。そのときに、横浜のルミネにカルチャーセンターができました。私はちよつとパソコンをやるうかと思っただけでしたら、空いているところがジャズダンスだけだったんです。学園の頃、札幌のフェンシングクラブの選手でしたから、何でもいから体を動かそうと。体を動かして発散するジャズダンスに入りました。

そこに、動きの素晴らしい二十代の女性がいて。彼女も父親との関係でストレスになっていて、息抜きのためにここに来ていたんです。私の子どもぐらいの年ですが、次第に親しくなっていきました。一年ほど経ったら向こうの親御さんも私を信頼してくださって、もう七年ぐらいの家族ぐるみの付き合いになったわけです。

彼女の父親は「自分の目の黒いうちは、絶対娘を嫁にやらない」というような方で、その父親が六十才のときに、呼ばれてお会いしに行きました。その方は、病気にかかりかなり消耗していて、それから半年後に亡くなるんですけど。そのときに「娘をお願いします」と言われたことで、彼女の親代わりみたいなことになりました。彼女は箱入り娘で育ったんですけど、今は素晴らしい女性です。

北海学園の卒業生は、北海道で活躍している人が多いですね。

似鳥さんも、すごい人です。学園を出た中で一番じゃないでしょうか。森本正夫前理事長も頑張ってやってくださったたり。

北海道には十数年前に行ったきり、もう誰も知り合いがないので帰らなくなってしまうけれど、そのときで女子学生は二割ぐらいと聞いていました。でも、二割でもすごいなと、そうやって学園に来てくれるんだなと思って喜んでいました。

それと、演劇部の大後輩になりますけど、大泉洋さんなんかも活躍されていて。五十年ぐらい後輩になります、もう孫もいいところです（笑）。彼は独特な、彼のスタイルでやっていますけれど。

学園は学園の個性でいいんじゃないでしょうか。北海道ならではの個性、

北海道ならではの人たちの集まりなんです。そういういいところを生かして、伸びやかですよね。

私の同窓の人たちも大方いなくなりましたから、土井さんにお会いしたらよろしく言ってください（笑）。

（二〇二四年四月十一日 インタビュー）

【プロフィール】

栗田 紀子（くりた のりこ）

一九三三年十一月十七日、札幌市生まれ。一九五二年道立岩見沢西高等学校卒業。一九五六年経済学部I部経済学科卒業・三期生。演劇部。

学生時代に学帽と制服で日本列島縦断の旅 遊んでいたことばかり思い出す

今では当たり前のように各地に点在する同窓会支部も、最初は誰かが立ち上げた経緯がある。関西支部はこの方が尽力した。



経済学部経済学科
昭和31年卒・3期生

さわ さだ お
澤 定夫

できが悪いものですから、北大を受けても落ちる、どこもここも全部落ちて縋るところというか、大学の名前がほしいから入っちゃったという感じでしょうか。

戸津高之さんの奥さんが、市議会議員か何かをやっていたんです。戸津さんのお家には南高の友だちとよく通っていて、そんな関係があつて学園に入ったということです。私の担任の戸津先生はもう亡くなりましたけど、そのお宅はグラウンド付近にまだ残っているんですね。

大学の四年間、何をしていたかと言ったら、サボってばかりいました。学校時代のことを今、何か思い出せと言われても、遊んでいたことは覚えていますが、勉強はあまりしなかったです（笑）。

ダンスパーティーはよくやりました。当時、ダンスパーティーが結構流行りだったんです。私は、同期が軽音楽部を作っていましたので彼らを動かして、南大通の今は銀行のあるあたりの会議室みたいなところを借りてダンスパーティーをやりました。

今だから言えますが、仲間内でやるという形にしておいて、チケットを売りさばくアルバイトをやっていました。税務署に無税のハンコをもらつて、それで売りさばくわけです。本当は税金がかかる場所、身内ということにしておけばらかならないんです。だからちよつと……ですけどね（笑）。結構、人数が集まったので、いいアルバイトになりました。税務署が来ないかと思つてビクビクしていましたけど（笑）。

ダンスパーティーで秘密の一儲け
戸津高知さん（元北海学園学園長）は北海高校のグラウンドのそばに自宅があつて、その息子さんが戸津高之さんといつて南高で私の担任の先生でした。担任の戸津さんにはいろいろ良くしてもらつていて、お家にも何回も遊びに行つていたんです。それで、北海学園大学ができたという話を聞いて、入学することになりました。

今でも少ないと思いますけど、南高から学園に来たのは私一人です。

今はもう無いですけど、その屋上でアドバルーンを揚げるアルバイトをしていました。これは危うく風に持っていかれそうになることもありましたが。当時はアドバルーンが盛んで、デパートなどでも揚がっていました。私はずっと日活が専門でしたけど。

学帽と制服で日本列島縦断の旅へ

大学のときに友だちと二人で、日本全国をまわろうと旅に出ました。学生割引がありまして、鉄道運賃が半額だったんです。札幌から九州まで、一週間ぐらいかけて日本全国を歩きました。学生だからできたんでしょうけど。歩くときはちゃんと制服で、学帽をかぶって。そうすると、皆さんいろいろと優しくしてくれるんです。

宿は親戚のところとか、昔、隣りに住んでいた人が引越して行った先とか、あちこち知らない人のところにも行きました。ほとんど宿屋には泊まっていないんです。

九州は指宿まで行きました。指宿の砂の温泉、あそこは疲れました。熊本に行ったときは、うちの隣りの北海道庁の社宅にいた人のところへ転がり込んで遊んでいました。紀伊半島は、親戚が船主をやっていましたから、そこへ遊びに行ったり。京都は、一緒に行った友だちが下宿をしていたので、そこへ泊めてもらったり。東京近郊にも親戚があったので、そこをまわったりして。

当時でも、日本全国をまわって歩くなんていうのは珍しかったと思います。季節は夏でした。学生服を着ていたので暑かったです。暑くても学帽は外せないんです、印象を良くするために。

旅は夏休み中にちょうど終わりました。本当におもしろかったです。

大学の校舎はグラウンドのすぐそばにあった潰れかかった木造校舎で、そこに通っていました。今はもう面影もなくて、素晴らしく良くなりました。もう七十年も昔の話ですから。

体育の授業なんかは、北海の体育館を借りていたのではなかったかと思えます。北海のもボロボロでしたけど。

私は山鼻に住んでいました。電車に乗ることもありましたが、歩いて通うことが多かったんです。歩いて中島公園をすり抜けて行くんですが、結構時間がかかりました。三十分ぐらいかかったかと。

校舎のまわりがみんなりんご園だった。りんご園の中をくぐって、学校のグラウンドのほうに来ていたんです。そんなことで、朝は、りんごの食事付きです（笑）。

帰りはくたびれて電車で帰りました。電車は中島公園のところから抜けて、山鼻九条へ。そこから山のほうをずっと回って行って、南十一条で降りるというコースでした。橋も今みたいに無



昭和 36 年 電車と豊平駅

かったですから、ぐるっと回っていかないと辿り着けなかったんです。ですから、りんご園の中を通っていくのが一番近かったんです。りんご園も垣根なんかほとんど無く、自由に入れました。学校に行くにはちょうど良かったです。正式な道路ではないですけど（笑）。

あの頃、りんご園ですから勾配がありました。今のような、あんな住宅街になるなんて思わなかったです。

雪印乳業に入社して全国をまわる

卒業後は昔の雪印乳業に入社しました。私が入ったのは雪印ではなくて、雪印の子会社みたいな、北海道バターという会社でした。

私は昭和三十一年に入りまして、三十三年に雪印乳業と合併したんです。会社に入ったときは、旭川に一月ばかり研修を兼ねて行って、最初の勤務地が釧路工場でした。釧路に一年半ぐらいいて、それから札幌に帰してもらって、苗穂の今の雪印乳業のあるところへ通いました。

三十四年に東京工場へ転勤になりました。その後、三十六年に千葉の松戸へ。松戸に工場を建てるといふときで、最初の工場長になる人が札幌の出身だったことで「行け」と言われました。松戸で工場を建てて、三年ほどいました。

三十九年から、今度は神戸の工場建設に行きました。神戸工場が動き出したのが四十年で、四十四年に名古屋の東海事業所に転勤に。

東海から、四十六年に静岡工場へ。静岡で管理職になりました。

四十八年に、日本ポルト産業という会社を神戸の港に建てに行きました。これは砂糖会社の日新製糖と、神戸の港の仕事をする上組と、雪印の三社

で作った会社です。

会社作りを三年ぐらいやって、五十一年に関西の支社へ。そこで二か月ぐらい待機をしまして、五十一年の八月に千葉工場へ転勤になって、事務課長となりました。

五十六年に東北販売本部のある仙台に移って、六十二年まで丸六年間いました。東北は販売本部ですから、東北一体全部を事業所で見ているので、各地で遊んで歩きました（笑）。

六十二年に関西にまた戻ってきて、関西販売本部に行つて、六十三年に四国の高松支店に行きました。

平成三年に関西本部に戻ってきて、平成十六年に定年となりました。

本当に日本全国、あちこちまわらせてもらいました。九州だけ行っていないんです。誰もが「九州はいいぞ」と言うのに、行かせてくれなかった。九州を除いて全部まわりましたから、全国知らないところは無いです。雪印でも、これだけまわって歩いてきた人はそうはいなかったです。

新しい工場を二つと、新しい会社を一つの立ち上げに関わりました。やっぱり大変です。会社はお金が無いから、安い土地を買うことで、いろいろと問題もありました。北海道ではあまり無いような経験もして、今考えれば、ちよつとまずいこともありました。

関西はあけっぴろげでいいです。難しいのは名古屋です。名古屋人は、よそ者を受け付けないような感じですから。今はそうではないでしょうけれど。名古屋の嫁入りなんて大変です。トラックに花嫁道具を積んで押しかけるわけですから。

同窓会の関西支部を立ち上げた

同窓会の関西支部立ち上げの経緯について。私が最初に関西に行ったときには関西支部とは言わなかった、大阪支部と言っていたかな、それがあつたらしいんですけど、二、三年で機能しなくなったということらしいです。私が関西に来たとき、平成十五年に宮崎文彦さん（昭和三十一年卒・経済学三期生）から「関西は動いていないので、支部を作ってほしい」という電話がありました。

宮崎さんのことは学生の頃に知っていたわけではないんですけど、『ディリーマン』という酪農専門誌をやっていたときに、私の父と何か関係があつたそうです。私が関西にいるということを知って、そういう話を持ち込んだらしいんです。

それで、高田哲也さん（前事務局長）のところへ顔を出して、宮崎さんからやらないかと連絡があつたのでいろいろ相談をして、じゃあやろうか、ということになりました。

関西にいる人全員に、「支部を作りたいので賛同してほしい」ということで手紙を出しました。そのときに賛同してくれて、一緒に仲間になって



三期生 宮崎文彦さん

くれたのが大久保明男君（現関西支部長）なんです。大久保君のあ

とにも一緒にやってくれたのが、今、札幌在住の横川精二さん（昭和四十四年卒・法学三期生）。横川さんは関西にいるとき、酒の「大関」に関わっていました。横

川さんと大久保君と私と、今、名誉副支部長をやっている中村保忠君（昭和四十一年卒・経済学十三期生）と、川那部晴彦君（昭和四十四年卒・経営学Ⅱ部一期生）、この五人で立ち上げました。

札幌にも行って高田局長さんと相談しながら、十四、五人が集まって、やっと支部を立ち上げることができました。それからはおかげさまで、コロナになるまでは毎年ずっと総会を続けていました。そんな経緯があつたんです。

雪印の経験で、新しく作ることは結構慣れてますから。そういう心得はあつたので、何とかなっています。

関西支部総会は四時に始まって、二次会が六時から。結構飲むのが好きですからね。でも最近では、コロナの影響で集まる人も減りました。世代が若くなつたということもあるかもしれませんけど、少し寂しいです。

去年の総会ときに大久保君が中村さんと二人で札幌に来て、総会で横川さんに何年かぶりに会って、私も行く予定をしていたんですけど、ちよつと塩梅が悪くなってやめてしまったんです。また来年会いましょうという話でしたから、今年はどうしても行きたいと思っています。

私が古い人間だからかもしれませんが、最近の若い人はなんだか元気がないというか、人間がちよつと小さくなった気がします。もつと悪くてもいいんじゃないかなというふうに思います、いい子ばかりですから。

（二〇二四年四月十七日 インタビュー）

【プロフィール】

澤 定夫（さわ さだお）

一九三二年七月十六日、札幌市生まれ。一九五二年札幌南高等学校卒業。
一九五六年経済学部I部経済学科卒業・三期生。関西支部名誉支部長。

岡田屋が私たちの「学園文化」 すべてはここから繋がっている

昭和三十年、第一回対東北学院大学総合定期戦が札幌で開かれた。開催
までには大変な困難があつたが、当時の学生たちが奮起し実現した。



経済学部経済学科
昭和32年卒・4期生
はやさか ひさよし
早坂 久良

アカデミックな十月祭を開催しようとしたものの……

昭和二十九年六月に体育会が創設され、二年生のときに初代体育会幹事
長となりました。四年生時に自治会の委員長に立候補して、十代委員長に
当時は、委員長がしょっちゅう変わっていました。一号館もできてこれか
らというときだったので、もう少し大学の将来に沿った自治会を創ろう
じゃないか、ということでも立候補したんです。

一番先に手掛けたことは臨時学生大会を開き、自治会の所属する上部団

体を、私学協から私学連へ所属替えしたことです。花井議長、盛田文教、
牧応援団、中村体育会、それぞれの盟友の支えでできました。

当初、十月祭ではゼミの公開をしようと思いました。アカデミックな教育
研究の発表で、できたばかりの学園の名を世間に広めようとしたんですけ
ど、誰も乗って来ないんです（笑）。やっぱり軽音楽とか、飲食とか、高
校生の学芸会の延長みたいになってしまつて。自分もつと、アカデミッ
クなことをやりたかつたんですけど、駄目でしたね。他の大学祭でも前例
が無かつたので、実現していれば北海学園だけは研究発表の場、となつて
いたんですけど。経済学部だけの単科だったこともあつて、世間に見ても
らえるものが他に無いんです。

それで、定期戦をするときにはすごく苦労しました。定期戦というのは
総合大学がやるものですから「あなた方のところは単科大学ですよ」と
いう感じだったんです。

私は樺太からの引き揚げ者です。商業学校に入つて社会に出て、一日も
早く両親を助けたという気持ちがありました。兄が小樽商業を出ていた
たので、私も行きました。小樽商業に行ったら家計も安定してきて、大学
に行けるということになりました。

横浜国立大を受けたのですが落ちてしまったので、先輩のところへ居候
してもう一年、アルバイトをしながら塾に通おうと思ひました。『スター
ズ&ストライプス』という、星条旗の名前がついた兵隊の新聞があるんで
すけど、その新聞の売り子をやりながら塾に行きました。そうしたら、私
が売り子をしていた横田の隊が、真駒内に転属されることになりました。

それならばと、私も一緒に北海道に帰りました。

帰ったら、北海学園が学生の二次募集をしていた。四月十八日に追加入試をするというので受けたんです。確か四十人ぐらい受けて、十八人ぐらい入りました。入学式が札商の校舎だったので「おいしい、校舎無いのか」と（笑）。とんでもないところに来てしまったなど。けれど、目の前で一号館の工事が進んでいて、図書館も完成していましたから、やがてでさるのだろうと思っていました。

岡田屋が私たちの「学園文化」

当時、学内に学生の溜まり場所がありませんでした。学園の向かいにあったのが岡田屋食堂です。岡田屋が私たちの文化なんです。北海学園の文化じゃなくて、岡田屋文化なんです。



岡田屋店主 岡田ふみさん

部よりも早いです。

岡田屋の世話にならない学生は、北海学園の学生ではないくらい。多くの学生は、岡田屋に入り浸りでした。

二期上に、岡田屋の先輩で関川和彦さんという方がいて、硬式野球部を作りたいと言いました。準硬式はあるけれど、硬式は無かったです。部をどうしても作りたいけれど、作り方がわからないので手伝ってほしいとポスターを貼ったり、学生部に行つて経験者を探したりしました。選手は札商の人が多かったです。

それでなんとか作っても、同好会で一年の実績を積んでからやりなさい、という規程がありました。自治会の下に運動委員会と文化委員会があり、学生大会にかけて賛否をもらわないといけないんです。

まず体育委員会を開いてもらって、岡田屋にたむろしている各部の偉い人たちに賛成してもらい、陸上部、ラグビー部、硬式野球部の三つを認可してもらった。それから秋の学生大会で承認してもらって、やっと硬式野球部の募集ができたんです。

道具もユニフォームも無いですから、藤井スポーツや札幌白衣へ行つて、「予算をもらったなら一年遅れで払うから貸してほしい」とお願いしたら貸してくれました。

一年生の二月に来年度の予算委員会があつて、初めて予算をもらいました。予算を仕切ったのは、体育委員長だった森本さん（森本正夫、二期生、第三代同窓会会長）。森本さんは柔道部が十五万、硬式野球部が七万としたので不満でしたが、「実績が無いからだ」と。確かに、柔道部は強かつ

たですから。

他大学の定期戦に刺激を受けて

六月を過ぎた頃、統計屋が、北大と小樽商大との定期戦のポスターを岡田屋に貼りました。それを見た市民は大盛り上がり。「うちもこういうのをやりたいな」とみんな言いますが、すぐにできるわけではない。これは歴史や財産がある大学の中から生まれてくるもので、昨日今日できた大学とどこがやってくれるんだよ、という話です。

そこへ、小樽商大の先輩が、青山学院大で駅伝を走っている人を連れて岡田屋に遊びに来たんです。その人は、東北学院大との定期戦を終えたばかりだと言っていて、いろいろと教えてくれました。そのときは黙って聞いていましたが、東京の大学の中には入っていけないけれど、仙台の東北学院大ならどうか、という気持ちになったんです。

その人は、青山体育会の定期戦役員でした。八月頃にその先輩へ「東北学院大の体育会会長のお名前を教えてくださいませんか」と聞いたら、関口さんだと教えてくれました。私は関口さんに手紙を書きました。「定期戦とこの頃はこういうふうにするんですか」と。

そうしたらまず、学生対学生の大会ではなく、大学対大学の対抗試合だから、大学の先生をあてにせず学生が主体になって進めなくてはいけないと。それから、自治会からある程度離れて、独立した体育会を組織しなさいと。そして財政も、試合も、何もかもすべて対等でなければいけない、ということを整理して手紙をくださったんです。

それを上原学長に見せて、「お金を出せるところまで大学で出してほし

い、私たちは何とか作ってみたい」と伝えたら、先生は出すと言ってくれました。上原学長は胆力というか、度胸が据わっている人でした。

いずれにしても、こちらは規模が小さい。向こうは伝統のあるクリスチャンの総合大学です。だけど、何としてもやってみたいということで、虎の巻にあつたように、まず体育会を作ることになりました。学生部長の三森先生には自治会からの独立はできないと言われたので、予算経路だけ自治会を通すことで妥協したんです。

定期戦を開催するために、各運動部に出場するようお触れを回したら、東北学院大のような伝統のあるところとやりたくないと言う。そんなことを言わないでやってみようと、十五のクラブのうち十を選別しました。

実行委員会を作って、委員長、副委員長を決めて、総務、会計、広報、競技、連絡、交通、医療等、九つぐらいの班に分担しました。

十一月四日、私は仙台駅に着きました。駅構内の「ゴジラ東宝公開」というポスターを見て「よし、ゴジラになるぞ」という気持ちになって、東北学院大へ向かいました。七時半頃、守衛に「関口さん（関口憲三、体育会常任幹事会第二代幹事長）と小田学監（小田忠夫、初代学長）に会いに来た」と伝えたら、案内してくれました。上原学長の伝書を携えて行ったところ、「定期戦には賛成しますけど、どう考えても北海学園側のメリットが大きすぎる。東北学院大のメリットは何も無い」と言うんです。確かに、何もあるわけない（笑）。ただお金をかけて札幌に来るだけ。

何か言わなくてはと思って「学生を集めるのに北海道は大きなマーケッ

トです、名前を売っておいたほうがいいんじゃないですか」と伝えたら、「商人だな」と言われました。

あとからわかったことですが、上原学長が「うちの大事な学生だから、丁重に扱ってくれ」と伝えてくれていたんです。感激でした。

翌年二月、関口さんと日塔さんの二人が小田学監の伝書を持って来て、正式に決まりました。学生の実行委員会同士が協定を結び、大学が調印しました。

しかし、資金が全然足りません。印刷代、通信費、ボランティアの維持費、送迎バス代、損害保険、施設の賃料、大会旗、各部の補助金……。上原学長には迷惑をかけたたくない、どうしようかと考えて、野球部のときにお世話になった小原さんという北海道新聞の運動部の記者を訪ねました。後援をお願いしたら、道新がやってくれることになった。さらに、河北新報、HBCも入ってくれました。あとは、ダンスパーティーやプログラムの広告で、総額四十万円を集めることができました。

会場は、中島公園のスポーツセンターと中島球場です。学園からスポーツセンターまでの交通の便が悪くて、ハイヤー賃が問題でした。朝日ハイヤーの内山産業のお嬢さんが札幌短大にいたんですが、その方の伝手でお父様に会わせていただき、一日五千円で乗り放題、それを六日間という話が始まりました。

南七条西一丁目にプラネットというキャバレーがあったんですが、そこを定期戦期間中の事務所に使っていました。これも岡田屋の縁で、プラネットで働いていた人がボーイ長になり、無償で貸してくれました。

花吹雪と、ブラスバンドと、応援団

東北学院大はフェリーで札幌まで来て、札幌駅で歓迎式をやって、翌日に対面式、市中パレードをやりました。パレードのコースは大通八丁目からすすきの。仙台から選手・役員・一般学生を含めて三百人ぐらい来ますから、市民が歓迎してくれなかったら申し訳ないということで、花吹雪を撒こうと、三越さんに掛け合いました。しかし、三越さんは何としても駄目だと言う。私は「うちからそちらに六十人程学生アルバイトが入りますから、明日は全員引き上げます」と言いました。うちの学生は三越さんに重宝がられていたんです。そうこうしているうちに、菅さんという女性アルバイトの上席の方が「花吹雪を撒く場所は貸してあげますが、女性店員は使わない、あなた方が来て撒きなさい」と許可してくれました。



昭和30年 第1回定期戦

大学に帰って、アルバイト賃

を「夜食のみ」で人手を募集して、みんなで花吹雪のテープを切りました。吠^{かます}三俵に包んで三越に運んで、四階と七階から、五十人ぐらいでばら撒きました。のちの、ファイターズ優勝パレードのような光景でした。

そのときに、先輩ってこんなにありがたいことはないと思っただのが、終わったあとの清掃。市役所の清掃部が「俺たちに任せろ」

とばかりにやってくれました。清掃部長がⅡ部の出身者だったんです。涙が出るくらい嬉しかった。あんなに感激したことはなかったです。

ブラスバンドが無いと、パレードが様になりません。そこで札商のブラスバンドを借りてきて、角帽をかぶらせて出してもらいました。札商は全国



大会に何回も出ているので上手いんです。ところが東北学院大は応援団が本物ですから、回って行進したり、太鼓をグルグル回したり、カッコいいんです。こっちはただ行進して吹いているだけ（笑）。それでも、市民の皆さんはすごい歓声と拍手でした。目新しい近代的なものに映ったのかもしれないです。

定期戦をやるのに一番の花は応援団です。応援団が無かったら話にならないので、同期の牧君に「応援団を仕切ってほしい」と頼みました。そうしたら「わかった」と言って三月にどこかへ行ったきり、帰って来ないんです。なんと、慶應義塾大の応援団の合宿に入っていたんです。だから、うちの応援団の形は慶應なんです。着るジャージも慶應を真似ている。すべて牧君が考案してくれました。

試合初日に「東北学院大が引き上げると言っている」

無事、行進も終わりました、翌日から試合開始。プラネットで初日最後の報告が来るのを待っていました。そうしたら「委員長、すぐに来てほしい」と。何かあったのかと聞くと、「仙台が引き上げると言っている」と。スポーツセンターから、このまま仙台に帰ると言っているそうなんです。なんと、我がボクシング部が替え玉をやったと。フライ級で全国一位の高校生がいたんですが、その選手が出場しているということになったらいいんです。それで、引き上げるとなると。

とにかく副委員長と二人で行って、何とか収めてもらえないだろうかと謝りましたが駄目でした。スポーツマンシップにのっとってやっているわ

けだから、許されないことだと。そう言われると、こちらもうぐうの音も出ない。けれど、お互いにお金もかけているし、何とかしてもらえないだろうかと、初めて土下座をしました。両学委員長の預かりということで、記録に残さない、一切誰の責任でもないと決まりました。ただし、試合は没収すると。あんなに悔しい思いをしたことはないです。

無事に卒業し、銀行屋になりました。ですが、魂が抜けたみたいな、燃え尽き症候群になってしまつて。何をやっても楽しくないんです。あの子の、寝ないで頑張つた情熱というのはどこに行つたのか。

だけでも、そういう時代だったんです。大学も、よくそういうことをさせてくれたと思います。あの頃は学生がやるのが当たり前だと思つていましたから。学生の手でやる、何から何まで。

でもやつぱり、森本さんの力つてすごかつたです。学生と世代が合つたから。森本さんは生粋の学園を出た人だから、「大学を潰しちゃならん」という気持ちがあつたと思ひます。いろんな人がいましたけど、抑えられるのは森本さんしかいなかつたかもしれません。

私が入学した頃は、佐藤吉蔵さんという理事長だったんですけど、素晴らしい人でした。定期戦の報告に行つたら、佐藤さんは味噌、醤油を遠征時に百人分ぐらい持たせてくれた。定期戦に行くにしても、米の通帳を持って行かないといけない時代でした。

米の配給の通帳を、定期戦で泊まる仙台に持って行くんです。それが無いと米が食べられません。ところが仙台は米どころだから、米の通帳は持つて来ない。彼らが札幌に来るときは、現物を持つてくる。三十一年で

配給制はなくなりましたが。

私たちの頃は、何か燃えるものがほしかったわけです。勝つた負けつたという一喜一憂は、自分たちがお互いに共有して興奮するものだから。

(二〇二四年五月三十日 インタビュー)

「昨年の六月二十五日午後二時、本学体育館で第六十九回の閉会式に只一人の部外者として参列した。エール交換に去来するものあり、涙腺が緩んだか、母校の校歌より学院の校歌の方が声が大きくなるのに驚いた。

当時、吾が校には校歌がなく、岡田屋の唯一人の人格者・吉本(三期)さんが逍遙歌として作詞されたのを、横沢君(四期)が作曲して学生歌として定期戦で認知された。以后、学歌ができるまで、学生歌が何年もの間代行され馴染んだ。

両学の総合定期戦は単なるスポーツ試合の勝ち負けだけでなく、全学全体の盛り上がり期待する年度の祭祀として定着したと確信した。それになければ七十年も持続する筈がない。

開学当時、親でさえ学園の入学を恥うつていたので、ましてや市民からは最低の評価であつた。第一回の市民パレードの華やかさと競技場、スポーツセンターの白熱の試合観戦、全学の応援の熱気で市民の学園大学に対する評価は大きく変わり、認知されたものと思つた。又、定期戦を機に体育会各部に掛売してくれた藤井スポーツ店、メダル商会、札幌白衣、山禮等も本学に対する信用も担保されたと思う。

当時の岡田屋の同志の多くは故人となつた。なかでも三代の中村敏郎君

とは、今一度七十年織りなす紬を語り合いたかった。冥福を衷心よりお祈りします。関川先輩、牧、花井、盛田の諸学兄は健在だ。来年の七十一周年の出会いが楽しみだ。

私のすきな言葉「疾風に勁草を知る」光武帝一座右としている。」

(早坂久良さん手記)

【プロフィール】

早坂 久良（はやさか ひさよし）

一九三三年二月十日、樺太生まれ。一九五三年北海道小樽商業高等学校卒業。一九五七年経済学部I部経済学科卒業・四期生。体育会初代、学生自治会十代会長。



第3回対東北学院大学定期戦記念品(滝口鉄夫さん提供)



東北学院大学・北海学園大学徽章(山下雅宏さん提供)



初代学長 上原轍三郎先生

新開拓精神

上原生



上原学長の講話 昭和28年



昭和32年4月 開発研究所開設
上原研究所長を囲む教職員

「山は学校、山小屋は教室」 部員集めからはじめた山岳部の山小屋管理

昭和二十七年に設立された山岳部は、当時の豊平町所有の山小屋管理を行うことになった。大学の名を広めるためと、学生の開拓者精神が窺える。



経済学部経済学科
昭和32年卒・4期生

やまぎわ ひろあき
山際 廣昭

私は中学二年生のときに山岳部に入りました。中学の英語の先生が知り合いで、冬山に連れて行ってくれました。スキーには自信があったんです。それが初めての山です。冷水小屋ひやみずに一泊しました。帰ってきて「ああ、山っておもしろいな」と思いました。そのあとは無意根に行ったり、手稲山も行つて。中学時代はスキーで歩けるところへ何か所か行きました。高校もそのまま山岳部です。山岳部では体操競技みたいなものを鍛える必要があります。鉄棒とか、片手で長くぶら下がるとか。そういう訓練をしなきゃならない。マットワーク、組み立て運動、高校のときは体操部としてそんなことをやりました。

山岳部が山小屋を管理することに

北電が豊平町に寄付した山小屋を、豊平町から北海学園が譲り受けることとなります。先輩の出野君の父が道の助役をやっていたことで、豊平町の役場との交渉はスムーズにできました。

なぜ北海学園が山小屋管理をすることになったかという点、今思えば、やっぱり役所ですから、個人には委託ができなかったんだろうな。法人となると大学とか、そういうきちつとしたところに管理の責任者を置かなくてはいけない。

大学も名前を広げなくてはならない時代ですから、知名度が上がるようなことであればいいでしょう。迷惑をかけないように、やるのならちゃんとやりなさい、ということ。

山岳部の冷水小屋管理は、何人かの仲間と一緒に交渉に行きました。う

山との出会いは中学生のとき

学生時代は、一期生も二期生も三期生ぐらいまでは毎日顔を合わせていて、全員友だちみたいな感じでした。

そのうち校舎が大学らしくなっていました。当初は、札幌商業の一角にありました。そのときに私が大学に入ったので、中学も高校も大学も同じ校舎だったんです。上原先生も毎日顔を合わせて、先輩も後輩も同じくらい一緒だったんです。

ちの大学が初めて山小屋管理を引き受けるということで、大学の承認が必要でした。管理委員会を急遽作り、部員が少なくとも三、四十人はほしい。その辺が一番苦労したところです。半年足らずで三十人ぐらい集めました。山の経験が全くない者もいるので、山に登らせて、山小屋を見せなくてはならない。

先輩の顔ぶれもたくさん必要ですが、一期生というのは難しい。いろいろな経済事情、家庭の事情があつて、遊びながら大学に来るといふ人はあまりいませんでしたから。さらにその年に北電が、中山小屋も両方管理してほしいと言ふものだから、なお難しかったんです。高圧線の工事がだいぶ前に終わつていて、二つの小屋が無人の状態になつてから両方の小屋の管理を、と。

まずは、部員全員を山に連れて行く計画を立てました。上原先生を筆頭に立て、五十人ぐらい、貸切バス一台だったかな。山に慣れた者は定山溪鉄道（じょうてつ）で定山溪まで行つて、電車を降りてからは歩かせて。

そこがスタートライン。部員は毎週土・日曜日に山へ行きます。土曜日に講義があつても、一切受けずに山へ行かなければいけないんです。山の先輩・後輩というのは、封建的などころがありました。「来週は山際、その次は誰々」というふうには、先輩から命令されたら断れない。

じょうてつから、一人分だけ無料券を貰いました。お金がないから交渉してそういうことになつたんですけれど、あとは自腹で行かなきゃならない。名前だけ集めた学生を連れて山小屋へ行くというのは、履き物から着る物からリュックの果てまで、全部貸してあげる必要があるので苦労しました。

小屋に泊まる客というのは、二、三人いたらいいほうです。今まで管理人がいなかったの、あまり急激に人は来ませんでした。

学園が新しく山小屋管理をするということで、北大が管理する空沼小屋と比較されました。「あそこは毛布を貸してくれたよ」とか。いつも言われたのは薪のこと、毛布のこと。でも置いて、盗まれるんです。当時は貧しいですから。山歩きに適した履き物を持っていなくて、「下駄しかないよ」と言う人もいる、そういう時代なんです。

自分で食べる物は自分で持つて行きますが、おにぎりにしても夏は傷むし、冬になればとても寒くて大変です。「山岳部はそういう大変な部だよ」「だから君たち、こっちのほうがいいよ」と運動部に声をかけられて、部員を引つ張られてだんだん少なくなつていく（笑）。部員を集めることは、常についてまわる問題でした。

管理はどうか曲がりなりにも、一、二年ぐらい経つたら少しずつ先が見えてきました。そうなると次の問題は、「大学の山岳部であれば本当の山を歩かなくてはいけない」ということでした。体力もそれに相当して、合わせていく必要があります。そのためには、やっぱり日高の山を目指したいなど。日高へ行くためには、一週間ないし二週間かかる。当時はまだ今のように林道が整備されていませんから。地元の人に頭を下げて、馬車や木材を運ぶトラックの運転手と話がつけば、もう上々なんです。

私の一期上の先輩で、酒造組合の役員の息子で三塚君という人がいました。彼が父に頼んで、酒を何本か貰つてくるんです。それを奥高見（日高）という山に行くときに持つて行つて、運転手に渡してトラックに乗せ

てもらおう。トラックに乗れると、山の往復一日分違ってきますので、持って歩く食料から何から全部変わってくるわけです。そういう交渉が得意な人や、知恵のある人があちこちから協力してくれて、どんどん山行きの中に入って来ました。



営林署の獣道があつて、笹刈りは毎年はしていませんから、かき分けるのに二、三日かかります。その間は水が取れませんから、食べる物は乾燥したものとか、軽いものになります。本当に生きるか死ぬかの境目ぐらいの作業です。うまくいくのが三回のうち二回ぐらい、あとはもう途中で帰って来てしまう。

当時は、山登りのルートが全然ありませんでした。北大の山岳部に行つて資料を調べても無いんです。現地のアイヌや、営林署などの伝手で調べている者だけが知っている地図というものがあるんです。

私は高岡先生を連れて行きましたが、そのときが高岡先生の一番大きな山行きだったのでないでしょうか。かなりの年齢で行きましたから、大変だったと思います。それでも何事もなく、頂上まで行つて戻りました。

山の経験が無いと、基礎体力みたいなもの、粗食に耐えるようになっていないというのはなかなか大変なんです。食べ物もご飯があれば最高の事です。口に入るものを少しずつ残しておく。朝から雨だったら、今日は食事抜きということなんです。次の日も雨だったら、次の日も無いです。長いときは三日間ぐらい、飲まず食わずで入っていないと、帰る日までの食料が持たないんです。そういうことが日高ではありました。

当時は標識なんて無いですから、前に誰かが通つた印は、ノコギリやナタで木を切つた跡があるかどうか、それを確認します。帰るときには道がわからなくなるので、目印を置かなくてはいけません。間違つと危険なところははっきり駄目だという印をつけますけど、それ以外はつけた人が合っているかどうかはわからないわけです(笑)。誰も通っていないとこ

ろを自分が通るときは、帰りのこともちゃんと心得ておかないといけない。それもある程度年数が経ったら取れてしまうような、テープをちよつと結んでおくぐらいが自然のためにもいいです。

私は小さいときに中耳炎を患って、農家で生まれたものだから治療がしつかりしていなくて、両耳の鼓膜が駄目になっていたことがあとでわかりました。人工鼓膜というものがあるけれど、元に戻るかどうかはわかりません。それならばやらないほうがいい。生活は普通にできるし、好きな山に行けば雑音が入らない。こんな良い運動はないと思いました。

私のまわりのOBの人たちは、父が社長であったり、経営者であったり、いろいろな団体の役員であったりしたので、自分がアルバイトをして学校へ通ったという人よりも、学費などは親任せという人が多かったんじゃないでしょうか。それから、学生でありながら喫茶店を経営していますとか、自分で仕事をしている人もいます。水商売なんかでも、家業と言えば学校で駄目とは言えませんし。授業料は出してくれているけど、そういうものは自分で経営してやるという時代でした。

父から継いだ土地から「百景園」がスタート

父が昭和二十八年に亡くなり、あとを継ぎました。否応なしにあの辺一帯の土地をもとに、これから先食べて行くことに追われて。父がたまたま農業以外の仕事を少しやっついて、農業から転換をしなきゃならない時代だということで、飲食業を始めたんです。

誰かが先にやっていることはすぐ競争になってしまうから、誰もやらな

い飲食業をやろうと、ジンギスカンを始めました。月寒の八紘学園が最初に始めたんですが、何回か食べに行つて「肉を肉屋から買ってきて作れば、調理人がいなくても商売できる」と思いました。食品管理のいろいろな資格を取るとか、屠殺といったことは面倒ですから。肉屋さんの卸と提携して、私はりんご農家でしたから、りんごをもぎながら。「好きなだけりんごを取つて食べていいよ、その下で炭火でジンギスカンをやろう」と、それが爆発的に当たりました。それから毎年、倍ぐらい客が増えて、天神山に大きなジンギスカン屋「百景園」を作ったんです。

それまでは若い人が肉を食べたいと思つても、肉の料理が無かつたんです。本州のほうへ行くと松阪にしても近江にしても、牛肉の霜降りがいいなんて言われますけど、牛肉だけだともものすごく臭くて食べにくいものなんです。羊も臭いので、匂いを消して食べる。

一般の人でも焼肉は誰でもできることですが、調理人の世界というのはものすごく複雑なんです。本当に食品の良い悪いという知識のある調理人は、まず千人に数えるだけしかないものです。旬の山菜で中毒死する人がいますが、そういう食べ物の恐ろしさというものを、商売をやっていくうえでだんだん教えられました。

規模が大きくなっていくうちに、畑で丸太の木を椅子にして、炭火で食べるようなジンギスカンはあまり良くないということで、小屋を作り、屋根をかけて、虫が入らないように網戸をつける、下もコンクリートにしなきゃならない……となつていきました。だんだん贅沢になっていって、畳

を敷いて、夏は冷房、冬は暖房をつけなきゃ……と、こうなっていくわけです。

生きるか死ぬかの山歩きが、生き方すべてに繋がっていく

山で苦勞をすればするほど、世の中の動きに対して判断していくのは山男なんじゃないか、と私はそう思います。山はそれだけ自分で苦しい、痛い、そういう思いをするから、次の時代の判断をしていけるのではないかなど。そして自分を守れると、私はそういうふう思うんです。

富士山は十回登ってやめました。登山口で代表的なのは、河口湖、須走、それから静岡のほうから登る富士宮口のコースなど、全部で四か所ぐらいあるんですけど、それはみんな登りました。

最後に富士山に登ったのは八十代です。それまでは毎年のように行っていました。一番大勢を連れて行ったのは、平岸の農協の青年部に「山際さん、うちの山岳部で富士山に登りたいのでガイドをお願いします」と言わ

れたときです。私のワゴン車に乗れるだけの人数と荷物を積んで出発しました。結構な重さでした。

山登りでは、「精神的にもう駄目だ」と思うことがあるんです。体力に自信があるという高齢者が「大丈夫です、私は子どもの頃からずっと

バレーボールをやっていましたから」なんて言っていたとしても、夜暗くなって雨が降ると、精神的に駄目になっていくことがあります。そういうときは、このまま放っておいたらこの人はどこか崖の下に飛び込んでいくな、というような感じになります。

私は卒業してから何年か、山の空白の時期があるんです。

私の弟が北大の山岳部でした。日高の札内岳を登りまして、そんなに難しくはなかったんですけど、学生時代だからどうしても夏休みしか行かないということ。五人で行ったと思います。

帰る日が父の命日で、「七月二十日が命日だから帰ってくるよ」と言っ出て行ったんですけど、二十日に連絡が無かった。天気でも悪かったのかなと思ったら、遭難の知らせが入ったんです。札内川で流されたんです。八ノ沢の出会いのあたりで。その年に北大は、冬山でも遭難しています。一、二年の間に三回ぐらい、同じ札内川のところで遭難しています。

これは結論から言うと、焦りもあるし、苦しいことがあまり無い世代ということなんです。弟ということもあって私の装備がそのまま使えるから、お金もかからないと気楽にルンルン行って、天気の良いときにはあつと登って、さあ帰ろうとしたときに、雨なんです。札内で雨に降られると、その上のカールのあたりから出る水というのは予想以上にすごかったです。それが収まってきて、それじゃあ渡ろうとしたときに一人が流された。用心が足りていないんです、そういうときは。流されたら空荷で、先頭の者は必ず伝える、結んで渡らなくてはならないのを、そのままリュックを背負っていて流された。そして、慌てた次の者もまたリュックを背



負ったまま、すぐ掴めると思ったのが掴めないで流れた。そこで二人が死にました。

ですから、あまり苦勞がない幸せな時代だと、事故に繋がるということもあるんです。そんなこともありまして、私もだいぶ長いことシヨックでした。山については、やっぱり注意には注意です。事故はいつ起こるか分からない。だから、明日が元気で迎えられればそれが一番幸せ、そう思います。

今のOBは、山の技術的なことも教えてあげなきゃならないという、そういう気持ちがあります。小さい山に入ってみると、「先輩はこういうことを言っていたんだな」と気づくのが、何年間かのうちに一つか二つはあるんです。

一つの小屋をきちんと管理する人間を置くことが大事です。山の経験者であれば毎週一回行ってもらって、必要であれば有料にして管理してもらうと。OBを「山小屋の親父」というふうにしていくのも一つの方法です。そうすると、山岳部の山行きの技術ももっと進んでいくんじゃないかと思えます。

(二〇二四年五月二十二日 インタビュー)

【プロフィール】

山際 廣昭（やまぎわ ひろあき）

一九三四年七月二日、札幌市生まれ。一九五三年札幌商業学校卒業。一九五七年経済学部I部経済学科卒業・四期生。山岳部。株式会社百景園会長。

銀行と大学の二足の草鞋 初志貫徹を果たして夢を現実させる

I部の四期生と年代が重なるのが、II部の一期生。働きながら大学へ通っていた人が大半で、草創期の大学は教員も学生も大変な時期だった。



経済学部II部経済学科
昭和32年卒・1期生

いけわき としあき
池脇 利昭

くて、常に先輩先輩できました。一期生を調べてみたら、百四十六人卒業しています。そのうちの五十人ぐらいは、学部ができて昭和三十年に編入試験を受けた人たちです。あとの百人ぐらいは短期大学からそのまま上がってきた方ですね。

小学校から高校時代は戦中、戦後の混乱期。小学校四年生から六年生の間はほとんど毎日勤労奉仕で、飛行場作りや高射砲陣地作り、丘珠や美香保公園へ行きました。

当時、丘珠空港というのは軍用空港でした。戦争が激しくなった四年生ぐらいからは、あまり授業は無かったです。教練という時間があった、木銃とか鉄砲を担いで歩いたり、手榴弾投げの訓練、そんなことばかりやっていました。十メートルごとに線が引いてあって、実際の手榴弾ではないんですけど、それと同じようなものをどれくらい投げられるかという教練です。少尉の下に准将という人がいて、准将が軍刀を抜いて……もう大変だったんです(笑)。

戦中から戦後、混乱期の小中高校時代

今の大学キャンパスの中に入るのは今日が初めてです。こんなに大きいとは思いませんでした。家が澄川なのでよく前を通るんですけど、昔の面影は全然ありません。私に通っていた頃は、北海中学と札幌商業だけだったかと。木造で、鉄筋の建物はなかった。正面のところにある木だけは、昔の松の木かなという感じです。

大学は昭和三十二年卒業で、たまたま第一期生ということで先輩がいな

家の近くに札幌飛行場があったこともあり、私は小学校を卒業したら予科練に入りたいと思っていました。でも、予科練は小学校卒は採用しなかったのです、どうしても中学に行かないといけない。それで予科練に行くまでの間、グライダーに乗ろうと思って、グライダーのある北海道庁立札幌第二中学校(以下、二中)に入りました、戦争が終わって二中のグライダーは処分しましたので、結局乗る機会は一回もありませんでした。

『北海道航空史』に、北海中学と二中にグライダーがあったということ

が書いてあります。北海学園の方々は、そういう北海道の航空界の礎を築いたことをほとんど知らないと思います。ですから、私にとって北海中学は憧れの中学のひとつで、二中に落ちたら北海中学に行こうと思っていました。

小学生のとき、いつも水車町の川を渡って来て、グライダーを飛ばすのを見ていたんです。まだ戦争中でしたから、飛んでいましたね。

学制改革で、戦後二十五年頃まで旧制と新制の学校が混在しており、私の学歴も非常に複雑です。最初は尋常小学校に入ったんですが、すぐ戦争が始まって国民小学校に変わり、でも戦争が終わったから尋常小学校卒業になっています。それから二中に入学して、第二高（学制改革で旧制二中が廃止され北海道立札幌第二高等学校が発足）の併置中学が変わって、そこに中学四年生までいました、本当は五年生ですけど。それから、学制改革で東西南北がごちゃごちゃかき回されて区分けされて、中学四年生で札幌北高等学校の二年生に編入しました。北高の二期生です。

北高の前身は庁立札幌高等女学校で、北二条西十一丁目にありました。現在の札幌市立大通高校のところですが、私はそこで卒業しました（昭和二十三年、学制改革で庁立札幌高等女学校は北海道立札幌女子高等学校となり、昭和二十五年に北海道北高等学校と改称、男女共学となる）。女性の学校だったところに入ったので、男性用のものが何もなく大変でした。圧倒的に女性のほうが多かった（笑）。

私は、家庭の事情で昼間の学校に行くのは難しかった。父が軍需工場に

勤めていて乾電池なんかを作っていました。戦争が終わったら工場は全部廃止で、失業してしまっただけです。当時は失業手当も無くて、ただ失職しただけ。私には姉がいたんですが心臓が悪く、当時は抗生物質が手に入らなくて、米軍から闇で買っていました。その資金がどうしても必要なので、昼間働いて夜、二中の夜学に行こうと思っていたんですが、幸いにも鉄道建設興業の当直の仕事ももらえたので、昼は学校に行って、夜は当直室で電話をつなぐ仕事をしていました。

そして昭和二十七年に高校を卒業して、札幌短期大学に入りました。中島公園に木造の校舎があつて……と言っても、教室はないんです。がらんどろで、長い板を置いて、椅子らしきものを置いて。授業は全部集中講義です。

私は働かなくてはいけなくて、土木工事とか行商、引越運搬、改造リヤカーで人力車（米兵用）、路上靴ミガキといろいろやりました。昭和二十九年に北海道相互銀行（現北洋銀行）に入行しました。

昼は銀行、夜は大学。単位取得に学生も教員も奔走

銀行で働きながら、昭和三十年に北海学園大学経済学部Ⅱ部に編入しました。昭和三十年に本店がすすきのに移転することになり、その準備でゴった返して大学へ行くどころではなかったんですけど、上司が非常に理解があつて、「仕事をカバーするから行きなさい」と言ってくれました。できたばかりの銀行で、二十八年から正規の採用が始まり、私は二期生でした。正規採用ということで始めから審査部にまわされまして、えらい大変でした。全店の融資の審査をするわけです。北海学園を卒業すると、銀

行では最終学歴変更で四大卒になり、給料も肩書も上がりました。良き時代でした。

当時の北海学園は、編入してからも常勤の先生は少なかったです。北大とか、(新制)小樽商大になる前の先生とか、退職した先生とかが出張して講義をしていました。それから、道庁の偉い人たちは大学を出ていたので、その人たちが講師に来ていました。ですから、休講が多い。今みたいに携帯電話が無い時代ですから、大学に来なければ休講かどうかわからない。二講目がある日は、みんな天ぷらうどんやそばを食べて栄養をつけて来るんですが、大学に来て休講の張り紙がしていると、もうがっくりです(笑)。

自宅の裏に米軍がいて、私はテニスのボールボーイをしていた関係で英語だけは非常に得意だったものですから、英語の単位をものすごく持っていました。経済学も原典経済学とか、統計学も原典統計学とか、厚生経済学も外書でやりました。

札幌短期大学の時、太黒マチルドさんというフランス人の先生がいてフランス語を取っていたんですが、北海学園の第二外国語はドイツ語しかなくて、フランス語は開講されていなかった。それで、田代先生に相談したら「そんなのどうにでもなるんだ」と単位をいろいろ入れ替えて、いつの間にか第二外国語を取ったことになっていました。このフランス語が、後に大変役立ちました。

卒業は百二十四単位。Ⅱ部の学生が大変なのは、卒業単位を取れるかど

うか。休講が多いので、出席日数が足りなくなってしまうんです。銀行は二年から三年おきに転勤になるので、二年で卒業しないと転勤になったら大変です。単位を絶対に貰わなければいけない。

田代先生に相談したら、「君は硬式庭球インターハイで北海道代表だから、体育はすべて免除する。その分、別の授業に出なさい」と言われました。あるときは数学の上野先生のところに行って「数学の勉強をしている暇がない、なんとか単位を取らせてほしい」とお願いすると、先生は「レポートを書いて出さない」と、そんな時代でした。一科目でも落としたり終わりますから、やり繰りして百二十四単位スレスレでした。ゼミは先生の労働法を取りました。まともに授業を受けたという記憶が全然無い……申し訳ないんですけど(笑)。そんな一期生なんです。

こうして先生の名前を覚えているのは、それだけ苦勞をしたということ。田代先生は話をよく聞いてくれました。「Ⅱ部のあなたたちが大変なのはよくわかる」と。田代先生はⅡ部の学生をなんとか卒業させたいと、非常に苦勞してくれました。単位が足りなくなりそうだったら、上野先生と田代先生のご自宅にお酒を一升持って行きました(笑)。

もう、非常に人情にあふれていましたね。

校舎はなく、高校の間借り。体育館をベニヤ板で仕切って集中講義

当時はまだ、大学の校舎はありませんでした。札商の木造の校舎に行つた記憶があります。集中講義は札商の屋内体育館で受けたような……。ベニヤ板で仕切っていただけなので、隣りの話もこちらの話もごちゃ混ぜなんです。私がいた二年間は仕切ったままでした。

当時は下駄を履いて学校に通っていたので、体育館に入ってくるとガツタガタ音がするんです。授業と言えりような授業ではなかつたです。

一つだけ北海学園で一番良かつたなという講義は、早川泰正先生の近代経済学です。集中講義で一橋から来ていたと思います。早川先生が黒板にバーツと近代経済学を書きまして、『近代経済学』という厚い本をみんな買ってきて読んだという記憶があります。この先生の講義が一番頭に残っています。北大生も聞きに来ていました。

それから、学生が先生の代わりに教壇に上がつて講義をした記憶があります。商法の土屋先生は、裏書きがない手形や白地小切手は有効なのかどうなのか、理論的には有効だけどどういふふうにしてやるものなのか説明するとき「君は銀行で実務をやっているから、代わりに教壇に上がつて説明して」と。審査部にいたので、銀行から無効にもらった本物を持つてきて、先生に「これが自己宛小切手です」と見せると、「私、初めて見ます」と。そ

んなこともあり、授業そのものはおもしろかつたです。

私はすすきのか

ら自転車で橋を渡つて通つていました。江別から



念願の自前校舍1号館と校地のシンボルであったポプラの木前で憩う学生服姿の学生達(昭和30年撮影)

通つていた人もいました。六十何歳の印刷屋の社長さんも通つていて、その方をみんなで「父さん、父さん」と呼んでいました。当時の最年長でした。それから、すでにどこかの大学を出ていた女性の先生が二人、教員免許が変わるということでした。とても優秀な方でした。

Ⅱ部は授業が六時二十分ぐらいから始まつて、八時半に終わる。九時までやらなかつたです。八時半になったら先生が「はい、今日は終わり」と帰つてしまいます。だから授業は二時間ぐらいです。本だけはたくさん買わされました。今でも持っているものがあります。

硬式庭球に、飛行機の自家用操縦士の免許。初志貫徹して夢を現実に

私が硬式庭球を始めたのは、小学校六年生のときです。家の裏が北大のテニスコートだったんですが、戦争に負け、そこに米軍が進駐してきてテニスを盛んにやっていました。その米軍のボールが私の家に入ってくるので、私が持つて行く。行つたり来たりしているうちに、ボールボーイになりました。

当時はラケットもボールも何も無い時代です。翌年、二中に入ったときに、米軍からもらったラケットとボールで硬式庭球部を作りました。学生選手権というと、中学生も大学生もみんなごちゃ混ぜになつてやっています。

三十九歳で訓練を始めて、四十歳のときに飛行機の自家用操縦士資格を取得しました。飛行機の免許には期限がありません。ですから、免許証の写真は三十九歳のままです。メディアカルの更新が毎年一回あつて、目の検

査、耳の検査、血液、血圧が基準に達していないと更新できない。それを毎年通過しています。今年（二〇二三年）も、今のところ目も耳も大丈夫ですし、血圧も安定しているので受かると思います。大学の上空を飛んで



航空写真を撮って、寄贈したこともありますよ。

私の飛行機は岡山に置いてあり、岡山の人たちが乗っています。六十歳から単独では飛んでいなくて、必ず機長資格のある人に隣りに乗ってもらいます。カナダでの水上機訓練のため、小型船舶のライセンスも持っています。

生まれたときから自宅の上を飛行機が飛んでいました。まわりに飛行機関係の人がたくさん住んでいて、戦争が終わったら航空関係の米軍が入ってきて、飛行機との縁が切れなかった。飛行機を特別なものだと思っていませんでした。

飛行機といえばアメリカです。向こうではジェネラル・アビエーションと言いますが、アメリカではどういう地位にあるのか、自分の英語はどれくらい通用するのか知りたくて、五十歳のときにアメリカに行ってFAAの免許を取りました。その頃アメリカで免許を取った人は、北海道ではほとんどいなかったと思います。

アメリカの免許と日本の免許の違いは、向こうは個人の責任、日本は免許を与えた国の責任。アメリカは毎日試験があり、その場で免許をくれる。日本は試験が年に二回で、免許証が来るのに一年かかるんです。日本で自家用操縦士免許を持っているのは約二万人、向こうは約二十四万人。日本の空港は約百、そのうち北海道に十三もあります。アメリカは空港だけでも六百ぐらい、農場には必ずランウェイがあります。アメリカでは飛行機の隣りに車があったり、テントを張ったり、馬も牛もそこにいます。日本では空港は隔離されていますから、パスがないと入れない。向こうは飛

行機は自転車と同じ、日本は飛行機は特殊なもの、この違いがはっきりとわかりました。

残念ながら日本では、飛行機に乗っていると道楽だと思われるんです。そうではなくて、北海道のような広いところには飛行機が必要だと、何か社会の役に立つことができないかと考えました。

例えば津波が発生したときには、確認のために飛行機が必要です。赤字に加盟して、昭和五十一年に北海道飛行赤十字奉仕団を作りました。奥尻の北海道南西沖地震のときには、お医者さんや医薬品を運びました。奥前山や駒ヶ岳の噴火のときや、雪崩で行方不明者が出たとき、海でヨットが流されたときの捜索もやっていました。

しかし阪神大震災のあと、国がすべての行政機関にヘリコプターを導入しました。北海道というと、札幌市の消防、道警、道防災、海上保安庁などの他、報道もヘリコプターを導入したので、民間のボランティアの出番がなくなりました。けれど、自分としてはひとつの橋渡しをしたということとで、誇りに思っています。

私は社交ダンスの教師の免許を持っています。北海学園の競技ダンス部は強いです。あちこちで学生がアルバイトをしています。

バンドにも所属していて、ボランティアで老人ホームや赤十字病院の慰問に行ったり、赤十字の献金募集のチャリティーダンスパーティーのバックで演奏したりしています。

それから、自宅の鉄筋コンクリートの一階にダンスホールを造り高齢者

に開放、敷地内にテニスコートを作って、夏休みになるとボランティアでジュニアに硬式テニスを教えています。

平成十二年にダンスインストラクター二十五人で赤十字奉仕団を結成し、災害被災者救援義援金募集や、海外たすけあいチャリティーダンスパーティーを数十回開催し、百五十万円以上を日赤に寄付しています。

私は子どものときから初志貫徹なんです。一回志したものは何としてもやる。テニスコートを持つことと飛行機を持って操縦することは、子どもの頃からの夢でした。それをどうすれば実現できるか、常に考えて生きてきたと思います。

私は札幌シテイガイドと北海道フロンティアガイドの英・仏ボランティア通訳資格も持っていて、東京オリンピック（札幌でのマラソン）のときにはシテイキャストに選ばれました。今、札幌は英語を話せるガイドが全然足りていません。北海学園は道内私学の中でも優秀な学生が集まりますので、卒業しても実際に役に立つような資格を取ってほしいと思います。

学生諸君 “Boys, be ambitious!”

(二〇二三年七月十三日 インタビュー)

【プロフィール】

池脇 利昭（いけわき としあき）

一九三四年二月二十七日、札幌市生まれ。一九五二年札幌北高等学校卒業。

一九五七年経済学部Ⅱ部経済学科卒業・一期生。北海道飛行赤十字奉仕団・

札幌市ダンスライフ赤十字奉仕団委員長。

応援団で培われた物怖じしない心 学ランを着て雪まつりの交通整理もやった

定期戦には欠かせない「花の応援団」。しかし、最初から華々しい存在だったわけではない。知恵を集めてその存在を確立していった。



経済学部経済学科
昭和34年卒・6期生

くわやま ひろとし
桑山 博年

激動の戦中・戦後、今だから笑えるけれど

この間、母が百八歳で亡くなりました。祖父が僧侶で、父は役人になって、私も寺は継がなかった。秋田の大館に寺がまだあって、その寺は日蓮宗の法華宗の流れです。大昔は侍で、本家本元は前田百万石。侍の分家になって全国を布教して歩きました。ある程度の歳になったものだから腰を据えてということ、大館に寺を建てたんです。大館と、弘前にもお城があった。あの辺りは豪族が争っていた時代があります。秋田から殿様が出

てきて騒動を鎮めて、その過程で捕えられたらどうするか。侍としては、首を斬られるのは非常に恥なんです。そこで、寺に逃げ込めば命拾いします。だから大館には、上の寺、中の寺、下の寺、宗派は違うけれど三つ並んでいるところがあるんです。そういうところの寺になったものだから、昔は戦場で、殿様が戦で敗れたとき、いつ、どこを選んで飛び込んで来るかわからない。

まだ戦時中だった子どもの頃、秋田に疎開しました。そこに鉾山があって、中国の人などを使っていたんです。その人たちが逃げることもあり、秋田の実家の近所の川、中洲という何もない陸地に、穴を掘って隠れました。掘った土を川に投げれば、掘った跡はわからなくなるので、そこでみんな身を潜めていました。しかし、何人かは捕まります。一度見たことがあるんだけど、駅の目抜き通り、外の電信柱に一人ずつ縛っておいてあとから連れに来るんです。うちの祖父は元中尉で、かつては豪族の頭でした。「何かあったら本家の父さんに頼め」と。そういう人たちが扱う責任者にもなっていたから、縛られて、かわいそうだなと思っていました。

戦争に負けたら、MPが来ることになった。映画と同じように本家のうちの座敷に、向こうの偉い人が来るんです。本家の父さんの身に危険が迫り、立ち回りが始まるようになったら助けなさいといけないということ、面談部屋の隣部屋で、蔵にあった昔の日本刀から槍から武器を、分家の若い人たちに持たせました。そうしたらなんと「食べ物が少ないのに、白米のおにぎりをくれた」とその人たちが言ったんです。「大変お世話になった」と。そのあと祖父がジープに乗って、「お前ら決起するなよ」と

町中を言って回りました。本家の父さんの命令は、みんな守るから。

玉音放送があった日、みんなは直立不動で庭に整列していました。私はちよと、川へ行つて魚を採つて帰つてきたところでした。十時頃に帰つてきたらみんな並んでいて、何が起きたのかなと思つていました。私もその列の端っこに並んだ、ヤスつていう魚を刺すやつを持って（笑）。あれは小学校一年生のとき、一番印象的な出来事でした。

神社の裏に、双子山という山がありました。戦時中、そこに駐屯していた兵隊に、握り飯を二宮金次郎みたいに背負わせました。その丸裸の山に



高射砲の陣地があったので、そこへ運んだんです。

空襲になると、バラバラつていうすごい音がしました。八時十五分に汽車が来るんですが、そこはトンネルを出てすぐ川なので橋が架かっていません。汽車に乗っている人は逃げようがない。敵も十五分に汽車が通るのをわかつているから、そこを狙つてバババつて……。川に何人も飛び込みました。学校は八時前に田んぼを通つて行くので、あれで死ななかつたから今、こうやつて生きています。死んだ人もたくさんいました。田んぼだから隠れるところが無い。「登校しているときは田んぼに飛び込め」と言われてました。飛び込んで泥だらけになつて、動かないで上を向いている。そんなことをしました（笑）。

祖父も無事でした。残酷なことも威張つて平気でやっていた時代ですが祖父はそれをやらなかつたから、握り飯をもらったお礼だと、わざわざMPが来たんだから。映画とそっくり、どこかで見たことあるなど、そんなおもしろいこともあった。

スキーをきっかけに銀幕デビュー!?

高校生のとき、クラスで選出されて応援団になりました。背が大きいから目立つということもあって。北海高校のときから始めたんです。

北海高校のときは、部ではありませんがスキーをやっていました。とあるプロスキーヤーと競つたことがあって、私が勝つたんです。スキー場と言つても荒井山の突き当りの、なんというか、整地も何もしていないようなコースで滑つて競技していたんです。同好会みたいなスキー好きが集まつて、あそこら辺の山をみんなまで歩きました。



荒井山スキー場 滑降競技 (桑山さん提供)

当時は山ブームと言いますか、荒井山のヒュッテ辺りにたむろしていました。ジャンプ台はたった一本で、子ども用のジャンプ台はまだ無かった。あの頃のスキー連盟の役員は、もうスキー狂みみたいな人ばかり(笑)。そういうのが集まって、誰かが長になって、組織的な部署を作って威張っていた。

三角山のところにもジャンプ台があって、その台で飛びすぎて、一番下の平らなところに落ちて、スキーが真ん中からバキッと折れてしまったことがありました。怪我はしなかったものの、空中で「どうしたらいいかな」と考えているうちに、ダーツと落ちてしまった。

昔はこのスキー部も、札幌市民は三角山で鍛えられました。小樽の天狗山も行きました。アルペン滑降競技のような、スピードが出る競技が私

は好きでした。普通の人もジャンプを飛んだんです。おでこがあつて、そこから飛び降りたり。

スキーをやっていたことがきっかけで、『香港の星』という映画で俳優の宝田明の代役をやったことがあります。相手役が女優の団令子。藻岩山スキー場で撮影をしました。団令子が雪上に立っていると、宝田明がぶつかりそうになる場面を撮った。何回も上がっては降り、上

がっては降り、その中でいいものを撮るそう。それに出ていた、香港の俳優の尤敏(ユウミン)という人は、後からも何かの作品に出ていました。私が大学の一、二年のときだったか。その話を持ってきたのは、応援団の先輩で三期生の渡邊伸也さん。「お前、スキーやつてるんだな、映画に出ろ」と言つて。あの人は電通に勤めていたから、そういう宣伝もするし、役に必要な人も探して歩いていました。

隠れてタバコ、りんご園からりんごを拝借

北海は街を歩いていても、みんな避けたんです。北海に行ったら大きな顔をして狸小路を威張つて歩けるなど思った、自然と大学も北海学園大学に行くことにしました(笑)。

校舎は一号館ができていて、授業も一号館でやりました。多少、旧札商の校舎も使っていましたが、それは三期生のときや、もつと古い人たち、そこまでだったんじゃないかと思えます。新しい校舎ができたので、それで足りたんです。

北海の木造校舎、応援団があつて隣りが新聞部でした。購買部があつて、食堂は無かったです。みんな弁当を持ってきていて、購買部でもパンや牛乳などが若干売っていた。札商と北海の間の突き当たったところ、その建物で売っていたんです。

それで、裏の藪で隠れてみんなでタバコです。それも、普通の大人たちより高級なものを吸ってました。駐留軍に行つて「ギブミーシガレット」と言うとかくれるんです。その人たちがたむろしているところがあるので、道案内をしたりして。ラッキーストライクとか、有名なタバコが吸

えるというわけです。りんご園のところ草ぼうぼうになっているでしょう、そこに隠れて吸うんです。上の方から煙がふわーって広がって、狼煙のようになる。

この辺はりんご園ばかりでした。りんごを頂戴するために敷布を持って、木からりんごをバーツと落とします。それを持って逃げるのが陸上部の高橋の役目。陸上部だから、速いなんてもんじゃない（笑）。畑の親父さんなんか追いつくわけないんです。でも、農園の人も息子が北海や札商に入っているから、本気になって捕まえたりもしないんです。少しぐらいは見逃してくれたんですね。

体育館はありませんでしたが、体育の授業がありました。冬は、どうだったか……グラウンドで雪中ラグビーをやった覚えがあります。

それから、清田へ造成に行きました。野球場も格好つけたし、少し下のほう、グラウンドに入って行く辺りにあるサッカー場も造成しました。上のほうは多目的のところがあって、あとで守衛室を作って北幹警備に頼んだ。瞬く間に火山灰の山はなくなりました。札商と北海の校舎の間からバスが出ていたので移動についてはまだ良かったんですが、なんだかんだ作業をさせられました（笑）。

学ランを着て雪まつりの交通整理をした応援団

応援団は、さっぽろ雪まつりの交通整理をやりました。渡邊さんたちが応援団を作っていて、私は一年生になった途端、引つ張られて入れられてしまいました。渡邊さんは三つぐらい上で、私のすぐ上が牧さん、その上が松岡さん。

応援は、やっぱり東北学院大が先生みたいなものでした。その頃はもう、青山学院大と東北学院大が定期戦をやっていて、学園が昭和三十年から始めました。こちらは対戦する相手大学がないから、定期戦みたいなものはやっていなかったんです。

どうしたら強くなって、中央に行けるかを考えていました。大学の名声を高めるために、中央警察署に掛け合って、雪まつりの交通整理をやりました。目立つように、わざと学ランを着て。交通整理をしていたら「学生が見ているだけだから、少しぐらい交通違反をしてもいいか」という市民がたくさんいたんです。そういう人を止めて説教するんですが、喧嘩になっていく。パトロールのお巡りさんが回って来るので説明をしたら、「学生さんだって遊ばないでこうしてやってるんだから、言うことを聞きなさい」と運転手に言ってくれますので、もう気分がいい（笑）。それが楽しくて。



さっぽろ雪まつりの交通整理ボランティア（桑山さん提供）

大通の交差点など、主要なところに配置されました。私は六代目ですが、十代目ぐらいまでやっていたでしょうか。だんだん規模が大きくなってきて、警察も交通課も考え直すようになっていきました。そうしたら、なんとというか、花の応援団ではなくなっていました。警察のこま遣いにされるよ

うになっていった。応援団員は「おもしろくないからやめるわ」となってしまっんです。

東北学院大の応援団との交流

定期戦となると応援団がパレードをやるんですが、どちらかという音楽隊のほうに目が行きますから、吹奏楽部の人たちは得意になっていました。先頭で指揮をしていたのが木村貢。応援団に所属していたんだけど、木村がまるつきり吹奏楽の担当みたいでした。今でも時々電話をします。

定期戦で仙台を行ったり来たりするので、向こうの応援団とはすごく仲が良かったです。パレードのことなど「こういうときは、こうだよ」と教えてくれたのは東北学院大でした。やっぱり同じ雪国ということもあって、親しみやすかったです。どちらかというところ、彼らのほうが純朴。だから応援も習いやすかったです。あちらが得意になって教えてくれて（笑）、こちらもわからないから素直に聞くでしょう。

こちらから行くときは、連絡船に乗ったり降りたりして移動が大変でした。連絡船で三時間五十分かかって。当然、当時は飛行機が無いから、函館まで行って連絡船に乗るんです。大きい太鼓を持って、棧橋を走って。

私は父が役人だったので、転勤がありました。東京で生まれて仙台で育ったこともあり、仙台には親密感がありました。仙台には小学校一年生までいて、スキーを覚えたのも仙台です。本州だから、朝早く起きて滑らないと雪が溶けてなくなるんです。白々と明けてきた頃に平地を滑っていました。

仙台に住んでいた戦時中、ちょうど家の前が上杉山通小学校でした。街中で、日本軍が勝ったら消防団が「バンザイ、バンザイ」とやっていて、一緒に万歳をした記憶があります。子どもの頃の町並みの記憶はあったので、仙台に遠征したときに「私について来い」と道案内しました。

応援団は開会式のパレードから閉会式まで、始めから終わりまでいる必要があります。金曜日に開会式をやって、土、日曜日に競技をやって、四日ぐらいやってたこともありました。定期戦が始まったばかりの頃だから、交通の便宜というか、バスを用意して次の会場へ、なんていうのはなかったので大変でした。みんなでバスに乗ったり、電車に乗ったりして移動していました。



定期戦での応援団の様子（桑山さん提供）

エールを切ったりするのは、みんなで代々発明しました。社会人野球などを見て、何かおもしろいものがないかなと。基本的には三三七拍子を表現するので、どじょうすくいが一番いいんじゃないかとなりました。ほっかぶりをして、鼻に箸を突っ込んで。好奇心ばかりありましたから。

北海学園大学の五十年誌にも写真を提供していますが、あれは

写真部だった後輩の小川眞治君の手柄です。学友というか、ずいぶんいろいろなことを一緒にやりました。今も電話がかかってくる。

森本先生との再会、北海学園大学に転職

卒業後、最初に勤めたのは車屋さんのいすゞ自動車です。秋田いすゞにも行きました。どこか好きなところを選ぶよう会社に言われて、そこに転職になるわけです。懐かしいところに行つたほうがいいなと思って秋田に。私の親はみんな秋田衆でしたから。いすゞで自動車の販売員をやっていました。ベレットなんか売って、一年か、一年半ぐらいいました。

それで、札幌いすゞの関係で札幌に行くよと言われて。いすゞは豊平の、ちよとど美園の辺りにあつて学園のすぐそばだったので、懐かしいなと思つて学校に行つたんです。そうしたら森本先生とばつたり会つて。森本先生には応援団の部長を少しだけやつてもらつていたから、学生るときからそういう付き合いがあつたんです。

森本先生は「桑山君、学校に来て仕事しないか」と言うから、「はい」と二つ返事で入れてもらうことに（笑）。一年ぐらい秋田に行つて、札幌に戻つてきたんです。それで北海学園の法人本部に入って、それからはずつと北海学園にいました。学校って先生しかいないものだと思つていたから、学校に就職つてできるんだなと思ひました。

北見大学は係長から課長をやつていた時期で、「私が作った」と言えるようなものです。あそこでもグラウンドを作るのに草取りをやつたりしました。当時は管理課で、昭和五十二年に開学。何回も出張に行きました。誘致から、校舎を建てるまで。宇佐美市長とも何回も会いました。一生懸

命作りましたが時流で、向こうを閉めて札幌に移転することになるなんて、当時は考えもつかなかつた。

どこに行つたつて、やつぱり真剣にやらないといけないということがわかつた。遊んでばかりいて卒業したつて、「あの人たちは遊び人みたいなものだから」と相手にしてくれなくなる。だからやつぱり、生きている以上はこの世界でも、一生懸命やれと後輩には言いたいです。応援団をやつていたら、怖気付くようなことがあまりない。気になつたことがあれば、率先してやつてみようという気持ちは育ちました。

私の時代、硬式野球部が神宮球場に初出場しました。神宮つてやつぱり、応援団にとつて聖地です、檜舞台。甲子園と神宮に行つたと言つたら鼻高ですよ。

（二〇二四年四月九日 インタビュー）

【プロフィール】

桑山 博年（くわやま ひろとし）

一九三五年五月一日、東京都生まれ。一九五五年北海高等学校卒業。一九五九年経済学部I部経済学科卒業・六期生。北海学園大学応援団尚志会相談役。



第4回定期戦。昭和33年6月11日、北海学園大学旗を持つ滝口鉄夫さん（本人提供）



第4回定期戦。昭和33年6月11日、閉会式後、青葉町を行進



第4回定期戦。昭和33年6月12日、閉会式（東北学院大学レジャーセンター）



昭和 33 年 体育会幹事長と常任幹事



第 4 回定期戦後、「塩竈神社」でくつろぐ体育会幹事の面々



第4回定期戦。昭和33年6月10日、札幌駅での仙台遠征前の様子

富士フィルムへ通った 出向社員のような学生時代

定期戦の写真が残されているのは、応援団に同行していた写真部の努力の賜物だ。その方は、学生時代の多くの時間を富士フィルムで過ごした。



経済学部経済学科
昭和36年卒・8期生

おがわ しんじ
小川 眞治

今はネットで簡単に借金できますけど、昔は質草を持って金を借りました。金を借りに来たら、俺がいてみんなびっくり。そういう時代でした。質屋さんと呉服屋さんをやっていました。

昭和四十年代から、学費値上げをめぐって学園紛争が始まりました。その騒動を森本さんが、学校の警備員を柔道部で固めるなどして収めたんです。

我々の学生時代は、出席票を配るんです。だから、それがあれば出席ということになるわけですが、私は大学時代の後半は写真部にいた流れから、学生写真連盟（全国学生写真連盟北海道地区連盟、全道の大学・高校の写真部をまとめる組織）の議長をさせられて、ほとんど、その活動のために富士フィルムに行っていました。北海道の大学・高校の写真連盟というのがあって、百校くらい加盟していたと思います。それを支えるスポンサーが富士フィルムでした。連盟の事務所が富士フィルムの中にあつたので、私は出向社員みたいなかたちで通っていました。学校に行くより、富士フィルムに行くほうが多かったです。

富士フィルムに通って、足りなくなった出席日数
北海中学からずっと写真部にいました。大学一年生のときは山岳部にいて、札幌の冷水小屋の管理をかねて登山に行きました。一年間山岳部にお世話になって、何をきっかけにまた写真部に入ったかは覚えていないんですけど。

昔の池上商店の前に小川という呉服屋があつて、そこが実家です。質屋もやっていたから、大学の職員も学生もよく来ていました。質草を持って。

そうすると、学校の出席日数が足りなくなってくるわけです。他の学生に「出席票をよこせ」と言ったりして（笑）。もちろん駄目なことです。当時は今だから言えるそういうことがいっぱいあるんです。もしくは代返とか、「あれ、声が違うぞ」なんて先生も言つて、本当は知っていて見逃してくれていたんです。それで私はなんとか卒業しました。

松浦先生の法科の授業を、三年目に落としちゃったんです。必修科目で

した。私は四年目に、友人からノートを借りて一生懸命勉強しました。その友人は卒業してから役員になった人ですが、授業の内容がびっしり書いてあるノートを借りて、やっと松浦先生の授業の単位を取って、無事に卒業することができました。もう、留年するんじゃないかと思っただけけれど。その松浦先生が道議会議員に立候補して落ちて、大笑いです(笑)。

写真部に入る頃の校舎は、一号館しかなかったです。あとは、旧札商のあるところ。ほかは長屋のような。二号館ができたのはそのあとだから、一つしかなかった記憶です。あとは元の北海の建物を使っただけじゃないでしょうか。体育は商業や北海のグラウンドを使ったりしていました。

食堂がありました。常設ではないですけど。パンを売ったりする購買、でも常時弁当は置いていなかったから、みんな弁当を持ってきていました。私は減多に学校に来ないけど、来るときは弁当を作ってもらいました。今みたいにコンビニや外食は無くて、この辺は自転車屋とか、帽子屋、八百屋、肉屋、そういうのしかなかったですから。

家から学校までは、十分もかからないくらい近かったです。道路は砂利道で、まだ川がありました。四号水路のそこまで川があつて、この辺は全部りんご園でした。

じょうてつが、夜の十一時半、十二時頃まで走っていました。うちの店は十時半まで営業して、じょうてつ最終が行ったら店を閉めようという調子でやっていました。じょうてつで定山溪へ行くのがあつて楽しみでした。小旅行や、新婚旅行は定山溪に行った人が結構います。

大学三年生からのゼミで森先生という人がいました。その人がすごく一生懸命で、私をかわいがってくれました。写真部の展示会のたびに来て、上原先生に「写真部でもすごく頑張っていて、個展までやっている」と私を紹介してくださいました。上原先生は喜んでくれて、「本校のために頑張ってくれ」と言われたりしました。

森本先生との縁。ホームステイの思い出

森本さんとは家族ぐるみのお付き合いです。晩年は先生も耳が聞こえなくなってしまうって、私は補聴器係をしました。私も今、耳が聞こえないから入れているけれど、森本さんは補聴器を持っているんだけど使わないんです。「理事長、ちゃんと補聴器つけてください」と言いました。側には必ず私がいました。晩年は弱ってしまったけれど、偉い人でした。死ぬまで現役だったから。死ぬまで「辞める」とか、そういう人事のことは一切言わない人でした。

森本さんの話をすると、一日いっぱいかかります。森本さんの家の庭でガーデンパーティーをしたこともありました。カナダの学生が来て……カナダと言えば、私は二回ぐらい



森本正夫 第3代同窓会会長
学校法人北海学園理事長

ホームステイを引き受けさせられました。誰も引き受けないので無理やり。親も、初めて英語圏内の人ที่บ้านに来るとなって大騒ぎ。それ以来、十二人ぐらい受け入れをして、英語もだいぶできるように

なりました。最初に引き受けたときは、ドアの開け方から、トイレは閉めないで少し開けておくとか、プライベートの部屋には鍵をつけるとか、いろいろ大変でした。

おもしろいことばかり教えてもらいました。いろいろな子がいて、いい子も、日本的な子もいました。帰ったきりハガキの一つも来ない子もいれば、今でもシーズンレターを送ってくる子もいます。やっぱり、もうほとんどは一方通行で、お世話になったとはいえ帰ったら終わり。それでいいんですけど、日本人は一人ひとりに感情を込めてしまいますから。だけど、異国人を受け入れるということは、家庭でもそういうプライドがあったなという思いがあります。

これは、ご夫婦が二人とも協力しないとできない。どちらかが駄目と言ったらもうできません。家庭の部屋の大きさの問題もありますし。うちのはたまたま、子供が就職したりで二人部屋が空いていたから良かったけれど。

定期戦に同行して取材と撮影。東北学院大との写真展

桑山さんは応援団長、僕は記録係として、東北学院大に定期戦の取材で行っていました。写真部も一緒に行かないと記録が取れないですから。アルバムを作ったりするが私の係だったので、一緒に行きました。

ただ行くだけでは駄目だから、東北学院大の写真部と連携して、展示会をやることになったんです。当時は、写真の展示会の情報があまりないから、結構見に来てもらえました。仙台に行つて写真を撮つて、向こうで展示会をやつて、東北学院大が札幌に来たら、どこか場所を借りてこちらで



定期戦でのパレードの様子（桑山さん提供）

名塩さんとも海外旅行に行きました。名塩会といって、何十年も行きました。それから似鳥さんともしょっちゅう海外に行きました。ベトナムのハノイの工場とか。そういう大物がいて、あの人たちと比べると私は小物だから、まとめ役です。「名塩会、似鳥会のまとめ役は小川の眞だ」って。名塩さんみたいな人はいない。すごい人なのに、我々のような庶民的な人柄もあって。似鳥さんとも、こちらに来ると「先輩、食事に行きましょう」と誘われるので妻と行くんですけど、あの人も見事な人。もう八十年代に入ったから余生の時代になるだろうに、「自分は若い者には負けられない」なんて言っています。社長に復帰して本当にすごい。

展示会をやつて。昔は写真メディアが重要な情報の一つだったので、喜んで見てもらえたんです。今は簡単に写真が撮れるから、カメラを持って歩かない。だから、カメラが全然売れない時代です。タブレットの写真の性能もすごいですから。地図に辞典にカメラ、翻訳、本当にいろいろなものがタブレットにあります。私は世界中に行くから、これは手離せません。

うちの学校は変わっているんです。第一次試験で北大に落ちたら、みんな北海学園。当時は札幌短期大学ぐらいしかほかに学校が無いから、北大に落ちたときの足止めがここでした。様々いろいろな人がいました。学校も、学生が次から次へと入ってくるので置いておけなくて、とにかく卒業させないといけない。落第して留年したという話は、あまり聞いたことがなかったです。

もともと、高校を卒業した生徒の半分も大学へ行かない。大学へ行く人は家がよっぽど金持ちか、親が教育熱心か。大抵は行かせられなかったんです。なぜかという子どもが多かったから、みんなに教育費用なんか払えない。我々はそんなこと、全然気にもしないで学校に行かせてもらっていましたが、今考えたら親の七光りが大きかったんだなど。そう思ったときは、もう親はいないけれど。

写真部の影響でカメラ屋になる

もともと家業は質屋ですが、引き継がないで、自分でやりたくてカメラ屋さんを始めました。学生時代に富士フィルムにお世話になったものだから、富士フィルムの代理店をやるのかなと思って、単純に始めました。

やっぱりレーション、人間関係です。三十二歳ぐらいのときに独立して、何をやるのかなと考えたら、学生時代に写真で人脈あるからと富士フィルムに行つて、取次をさせてもらったんです。今の東区役所のところに店を出しました。

私が開店して間もなくしてから、当時の社長、古森重隆さんが私のところに挨拶に来てくださいました。私は学生時代に連盟長で、それを十八年

聞させられたものだから、古森さんが表敬訪問でうちに来てくれたんです。びっくりしました、あんな偉い人がうちに来るんだから。あの人は私と同じ歳だけど、ものすごい人です。一生の思い出です。

あの頃はアナログのカメラの全盛時代。フィルム時代だから、写せば必ず写真の現像が必要になり、現像したら必ずプリントする、というセットになっています。一日に五、六十本のフィルム現像を処理してプリントアウトしていました。

十四、五年前までアナログ時代で、それがデジタルになってから富士フィルムもフィルムをやめて、化粧品開発、それからゼロックス社と合併したりして、今の富士フィルムを構成するようになりました。

私の信念は、借金してまでやるということ。私は銀行には金を借りているのではないんだと。理屈っぽいけれど、銀行には資金繰りとしてお借りするのだから借金ではないと、借りたものを返すんだからと言って、よく当時の北海道銀行の担当者と喧嘩しました。「抵当を入れてくれなかったらお金を貸しません」と言うから、「抵当を入れてまで、頭を下げてお金を借りるのは違うんだ」と喧嘩した。そうしたら名塩さんに「銀行と喧嘩をするな、仲良くしないと駄目だ」と言われました。そうこうしているうちに信用してくれたら、無条件で借りられるようになりましたけど。名塩さんも写真部の先輩です。私が写真部に入ったときはもう卒業していましたけど、社会人になってから商売の関係でネットワークがあつて仲良くなりました。

カメラ屋の会社名はマキ商会といいます。小川眞治の「眞」に、妻は木造業の娘で、若木わかきという名前なんです。二人の名前の「シン」と「キ」を取って、「マキ」と付けました。当時、横文字の名前の会社はあまりなかったのです。カタカナにして。マキと言ったら真木呉服店があったから、真似するわけにはいかなないと、カタカナで単純に「マキ」にしました。

親の祖父の代から防災設備の業務をやっていて、それをずっと継承していたので、私もやることになりました。その関係で、今でも豊平地区で付き合いがあるのは池上商店です。池上公介さんはもう亡くなりましたが、仲が良かったです。池上商店は有名な雑貨屋さんです。池上さんが優秀な人で、語学力を生かして、当時は珍しかった学習塾を作りました。それももう、三十年ぐらいになるのでしょうか。

奥様も優秀な人です。夫婦二人で事業をされて。今は娘さんが理事長をやっているのでしょうか、長男は早稲田の先生をやっています。池上家族はみんな優秀で、それでいて結構商人。

今の学生は立派です。やんちゃな人がいなくなりました。我々の時代は言うことは聞かないし、学校は休むし。悪いことを先導する人がいました。でも、桑山さんはいい人でした。親分肌というか、よく飲み連れて行ってもらって。当時はハイカラな飲み物だったハイボールを飲ませてもらいました。桑山さんは「ストレートで」と言ってグラスに氷とウイスキー、西部劇を真似してスーッと飲む。初めてお酒を飲んだ記憶が今でもあります。

昔は、下駄を履いていましたね。雪道なんかは下駄のほうが楽だったんです。冬は下駄でも、高下駄。だけど学校の中に入るとうるさいから、下駄禁止になったんだけれど。

(二〇二四年四月八日 インタビュー)

【プロフィール】

小川 眞治（おがわ しんじ）

一九三八年八月十二日、札幌市生まれ。一九五七年北海高等学校卒業。

一九六一年経済学部I部経済学科卒業・八期生。山岳部、写真部。



昭和38年「下駄禁止」の看板

どんなことにも絶えずチャレンジ
夢とビジョンを求めて行動を

卒業後、北海学園大学と関わり続ける同窓生は多い。山岳部は特にその繋がりが深い。



経済学部経済学科
昭和38年卒・10期生

かたぎり ただし
片桐 理

み苗穂駅まで運び、貨車積みを行っていました。リフトやクレーンも無く、人手で積み込む作業をさせられていました。

昭和三十八年、二十二歳で大学を卒業して当社に入社しました。社員総数は、両親を含めて十七人。建機レンタル事業を北海道で初めて立ち上げました。「鉄くずをやっている息子が賃貸業だなんて、何わけのわからないことをやっているのだ」と言われましたが、三、四年余り経った頃には「うまくやっているようだ」となっていました。

その頃は、東京オリンピックの開催に向けて建設ブームでした。東京・大阪・名古屋で建設機械の協会ができていましたが、「北海道と九州でも協会を設立して全国連合組織にしたいので、北海道で立ち上げて下さい」と言われました。私が二十九歳の昭和四十五年、北海道建設機械器具賃貸業協会を設立しました。

三十一歳のときに、仮設機材（鋼製足場）のレンタル業もしたいと考えました。商社の紹介で東京の日建リース工業の社長にお会いして、北海道でも仮設機材の賃貸をしたいと申し入れたら「では北海道は任せます」ということで、共同事業日建片桐リースを設立しました。

札幌冬季オリンピック開催の年でしたので、地下鉄・高速道路・オリンピック施設等、建設需要を取り込むことができました。

今日まで、オイルショックや拓銀破綻、リーマンショックといった経営環境を乗り越えて、片桐グループの総売上高二百六十五億円超えの規模になりました。

様々な分野の先駆けとして、業界を牽引

先代の父は、戦時中二度中国に出兵しています。創業は昭和十年となっていますが、当初は家庭用井戸工事、手押しポンプを打ち込みの仕事や、ポンプ資材の販売と中古機械の販売、戦後は古物商を始めました。昭和二十五年～二十七年に朝鮮動乱が起こり、「糸ヘン景気」や「鉄ヘン景気」といわれたブームに遭遇し、個人経営としてはかなり儲けたと聞いております。当時、東七丁目にスクラップヤードがあり、馬車に鉄くずを積

十一年前（平成二十五年）に代表権の無い会長に退き、現在息子が代表取締役社長になっています。

先代の社長は七十歳になる一か月前に病気で亡くなりました。七十歳ぐらいが男性の健康寿命なのか、だったら私も七十歳で譲ろうと思いましたが、まだ息子が三十一歳だったので代表取締役副社長にして、三年間営業責任者を任せました。経験を積ませて、私が七十二歳のときに譲りました。現在はグループのオーナーとして外部の評価も良いようなので、息子に代表権を渡して良かったと思います。

山は学校・山小屋は教室。山岳部の思い出

もともと、山登りは全くやっていませんでした。きっかけは高校三年生のとき、仲間四人で札幌岳から冷水小屋に泊まり、空沼岳を縦走したことで、これが初めての山登りでした。

うちの仕事は先代が古物商でしたが、父は戦争の召集を受けて、身体を壊して帰国しています。父から十六歳のとき「免許を取れ」と言われ、小型三輪車の免許を取りました。ですから高校二年生時から、鉄工場等に鉄くずの引き取りといった家業をしていて、春・夏・冬休みは従業員と同じように働いて、クラブ活動の時間が取れませんでした。

大学に入ってから会社のはうも余裕が出てきて、それで山岳部に入ったわけです。

『山は学校・山小屋は教室』は、石島忍OBが卒論にした題材と聞いております。我々の先輩たちは山小屋を持ちたいと夢を語って、思いを巡ら

せていました。

それが実現し、山小屋で皆さんと思いいや夢を語らう場所がある、小屋管理は楽しいものでした。

卒業してからも新入社員歓迎登山会と称して、毎年二十人ぐらいが参加して山小屋に一泊し、翌日は札幌岳の登頂をしておりました。コミュニケーションも取ることができたのは、山岳部の後輩四人が当社グループに入社していて、彼らが準備段取りをしてくれたお陰だと思います。

昨年（令和五年）、山岳部は山小屋管理七十年の記念すべき年となりました。五十周年のときは、私が記念誌の発行責任者をお受けしました。過去の資料を集めたりするのに、OB会全員に大変ご苦勞をおかけしましたが、ご協力に感謝しています。

私たちは授業後、山岳部の部室で山行き計画や食料・装備計画を立てたりしていました。学生は時間があるので、麻雀をやる人が多くいました。私は麻雀をやらないので、部室にいたことが多かったと思います。

私は体力に自信がありました。が、一年生の同期入部者八人は厳しい訓練に耐えられなく一年で半分になり、卒業時は二人しか残りませんでした。

山岳部の目標は「より困難なルートを求めチャレンジすることでした。夏は日高連峰で沢登りして登頂を目指し、冬には十勝岳周辺で雪上訓練をして。厳冬期に日高山系に登頂することを目標としました。

私が大学二年生のとき、六人で厳冬期のカムイエクウチカウシ山（日高山脈）を登りました。途中の尾根でベースキャンプを張り、アタック隊に

任命され山頂を目指す途中、雪穴を掘りビバークし、三日かけてアタックに成功しました。

十八日間の予定を終え、札幌に戻りました。その間に父親が入院、盲腸破裂で重体になっていました。息子が山に行つて連絡が取れない……六十四年前ですから携帯電話などの無い時代で、連絡の取りようがない。幸い一命を取り留めましたが、登山禁止になりました(笑)。

三、四年生のときは部にいたけれど、一泊二日の近くの山しか登れなかった。跡取りを期待されていたので親に申し訳ないし、山登りすると言ったら反対されますから。

山小屋を持つ夢が現実に。大変なのはそこからだった

山岳部は昭和二十七年に創部しました。北大ではパラダイスヒュッテ(大正十五年)とか、空沼小屋(昭和三年)といった山小屋を持っています。羨ましかったです。

先輩たちが、我々も山小屋を持ちたいと言っても持てるものではない。たまたま北電で支笏湖まで送電線工事があり、送電線保守施設を兼ねて札幌岳に冷水小屋を、中山峠に中山小屋を建造し、それを当時の豊平町に寄付することになった。その小屋の管理者を探しているという情報を聞き、自分たちの山小屋を持ちたいという夢が叶えられるかもしれないと思いました。

当時、榎本教授が山岳部の顧問を務めておられ、二代目の高岡教授にも豊平町に奔走してもらい、学生としての熱い純粋な情熱があつて、豊平町が昭和二十八年九月三日に、本学上原学長との間で山小屋管理委託契約が

結ばれ、その後譲渡に至ったのです。

山小屋ですから、何か事故があつたら緊急の避難場所でもあり、遭難事故があつたときは捜索の手伝いもしなければならぬ。また予算も無いので、学生が小屋維持のための補修や、燃料の薪の調達も行っていました。私の時代は薪の手配は営林署まで行つて交渉し、三冬ぐらい使えるだけの払い下げ交渉もしておりました。お金は学園で支払っていただきますが。

小屋はどんどん老朽化しますから、その維持には大変な苦勞も伴います。私が大学三年生のとき、ストーブのコンクリートが割れて交換することになりました。一個のブロック十五キログラムを三個、さらに個人装備を加えて八十キログラム、それを担いで小屋まで行くことになります。ところが自分では立ち上がれないので、仲間に助けってもらわなくてはいけません。歩いて登るのも大変です。

休むときには木の根っこの上に荷物を下ろすのですが、四つん這いになつては起き上がる。それを繰り返すので、普通は一時間半で登れるところ、四時間かかりました。背負つて下ろしてを繰り返しているうちに漆にかぶれたようで、治るのに一週間病院にかかりました。ブロックを三個持ったのは、柔道二段の二年生部員の二人だけでした。

薪は三尺ぐらいの丸太なので、マサカリで薪割りをして軒下に収納していました。重労働です。たまに山に行く人は、そんなことはわからないです。薪が手に入らなかつたときは、登山口に「小屋に行くときは、薪を何本か持つて上がってください」という看板立てていたことがあつたと聞いて



昭和36年 南日高 春別岳にて
(山岳部『創立50周年記念誌』より引用)

ております。

山小屋管理に行くときは豊平駅（定山溪鉄道）に行き、定山溪までの往復券を買って毎週通っていました。定山溪駅から登山口まで四キロメートルあり、一時間歩いていました。万世閣ホテルミリオーネの手前に終点の駅がありました。そこから豊平峡ダムができる前まで、営林署管理のトロッコの林道がありました。

大変だったのは、小屋の改修工事、壁からの隙間風を無くす工事でしょうか。私が一年生のころ、外壁の丸太を交差させて組んだあと、内壁に板を張っていたのですが、老朽化で隙間風が入るので、その改修工事を行ったんです。先輩で器用な方がいて、内壁を一旦はがし、その間にルーフィ

ンクのコーラルを処理した黒壁紙を張り、壁板を打ち戻す工事をしました。これは二階まで全部を張り替えるんです。

その複製図が平成十五年、故高岡名誉教授研究室の明け渡し荷物の整理中に発見されました。当時総務課長だった山岳部OBの作内氏から、当社の工学部出身・元山岳部に連絡があり、複製図を作りなおしたのです。

小屋全部に隙間ができて、内張

りに十五センチメートルぐらいの板を打っている。手弁当での奉仕活動です。

昭和二十八年三月十九日、三笠宮殿下がスキー大会の途上、札幌岳スキー登山を挙行。冷水小屋にて休憩され、話題になったこともありましたが、夏冬通して利用される山です。標高九百メートルの所に冷水小屋、百メートル上流に湧き水、年間通してプラスマイナス五度前後、冬も夏も変わらない温度。こんな条件は他に無いです。

山岳部のリーダー格の人材を自社に採用してきました。最初に入社した人は亡くなりました。当社の石狩営業所の所長までしていたのですが、胃潰瘍で三十九歳のときにあっけなく……。彼は、当社で初の大学新卒の社員なのです。誠に残念でした。

彼に「片桐機械に入って、こんなに会社が伸びるとは思わなかった」と言われたことを覚えております。その後もOBの他、山岳部の後輩のご子息、娘さんも入社いただいております。

山岳部OBは毎年、小屋祭りなどの行事には結構集まります。山は登らなければならぬので大変ですが、II部の岳友会の方々や、小屋を愛する仲間も出席し、山談義が楽しいです。翌日は札幌岳に登頂しないで、小屋祭りだけのために参加する人も結構います。

山岳部で培われた体力、経験、人脈を活かして

大学の校舎は一号館しかなかったです。授業の他、ゼミナールも楽し

かったです。食堂は生協みたいなものもありました。うどんとか、簡単なメニューは随分と活用しました。

夏は自転車で、冬は市電で通学していました。当時は豊平駅から桑園駅まで路線がありました。下駄をはいている人や、大学帽子をかぶっている人もいました。

前の冷水小屋は昭和二十五年に不慮の火災に遭い、岳人たちに愛されて十七年の使命に幕を下ろしました。そのときから山小屋を管理していたと思いますが、恐らく二代目の方で、登山口で農家を営んでいた小坂夫妻にいろいろとお世話になっておりました。部員が毎週、小屋管理の行き帰りに小坂さん宅に挨拶しに行くと、その度にトマトやトウキビを御馳走していただきました。

私は中島事務局長に山小屋の実情を知ってもらおうと「山小屋を一度見てください」と案内したことがあります。高岡周夫顧問と林昭男顧問にも何度かご案内しています。

学生はアルバイトをする人が多かったのです。その中で社会知識を付けていました。特に、山岳部員はいろいろ考えていかなければならない。冬山は一週間ぐらい停滞することがあります。今みたいにインスタント食も無いので、重量のかからないカンパンを持っていききました。

ロバパンに行つて、小麦粉にレーズン、ピーナッツを入れ凝縮した、保存食のパンを作ってもらったこともありました。何度か試作して「これならいける」と製品化しました。ロバパンでもこのようなものの需要があれ



昭和36年6月 新人養成合宿 豊平川上流にて
(山岳部『創立50周年記念誌』より引用)

ば商売になりますからと、提案もしていました。

山で危ない目にあつたことは何回もあります。東北学院大学の交換会があり、山岳部も交互に登山会を行っていました。私の記憶では五回ぐらい続いたと思います。

第五回るとき、宮城県蔵王連峰を縦走しました。案内されて、東北学院大の人と組んで登りました。

我々は岩登りの経験がありませんでしたが、相手が先にハーケンにカラビナを掛けて登って行き、身柄を確保して「登っていいよ」と言われたら行くんですが、私が登って行く途中で古いハーケンを使ってしまい、そのハーケンが抜けて二メートルぐらい転落しました。幸い、相手がしっかり確保してくれていましたので助かりました。

それから、日高山脈で沢登りをしている途中の滝で、十メートル程高巻きして登ったことがあります。這松の上にリュックを置いて休もうとしたとき、リュックが滝壺に滑り落ちてしまいました。リュックを手で掴んでいたなら、私の体ごと持っていかれたかもしれませんでした。遭難こそしていませんが、何度も危険に遭遇しました。

弊社のグループの中で数えてみたら、北海学園大学卒業生が男女四十名を超えていました。今の学生さんはパソコン等の活用で知識が豊富で、生活要領も良いと感じています。

その仲間たちと、社会人になるための準備期間でもあります。また、北海学園大学には九万人以上の同窓生もいます。社会人となってからその人脈を活かしていけることもあると思います。

私なんか、経営者仲間でお付き合いして、指導も受けている人も多いです。同窓というのはその繋がりを結構大切にしています。

私は年を明ければ八十四歳になります。大きな病気もせず、健康に恵まれたものと感じます。これは、山岳部時代と若いころに厳しい訓練をしたおかげで、体幹ができてきたものと思います。七十九歳まで冬期間、藻岩山に毎年二十回登って、夏はゴルフをしています。

また、夢とビジョンを求めて行動をしてきました。そのためには目標を定め、決断し、実行することが大切ではないでしょうか。野球選手は三割を打てば優秀な選手と言われています。その反対に、七割は失敗しているのです。その反省をして、その時代の流れを感じて、絶えずチャレンジすることです。忍耐力・判断力・決断力を養い、実行をすることです。

(二〇二四年六月十八日 インタビュー)

【プロフィール】

片桐 理（かたぎり ただし）

一九四一年三月一日、札幌市生まれ。一九五九年札幌商業高等学校卒業。
一九六三年経済学部I部経済学科卒業・十期生。山岳部。片桐グループ取締役会長。

多くの社会人が学んだ土木短大Ⅱ部 技術も人脈もここで培われた

初年度の学生は、仕事も学業も自分で道を切り拓いていき、好奇心を持って挑戦し続けるという人たちの集まりと言えよう。



北海短期大学土木科Ⅱ部
昭和39年卒・1期生

よこやさだお
横谷 貞夫

高校は、本当は普通高校に行く予定だったんですけど、今でいう越境入学みたいなものだったから、先生から私立ぐらいしか行くところがないと言われ、北海高校などがありました。札幌伏見高等学校（現札幌工業高等学校）に行きました。当時、南十四条西二十二丁目にあつて、市電に乗って通っていました。卒業したときはまだそこにありましたが、何年か後に北大の北側のほうに移りました。もともとは札幌工業高校で、商業科ができたときに札幌伏見高等学校に校名を変更したんです。

高校を卒業してすぐに（国土交通省北海道開発局）札幌開発建設部に入りました。のちにドーコンに移ることになるんですが、札幌開発建設部に勤めながら北海短期大学土木科（以下、土木短大）のⅡ部に入学しました。土木短大ができるというのを知ったのが三か月ぐらい前で、「入りたいな、土木だったらやりたいな」と思つて。高校を卒業して七年経つた、二十六歳のときです。私より年上の人もいました。

高度経済成長期、北海道開発に技術者育成と養成は急務であつた
峰延^{みねのぶ}から月形に抜ける中間くらいのところにある、岩見沢市北村の出身です。中学一年生までいて、二年生からは栗山町にいた叔父に呼ばれて行

きました。そこに中学三年生の二学期までいたんですが、石狩太美にも叔父がいて「うちの息子に勉強を教えてやってほしい」と言われ、中学三年生の三学期から行きました。私は三男でフリーだったから、どこに行つてもいいと（笑）。

高度経済成長の時代だったんです。当時、市町村では技術的な仕事ができる人がいない、雇うことができないという状況で、人材が追いつかなかつた。それで土木屋さんを養成してほしいと、町村金五知事と開発局の堂垣内尚弘氏から要請があつたんです。

市町村もお金が無いから、「まともに人を雇うために設計会社を作つたらいいんじゃないか。お金は北海道が出す、人は開発局（国）から入れる」ということで、昭和三十五年に北海道開発コンサルタント株式会社（平成十三年に株式会社ドーコンに社名変更）ができたんです。私は



昭和39年 北海短期大学土木科一期生謝恩会 (横谷さん提供)

三十九年に短大を卒業して、一年間役所において、ドーコンに入ったのは昭和四十年です。そのときは役所の上司から「開発局にいても所長くらいにしかねないぞ。こういう会社があるんだけど行かないか」という話が出て、大先輩がドーコンに入っていましたし、給料も五割増にするからと言われて、それで移ったんです。百二十、三十名ぐらいいました。大きな会社のあちこちから出向でも来ていました。

多くの社会人が学んだⅡ部。当時の先端技術を学び、人脈も広がる

土木短大のⅡ部は、ほとんどが働きながらという学生でした。年齢もいろいろでした。開発局の人が七、八人いたと思います。それから道庁関係の人、北電の人、自衛隊の防衛施設局の人などもいました。三笠炭鉱にいて、そこから汽車で通学していた人もいました。遠いところだと、小樽の役所の人もいました。

私は札幌開発建設部の道路課にいましたが、隣りに治水課があつて農業関係の人もいましたから、会話はすんなりできたわけです。みんな高校卒業後数年経っており、和気あいあいとしていました。卒業してもそのまま自分の職場に戻るの、勤めは変わりません。同じ開発局の人もいました

し、道庁の人も似たような公務員ですから、友人関係はすぐできました。

私は役所の寮にいましたから、会社が五時に終わって一度寮に帰りました。寮には寮母さんがいましたから、ご飯を食べてから大学に行きました。授業は六時から九時まで。ご飯を食べる時間がない人や遠くから来ていた人は、おにぎりかなんかを持ってきていたと思います。その頃、工学部に食堂は無かったですから。

学生は工業高校からの人が多かったです。私は測量なんかも国家資格を持っていたので、そういう人は測量の講義は出なくていいと先生に言われました。高校で一度習ったことがあるので、わかりやすかったというのがあります。工業高校の学びを補ういい機会になりました。解析など難しいものは、高校だけでは足りないところがあつたので勉強になりました。

先生方は防衛施設局のトップの人とか、旧国鉄の局長とか、開発局の偉い人とか、北大からは橋梁関係の先生とかが来ていました。建築関係はドーコンからも行っていたし、卒業生はドーコンや室工大出身の関係がいましたから。局長クラスの人や、企業の社長が教えに来ていたので、そこで私たちは面識ができました。

伊福部宗夫先生が初代の短大土木科長でした。伊福部先生の道路工学、道路の凍土に関する授業に関心がありました。それと伊福部先生は授業中、国語的なことを教えてくれるんです。例えば、授業を筆記するとき、先生

はゆっくり喋らないので、そのまま書いていたらついていけません。そこで先生は、文字を楷書ではなく草書体で書くようにすればいいと教えてくれました。「である」は線を引くとか、数字の「数」はこうやって書けばいいとか。授業中、みんなにそういう接し方をしてくれました。

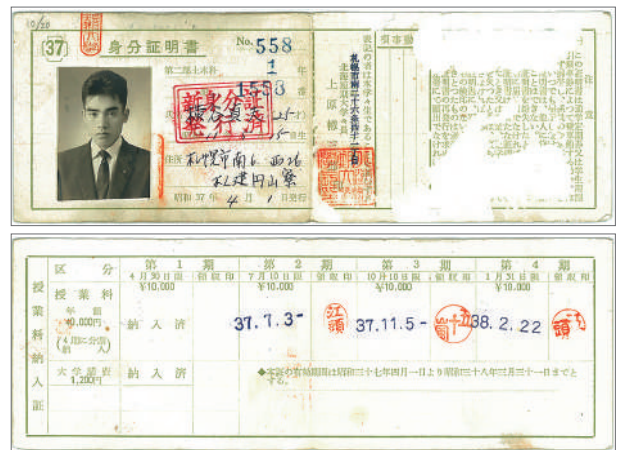
伊福部先生はアイヌのこともかなり詳しくて、授業中によく話をしてくれました。「シヤケ」はアイヌ語で「チエプ」と言うとか。アイヌ文化に関する本も書いていました。学生はみんな買ったと思います。そういう研究もされていた。

弟さんが作曲家の伊福部昭^{あきら}さんで、ゴジラの映画音楽を作曲した方です。その話もいろいろとしてくれました。ゴジラの音楽を入れるために、撮影の合間に譜面を書くらしいです。すごい兄弟ですよ。すばらしい先生でした。

寒冷地の北海道開発を担ってきた実績

伊福部先生は道路の凍上関連の先生です。北海道の道路を改良するときには、地域によっては道路を置換しているんです。一番深いところでは一米ートル二十ぐらい土を全部取って、そこに碎石とか砂利とか火山灰を入れる工事です。札幌、小樽は八十センチメートル、函館に行ったら六十センチメートルぐらいです、暖かいから。凍上はしても問題ないくらい取り替えます。

私も道路をずっとやっていた関係で、工学部に三、四か月ぐらい、道路工学概論を教えに行ったことがあります。



北海短期大学身分証明書、上が表面、下が裏面（横谷さん提供）

なのか、そこに行けばわかるようになっていたんですが、予算がつかなくなって外されてしまいました。ああいう大事なものは戻してほしいです。一般の人にも知ってもらわなければならないと思います。

現職の頃、私が手掛けたのは、国道二七五号の浦臼の町とか、新十津川、月形、当別を測量から設計、監督まで全部やりました。舗装なんてその頃やっていなかったんです、国道一二号だってそうです。国道、地方道は建設省（現国土交通省）です。舗装でアスファルトを練るプラントを、工事現場にひとつひとつ作っていきました。それも監督しないといけない。そんなことは勉強したことがなかったです。

札幌新道、岩見沢バイパス、旭川新道なども監督しました。美香保のほ

北海道は寒さとの戦いです。道路を作るときはそういう規格があつて、荷重からではなくて凍上から決めているんです。そして北海道の道路は、本州と比べると路肩がずっと広い。冬に除雪をするから、雪が溜まってもいいようになっていきます。

以前、国道二三〇号の定山溪手前にある、道路の事務所に資料がたくさん展示されてあつて、どういふ状況で道路ができてい

う、東区側は地盤が悪かった。札幌市内の下水道はきちんと整備されていなくて、普通のスコップで三十センチメートル以上掘ったら水が出てきました。泥炭地ですから道路もガタガタ。そうなるのと凍上の問題よりも、軟弱地盤の対策をしないといけない。泥炭地をまず押さえつけて、上に重りをかけて沈ませて道路を作る。ですから、場所によっては道路で水を抜くので、家が傾いてしまったり……。そういうのは補償費を払って直していただきました。

札幌オリンピックの大倉山シャンツェを作る

昭和四十七年の札幌オリンピックにも携わりました。開催二年前の昭和四十五年ぐらいから、ドーコンから派遣されてオリンピック組織委員会に行きました。オリンピックの施設はどこもできあがっていない。真駒内も無かったし、大倉山シャンツェはあったけれど古かったです。宮の森、手稲山の大回転、恵庭岳、リュージュ、ボブスレー、藤野や手稲、そういう施設建設地の調査に行き、それぞれ入札から発注までやっていたんですが、調査は大変でした。恵庭岳に登るにも何もないですから。私はコンサルですが、市役所からも来ていたし、銀行の人もいました、スキー連盟、スケート連盟、そういう人たちも同じところにおいて、いろいろな話を聞くことができました。

私自身がやったのは大倉山シャンツェです。ドーコンで受注して、私がメインになって測量をかけて施行しました。土工関係とスタンドを担当しました。私も、まさかジャンプ台を作ることになるとは思っていませんでした（笑）。建築の人も一緒にやりました。コンクリートのランディング

バーンはドイツの有名な方の線形を使って、その線形を伊福部先生が対応していました。ボブスレーやリュージュコースの滑るときの抵抗や、スプードとカーブの関係などもチェックされていました。

当然ながらコンピュータは無いですから、計算尺とか、手回し計算機を使いました。手回し計算機というのはタイプライターみたいな形で、手で回すものです。構造計算は計算尺。いつも持ち歩いていました。今考えたら、よくやったなという感じですよ。

飛行場もやりました。新千歳、函館、釧路。奥尻空港も最後のチェックに行きました。稚内も、女満別空港も少し手掛けました。高速道路も、インターチェンジもやりました。旭川から室蘭インターの間は大体やりました。

ドーコンにいるとき、堂垣内さんがキャップになって北海道道路史調査会を作って『北海道道路史』を刊行しました。道路関係の概論を書いた三部作（行政・計画編、技術編、路線史編）で、私も執筆しました。いろいろやらせてもらったのは、上司のおかげだと思います。できないからやらないのではなく、挑戦するという気持ちを持っていましたから。

しかし、仕事は激務でした。一月くらい家に帰れないときもありました。北四条ビルの下にオリンピアという喫茶店が今でもありますが、そこで食事をしたりしてました。食事は夕方五時になったら会社から出るようになっていたんですが、それでは足りないのでラーメンを作ってもらった

り。マンションの五階と六階に会社の部屋があつて、雑魚寝することもありました。夜中十二時までにはやりました。明るくなったら、検定で持っていく書類を布袋にいっぱい入れて電車に乗ったり。いやあ、ひどかった。

人とのつながり、コミュニケーションの大切さを知ってほしい

昭和五十七年に（短期大学土木科、工学部土木工学科、工学部社会環境工学科の同窓会）「北社会」を発足しました。「北社会」という名前は、本当はI部一期生の人に伊福部先生がつけてくれたんです。それを大きくしよう、総会なども長くやっていこうと。（北海学園大学同窓会）「豊平会」は知っていましたけど、工学部も作ったほうがいいということになりました。I部一期生とかいろんな人を入れて、私がいたドーコンの北四条ビル



工学部へ寄贈した柱時計の前で（横谷さん提供）

に、仕事が終わってから集まりました。

工学部の図書館に入ったすぐのところには大きな柱時計があると思いますが、あれはII部一期の有志が卒業のときに寄贈したものです。裏に名前が入っていると思いますが、私が幹事になってやりました。

先生方には随分お世話になりました。総会、懇親会とかホームカミングデーで会いますから、そのときにいろいろと昔の話をしたりしました。北海学園では学業以外も含めて、すごく勉強になりました。やっぱり人との繋がりが良かったです。

私は勤めていたので、I部にはなかなか行けなかった。II部だったから行けたんです。そういうところは北大にも、室蘭工業大にも無いし、ここにできればいいなと思っているときにできたので、非常に良かった。四年制なら尚更良かったですけど（笑）。

私たちの頃は、自分で道を切り拓いていくとか、好奇心を持ちながら人生を歩む、挑戦をしていくという心意気があったと思います。時代背景もあるし、そう育てられたのもある。独立させられるのが早かったから。

今の時代は、高校、大学に行っているけど、その先どこへ行ったらいいかわからないという人が多いでしょう。私自身、中学を卒業するまで二回転校しているから、高校を選ぶときも親から言われたところではなく、自分でどこがいいかと考えました。たまたま、中学に岩見沢農業高校を卒業した先生がいて、そこは農業土木の学校だったから、土木を知るきっかけとなった。建築にも興味があったけれど、土木がいいかなと。

自分で物事を決めていかなければならなかった。親から言われてという人もいたかもしれないけれど、ほとんどの人は違うと思います。叔父の家にいるときに叔父とも話はしましたけど、自分でもちゃんと考えを持っていないといけなかったんです。

私はどちらかというと、新しいことにチャレンジするほうでした。できなかったら、どうすればできるかということを考えればいいわけで。教えてくれる先輩もいるし、学ぶための本もあるし、そういうもので肉付けしていけばいいと思っていました。

短大を出たんだからという意識があった。同期もそういう人が多かったです。私は人と会うのが好きでしたから、いろいろな人と繋がることになりました。

交換留学などで海外に行く学生がいると思いますが、将来的にもいいことです。海外のことをいろいろ知っていただきたいです。

それから今、スマホの影響でコミュニケーションを取れていない人が多く、とよく聞きます。小さい子どもから大人まで、地下鉄やバスに乗っていても、交差点を歩いても、みんなスマホを見ています。三か月ぐらい前に『スマホ脳』という本を買って読んだんですけど、日本だけではなくて世界的にこういう現象が起きているそうです。

大学を卒業したら「はい、さよなら」で、大学に来ない人もたくさんいます。先生とコミュニケーションが取れていないのかなど。そうやって社会に出てしまうから、トラブルを起こしたり、言われたことしかやらないという人が多くなってしまうのかもしれない。

以前、工学部の先生から相談されたことがあります。「卒業して立派な会社に勤めたけれど退職したいと言っている、どうしてだろう」と。それはやっぱり、親との関係でコミュニケーションが取れていないと思うんです。叱ることも少ないでしょう。でも、会社に入ると違いますから。ですから、私はコミュニケーションが一番大切だと思います。それをやっていたら卒業しても人と繋がりができて、いろいろな方に助けてもらえるんです。大学でもきちんと対応をとるべきだと思います。

スポーツでも何でもいいんですけど、何かひとつ飛び抜けたものを持つてほしいと思います。自分で幹をきちんと持つと、枝葉はあとからでもできますから。自分自身の本心は変えられないけれど、いろいろな人と会って「こういうときにはこういう考えもあるんだな」と受け入れることも大切です。

(二〇二三年七月十九日 インタビュー)

【プロフィール】

横谷 貞夫（よこや さだお）

一九三六年五月十五日、岩見沢市生まれ。一九五六年札幌伏見高等学校卒業。一九六四年北海短期大学土木科Ⅱ部卒業・一期生。

語り継ぐ北海学園の教育者

松葉杖の社会科教師 林和吉先生（経済三期）

最後に、人生を北海学園とともに歩んだ林和吉先生について、二〇一七年『北海学園大学学報』に掲載されたコラムを引用して振り返る。



経済学部経済学科
昭和31年卒・3期生

はやし かずよし
林 和吉

パラリンピック東京大会が、五日間の日程で開催されたことはあまり知られていない。四年前のローマに次いで二回目の大会だった。昨年のリオパラリンピックの様子は、テレビや多くの紙面を沸かせ関心が高まっていることを伺わせる。

時代がこうした方々へ漸くスポットをあて始めたことを歓迎しつつ、嘗て、障がいを持つ人々にとってスポーツはおろか、生きることさえも、どんなに大変であったかを、林和吉（経済三期・元北海高校教諭）先生の人生を通して振り返る。

林先生は、一九二七（昭和二）年六月、空知郡北村に農家の五男として生まれた。

生まれながら足に障がいを抱えていた。九十年前、まして泥炭地を開拓した田畑が広がる田舎での生活、どんなに大変なことだったかが想像できる。けして弱音を吐かなかった先生ながら日記にその苦悩が滲む。

一九三八（昭和十三）年、尋常小学校五年「中学進学を希望するも、障がい者は不可と告げられた」

一九三九（昭和十四）年、尋常小学校六年「楽しみにしていた修学旅行は前日になって安全を保障できないと担任から参加を拒否された」

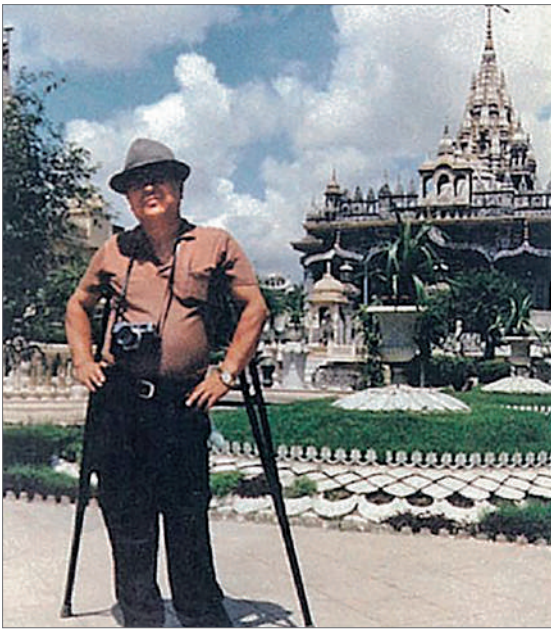
そんな林少年が高等科一年の一九四〇（昭和十五）年、北中・札幌は受験可能であることを先生から知らされ、受け入れる中学がある事を初めて知りこのことが人生の転機に繋がる。

一九四二（昭和十七）年、札幌商業第一本科入学（後に北海中学へ編入）、一年生五クラスに足の不自由な生徒が五名もいて、驚いたそらだ。

一九四五（昭和二十）年三月六日 国民勤労働員令

二〇二〇年、日本で二回目となる東京オリンピック・パラリンピックまであと三年、真夏の東京、日本選手団の活躍が楽しみだ。

一九六四（昭和三十九）年東京五輪終了後、ひっそりとではあるものの、



林和吉先生追悼集『人生意気に感ず』より引用

三月十八日 閣議 国民学校初等科以外の学校の授業一年間停止

五月二十二日 戦時教育令五月、第二国民として軍隊手帳が配布され、円山小学校で観閲点呼を受けた。「腰に奉公袋を下げて参加、日本も終わり」と感じた。口には出さないが」と日記にある。

そして終戦、混乱の中、苦闘は続く。下宿を追われることいく度、殆どがトイレ・食事の問題。

十月北中授業再開、生徒・教師の虚脱感、教科書不足、黒塗り等に嫌気とも。請われて、一九四八（昭和二十三）年から四年間、故郷北村で代用教員を務める。北海道の神位先生から、四年制の北海学園大学が開設されるので戻るように勧められ、一九五二（昭和二十七）年四月、三期生として入学。その後、卒業したものの、就職が決まらず学習塾を開設し、生活も漸く安定。一九六〇（昭和三十五）年北海中学（新制）講師採用。

一九八九（平成

元）年北海道高校退

職。この間本学非

常勤講師も務め

た。代用教員時代

も含め、雪の研究

者とりわけ雪崩研

究の草分け的存在

である秋田谷英次

氏、国内最大手の

調剤薬局の創業者、

大谷喜一氏、集団予防接種の注射器使い回しによる訴訟で、活動の先頭に立った全国B型肝炎訴訟北海道原告団代表、故高橋朋己氏ら多数の教え子を育てた。生徒に寄り添い励まし続けた先生の姿が懐かしい。

林先生にとって、札幌商業・北海中学・北海高校・北海学園大学は、その時々で将来に繋がる大きな希望であったに違いない。北村で、当時の先生からの進言がなく、中学進学が絶たれていたなら、北海学園大学との縁もない。一緒に札幌商業に入学した五名の足の不自由な方々のその後は知る由もないが、先生は差別や偏見の中で一生を終えていたのかもしれない、また旧制北海中学が受け入れなければ、義足の経済学者・野呂榮太郎も歴史に名を刻むこともなかった。

人は二度死ぬ、一度は心臓が止まった時、もう一度は故人を知る人がこの世から全て去った時だそう。この拙文が終戦間もない北村で、青雲塾の舞台となった豊平の愛隣館、そして北海道で教壇に立ち、教え子たちから「仰げば尊し」に送られ世を去った松葉杖の社会科教師、林和吉という同窓の教育者を、北海学園の歴史の中に語りついでくれることを教え子の一人として願ってやまない。

（文：事務部長 木村勝照、『北海学園大学学報』第一〇九号から引用）

編集後記

北海学園大学同窓会 事務局長 木村 勝照
きむら かつてる

(経済学部経営学科昭和五十二年卒・九期生)



北海学園大学同窓会の結成七十周年という節目に、無謀にも開学から凡そ十年の大学の軌跡を記録すべく、諸先輩からの聞き取りを思い立った。これには事務局スタッフの応援があったことも背中を押してくれた。この場を借りてお礼を申し上げたい。今日、本学は多方面から多くのお褒めの言葉を頂く、はたしてそうなのか、誰がどこでどんなにもがいて悪戦苦闘の歴史を重ねていったのか、是非記録に残したいと思ったからだ。当然、一朝一夕に大学になったわけではない。学園を築立った同窓諸氏、むろん教職員にはこの歴史を知ってほしいと思う。

さて、終戦から三年経過した頃、北海中学から仙台の第二高等学校を経て東大へとすすんだ、阿部利雄という人物が琵琶湖干拓田に入植して不慣れな田植仕事に苦戦していた。農作業は未経験だった。親交のあった戸津高知先生の健在を確認すべく、母校の教壇にあった後輩に便りを送った。返信は、高齢ゆえ或は旅立たれたかと心配していた戸津先生ご本人からで、出札せよとの内容のハガキが届く。阿部氏はその後、北海学院、北海短期大学、北海学園大学全ての設置認可に事務局として関わった。

この頃、氏は現在の豊平校地約三万坪に大学を建てるには、(すでに)狭いと感じたとの記述がある。なんでも学校の裏には同じく三万坪の土地があり、戦時中五万円で買ってくれの話があったそうだ。時すでに遅く、ここを取得しておけばの後悔が残る。氏によれば、北海学院、短期大学への申請時、必ずしも教職員がもろ手を挙げて賛成したわけではなかった。北海学院に始まる動きをよしとしない人たちも少なくなかった。声を上げたのは北海、札商の年齢の高い教員であった。年齢故、真っ先に解雇の対象となる懸念をもったと記録が残る。

そうした中、北海学院が学生募集を発表するや、夜間・昼の別なく勉強の機会に恵まれなかった人々が競って入学した。したがって、学園財政を心配した理事、並びに自分たちの犠牲の上に学院が誕生するのではないとの疑念を持った両校の教職員の心配はひとまず晴れ、財政は初年度から黒字を示した。翌年には短期大学の設置が計画された。

短大の設置も最初から問題がおこった。
中島公園の端に、開道五十年記念博覧会会場跡を利用して、札幌文化専門学校があった。同校も同じ年に北海学園と同じ名称で「札幌短期大学」

を申請しようとしていた。札幌市に二つの短大の設置申請、それも名称で競合する関係となった。専門学校の校長は札幌出身者でもあった。

同校は、新聞に大学名称を先に公表したり、文部省への認可申請も先を越されたりで、本校は北海短期大学となった。

そうやって、開学した北海学園大学（短大）同窓のお話をこの度伺うことになった。一期（昭和二十五年入学）〜十期（昭和三十五年入学）までの卒業生のリストアップから始めたところ、まだ終息していなかったコロナ禍の影響もあり、実現まで中断を含め長い時間を要した。一期生のインタビューは実現せず、二期から十期のOBのお話は伺うことができた。三期（昭和三十一年卒）といっても九十才、諸先輩の中には、万全ではないお体と相談しつつの取材となった方もいらした。何しろ七十年以上も前のこと、記憶を蘇らせるのにご苦労をお掛けした。残された時間も限られた。やはり、今やらなければと意を強くした。

一様に、間借りの校舎、施設もなく、お金のない大学、手作り、密接な教職員との関係などを表現は異なるものの、懐かしそうに語る姿が印象に残った。いま私たちが、原点に立ち返り、今一度思いを馳せねばならない、古き同窓の青春があった。

とりわけ、若き日の諸先輩が、自前校舎もなかった時代を経て、教職員の垣根など全く感じさせず、相互に寄り添い母校の名声を高めることに腐心したかを、改めて知ることができた。

戦後の学制改革に翻弄されながらも、常に時代を見据え、進取の気概が北海学園にはあった。そして、社会に有為なる人材を送り続けることに怠りはなかった。北海道の黎明期、先陣を務めた北海英語学校に始まる北海

学園の伝統があったればこそ相違ない。

最後に、編集全般にわたって慎重かつ厳密な作業を心掛けて参りましたが、不手際がありましたら、何卒ご寛容にご容赦頂きたくお願い申し上げます。

尚、結成六十年から十年の歩みを纏めた『結成七十周年記念誌』は、令和六年度の全ての事業を網羅して、明年六月の発行を目途に編集作業に入っております。

ご期待頂ければ幸いです。

祝同窓会結成七十周年、

祝東北学院大学総合定期戦七十回、
ついでに祝筆者古希七十才！

■ 参考資料

林和吉先生追悼集『人生意気に感ず』

北海学園大学『学報』

北海学園大学三期会『北海学園大学卒業25周年記念 人生意気に感じて』

『北海学園大学創設篇 苦難坂私学道』阿部利雄著

北海学園大学体育会山岳部『創立50周年記念誌』

北海学園大学同窓会『豊平会報』

北海学園大学同窓会『北海学園大学同窓会50年のあゆみ』

北海学園大学同窓会『北海学園大学同窓会60年のあゆみ』

『北海学園大学物語』島倉健治著、北海学園大学物語編集実行委員会編

■ 写真・資料提供（順不同）

株式会社ラボット

株式会社人力社

同窓生の皆様

同窓会各支部

■ 編集

木村勝照

福原正己

■ 制作協力

制作…株式会社人力社

イラスト…橘春香

北海学園大学同窓会結成 70 周年記念誌
—はじまりの 10 年—

2024年10月26日 発行

発 行	北海学園大学同窓会 〒 062-8605 札幌市豊平区旭町 4 丁目 1 番 40 号 豊平キャンパス 6 号館 1 階 電話 (011) 841 - 1161(代) URL https://dousou.hgu.jp/
編 集	株式会社人力社
印刷所	株式会社須田製版
製本所	石田製本株式会社
